
空の瞳

璃慧紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の瞳

【コード】

N04930

【作者名】

璃慧紗

【あらすじ】

主人公は少女を助け、その人生を終えた。しかし実はその少女は人間界に迷い込んでいた天使だった。お礼に、と神に転生を許可される。

転生した世界は元の世界とは違う異世界。生まれたのはサイファルド王国の公爵家だった。

主人公は気の赴くまま生きていく。

1話：神からのお礼（前書き）

はじめまして。璃慧ルキエ紗と申します。

このたびは私達の小説をご覧ください、ありがとうございます。

1話：神からのお礼

それは唐突だった。彼が、いつもどおり学校に向かおうとしているとき。家を出て、道を歩いていると、5、6歳くらいの女の子が道に立っていた。いつもなら何事もなく歩き去っただろう光景は、少女が道の真ん中に立っていたことと、少女にたいして大型トラックが向かってきている事で変わった。

「なっ！？間に合えっつ！！！」

彼は荷物を投げ捨て、道路に飛び出すと、女の子を突き飛ばした。向かってくるトラック。彼はそのまま意識を手放した。

「ん。。。」

「気がついたか？」

「貴方は？」

彼が気付くと、そこは白しかない空間だった。

「私は世界を作った者。お前達が神と呼んでいる者だ。」

「神？・・・ああ、俺は死んだんですね。ここは？」

自分を前にしても物怖じしない彼をみて、神は楽しげに笑った。

「お前は肝が据わっているな。ここは、そうだな、私がいつもいる場所。ただそれだけの場所だ。」

「つまり、貴方しか存在できない場所であるか？」

「そのとおり。私が呼べば来れるのだがね。来ても私の気でまいるように、誰も来ない。お前は特殊だな。」

「そうですか。で、俺はなぜ呼ばれたんでしょう。」

「それはな・・・」

そこで神は腕を軽く振った。それにあわせて何も無い空間から一人の少女が現れた。

「この者を助けた礼だ。」

「その子・・・？ああ、さっきの子か。助かって何よりです。」

「あつ！」

「ん？」

そこで少女が声を発した。

「ありがとうございます。私、天使で、天界から人間界に魂の回収に行く予定だったんですけど、天界からつながる扉を間違ってしまったみたいで、迷ってたんです。そのせいで貴方を巻き込んでしまって・・・」

「大丈夫。過ぎたことは気にしませんよ。はい、気にしない気はない。次、同じことをしなければいいんです。」

彼は微笑むと少女は顔を真っ赤にして頷いた。彼がそれを疑問に思っていたりしたが、そのまま神との会話に移った。神は理由を分かっていたりしたが黙っていた。

「それで、だ。お前には転生する機会をやるうと思う。お前はまだ十何年しか生きていないだろう？どうだ？」

「転生ですか・・・同じ世界には不可能ですか？」

「ああ、悪いな、お前の魂を元の世界に戻すことは不可能だ。魂は一度死ぬと浄化される。無論、記憶消去もな。そうしなければ魂に負荷がかかり魂自体が消滅してしまうのだ。そして浄化と同時に世

界の記録からもいない者として認識される。記録を変えることは不可能、だから戻すことは出来ない。さて、さきほど転生するには記憶は消さなければならぬと話したが・・・お前は記憶を消さなくとも大丈夫であろう、強い精神力を持っている。ならば、このまま別の世界へと転生するのに問題はないだろう。」

「そうですね。まあ、特に未練はないのでいいです。」

「そうか。では、そろそろ時間だな。これ以上お前の魂に負荷がかかる前に送ろう。」

そして神はまた腕を振った。彼の視界がだんだんとぼやけていく。

「ではな。次会うのは、お前が生涯を終えたときだな。」

「ええ、また・・・ありがとうございます。」

「それはこちらのせりふだ。」

神の言葉を最後に彼の意識は沈んだ。

「はは・・・面白いやつだったな。またあつのが楽しみだ。」

「あのおつ、神様。」

「何だ？」

「あのお方の魂は、かなり澄んでいました。天使である私が見えるくらいに。もしかすると……。」

「そうだな、あの世界を管理している者に気に入られるかもな。」

「ですよね……大丈夫でしょうか……？」

「大丈夫ではないか？あの精神力は私に近い。問題はあまい。それに、」

「？」

「才能がないわけではないからな。ここに来たことは影響しているだろう。」

神と天使は今ここにいない彼に思いを馳せていた。

1話：神からのお礼（後書き）

作品の批評、おまちしております。おてやわらかにお願いします。

（汗）

誤字・脱字等がありましたら、知らせていただきたいと思います。

2月16日・文章を変更いたしました。kingさんのアドバイスを参考にいたしました。感謝です！

3月28日・加筆いたしました。ルインさん、指摘ありがとうございます。

2話・誕生、そしてそれから（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

2話：誕生、そしてそれから

神との邂逅から時間が過ぎ、私は異世界に生まれた。自我が安定したのは三歳あたりから。今は四歳となった。

生まれた場所はサイファルド王国の公爵家の長男。貴族！？と最初は驚いたが、両親は厳しい訳ではなく、私の望みどおり気の赴くまま生きている。

名前はサイフィアス・ド・ロデス・ファルディナ。なんでも、王族の血を引いているらしく、ファルディナはその証らしい。

「サイフィアス様、今日はサイファルド王国の歴史についてです。よろしいですか？」

「はい、ミスター・ジュリアス。よろしくお願いします。」

今は貴族らしく家庭教師と勉強中。子供だから覚えが早く、自分も勉強することが楽しくなった。文字も問題なく読める。この世界の文字は英語の筆記体に近かった。

「この国は神の力の一部である方、サイファルド様を信仰しています。サイファルド様は空神くうしんです。その存在は我等を照らす輝く太陽のごとく。その髪は我等を導く月のごとく。その瞳は我等を包む空のごとく。そういわれています・・・。」

「空神様と出会われた方が最初の王です。神はおっしゃいました。空神はそなたらを守護するだろう。と・・・」

3ハイド（だいたい三時間くらい）で授業は終了した。ちなみに分はニードで表す。

「ご苦労様でした。サイファイアス様はとても真面目にこなされますから、あと歴史は数回で終了です。」

「ありがとうございます、ミスタージュリアス。ミスターのおかげです。」

そういつて私が微笑むと教師は数秒固まった。私が首をかしげると、慌てたように動き出し、曖昧に微笑んだ。

「では、また明日も同じ時間に参ります。失礼いたします。」

「はい、また明日。」

立ち去る彼を見送り、私はなんとなく外へと視線を転じた。

ガラスに映るのは母譲りの銀髪と、両親どちらにも似ていない水色の瞳。見る角度によって、色が濃くなったりと変化する、空のような瞳だ。白目の部分も若干水色だった。

最初は驚いたが、なれてくればたいしたことはなかった。どうも、王族に近いものに現れる瞳らしい。

言い忘れていたが、私が私と言うのは、生まれてからそう言ってきたせいだ。俺で過ごすわけにも行かないので、問題はないのだが。

思考の海に沈んでいるとき、メイドが夕食の支度が出来たことを知らせてきた。

私は返事をして、部屋を出た。

自分の新しい人生は充実しているんじゃないかとかんがえる、今日この頃。

2話・誕生、そしてそれから（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

3月27日修正いたしました。指摘ありがとうございます。

3話・家族との夕食（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

3話・家族との夕食

「どうぞ、サイフィアス様。」

「ありがとうございます。」

椅子を引かれて席に着く。夕食の席にはすでに母と父が来ていた。

「お待たせしました、父上、母上。」

「いいえ、大丈夫ですよ。」

マナーを気にせず、会話をしながら食事をする。なんでも、私の祖父に当たる人が静かな食事が嫌になっただけ、こんな風になっただけ。たそうな。

「今日はどうでしたか？何の授業をしたんです？」

「今日は、サイファルド王国の歴史についてです。空神様について学びました。」

「そうですね。ミスター・ジュリアスは貴方がとても真面目だと褒めていらっしやいました。」

「さすがは私の息子だな。剣の鍛錬はしているか？」

「はい、父上。毎日続けています。」

「それならばよろしい。くれぐれも無理はしないように。」

「そうよ、フィア。陣術もやっているのだし。」

「大丈夫です、母上、父上。」

その後はこれからの予定などを話した。食事が終わると父上と母上は休むために部屋へ、私も自室へと下がった。

月明かりの中読む本はランプを使って読むより楽しさがあるとお

もう。

この世界の文明は元いた世界より進んでいなかった。中世ぐらいだと思う。昔のヨーロッパみたいに馬車が走るし、電気がない。けれども、術具とよばれるランプのようなものが存在する。下水の処理が不完全で、公爵家の領地に出掛けたときのシヨックは大きかった。それを改善するためにいろいろと進言したのが一年ほど前。今となつてはいい思い出だ。

窓から差し込む月明かりをみて、なんとなくテラスに行ったのがきつかけだった。月の光は想像以上に明るく、なぜか安心感があった。空神の髪は月の如し、と言われたことを思い出し、空神を連想するからか、と自分で納得した。夜の読書はもはや習慣となつていた。

テラスにでて、置いてある椅子に腰掛けた。この部屋は二階にあるため、月の光を遮るものはなかった。

ぱらぱらとページをめくる。読んでいる本は陣術の本だ。

陣術とは、文字通り陣を描くことで使用する術のことだ。空中に陣となるものを書き、呪文とともに使用する。

「陣術は攻撃、守り、その他にもさまざまな方法で使えるものである。そして、精霊と呼ばれる者と契約をし、術を行使する。精霊と契約をしなくとも使用は可能だが、契約した場合は力は格段に劣り、使用できる呪文は少ない。精霊なしで陣術師となるのはかなり困難である、か・・・。」

なによりも大きな問題があった。精霊との契約だ。陣術師となるに必要な精霊。精霊は魂の綺麗なものでしか出会えないのだという。このことを知って、私はあきらめを持っていた。

「魂ねえ・・・俺が綺麗な訳ないよ・・・。」

自分の魂は綺麗でない。私はつい俺に戻りながらも考えていた。誰とも分かり合おうとせず。ただ、自己満足のために人に手助けをする。そんな生活だった。

生まれ変わっても、自分勝手に生きているのだから。

「ああ、もう寝よ。子供の体はめんどくさいな・・・。」

私は本を閉じると部屋に入り、ベットにもぐった。すぐに眠気が来て、いつしか私は眠りについていた。

3話・家族との夕食（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

4月3日修正しました。Shinnchanさん、指摘ありがとうございました。
させていただきます。後の進具合からこのようになりました。

4話・鍛錬の日々(前書き)

よんでくださりありがとうございます。

4話・鍛錬の日々

「ファイア。剣を持って、中庭に来なさい。鍛錬をしよう。」

「はい、父上。すぐに行きます。」

数日後。どうやら今日は仕事がないらしく、王宮勤めの父上は家にいた。私はいつもどおり剣の素振りをして、陣術について学んでいた。そして、昼食の席でそういわれたのだ。私は言われたとおり、いつも使っている剣（真剣ではない）をもって中庭に向かった。父上はすでに木に寄りかかって待っていた。

「来たか。では、始めようか。」

「はい、よろしく願います。」

どうやらこの公爵家では家長自ら剣を教えるらしく、私は父上に教わっていた。陣術も陣術師から教わるらしいが、この場合母上が陣術師（精霊契約あり）なので、母上に教わっている。

そしていつもどおり剣の素振りから始めた。このごろは体力もついてきて、素振りもましになってきたと思う。

素振りが終わり、ふと父上に視線を向けると、執事が持ってきた

タオルで汗を拭きながら微笑んできた。私も笑みを返す。

父上は黒に近い銀髪に紫色の瞳を持っていた。王族は銀髪でその血は父上と母上のどちらも引いているから二人とも銀髪なんだとか。王族云々はともかく、両親と同じで自分も銀髪である嬉しさを改めて感じた。

だから、唐突に父上がこんなことを言ってきたのにも反応が遅れてしまった。

「では、ファイア。私とを模擬戦をしようか。」

「……え？」

そしてそのまま模擬戦突入。気ままに生きてる自分に戦いは似合わない、とか思いつつ父上と相対。

とにかくやるしかない、と思い切って切りかかった。

キーン、と剣がぶつかる音がする。私がいくら切りかかっても、父上は殆ど動じない。仕方ない、と私は今の自分出来る力を込めた突きを出した。はじめられるのも計算に入れ、続けて切る。

が、結果は簡単に動きを封じられ、のど元に剣を添えられた。

「……私の勝ちだな、ファイア。上達しているじゃないか。」

「ありがとうございます。父上。そうでしょうか？自分ではよく分かりません……。」

父上には褒められたが、私の気持ちはまだまだだといっていた。それでも、褒められたのは素直に嬉しかった。顔が自然とほころぶ。そのまま家庭教師が来るまで、父上との鍛錬は続いた。

「お疲れのようですね、サイフィア様。今日の授業はお休みになさいますか？」

家庭教師のジュリアスさんに開口一番にそう聞かれた。それを聞きながら疲れた体を引きづりながら席に着く。

「大丈夫です。剣の鍛錬をしてました。それに、ミスターの予定が狂ってしまうでしょう？」

「予定は心配ありません。実を言うと、サイフィア様の授業は他の方に比べて早いところまで進んでおいでです。一日休んだ程度では、問題ありませんよ。」

「そうなんですか？・・・でも、勉強します。せっかく来てもらっているのに、授業なしでは駄目でしょう？なので、お願いします。」

「分かりました。くれぐれも、無理はしないでくださいね。本当に、予定の心配は必要ありませんから。」

念を押してくるジュリアスさんは優しいんだな、と改めて思った。他の貴族の生徒より進んでいるなんて嘘をついてまで気遣ってくれるなんて、ジュリアスさんはいい人なんだと思えた。いくら私が授業に取り組んでいても、今まで一回も休みなく授業を続けていても、他の子も真面目にやっている（はず）だろうし、多少頑張っているだけの自分はむしろ遅れているだろう、そう考えていた。

その気持ちが伝わったのだろう、ジュリアスさんの声がさらに慌てた。

「本当ですからね？サイフィアス様は決して遅れていませんよ？」

もしかやエスパーですか？と思っってしまったのは秘密だ。そして3
ハイド、いつのどおり授業をして、ジュリアスさんは帰っていった。
最後まで気遣ってくれたので、私の中でジュリアスさんは完全にいい人、と認識された。

4話・鍛錬の日々（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

皆様、あけましておめでとございますー！ー！

5話・成長の中で - 別視点Ⅰ（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

5話：成長の中で - 別視点I

私の公爵家には、四歳になる息子がいる。名前をサイフィアスと名づけた。妻と相談して決めた名前だ。容姿は王家の血を引く証の銀髪。私の髪よりは妻の髪色に近かった。そして・・・空色の瞳。角度によって変わる色が強い印象を持たせる。私も妻も、この瞳について思うところがあつたが、先のことは分からない。あえて考えないようにしていた。

「さあ、リリー。今日は領地の視察に行こう。」

「はい、あなた。」

私の妻、リリーは本名をリリアナ・ド・ルイクス・フィランゲージと言う。妻と私は貴族社会には珍しい恋愛結婚だ。今日もお互いに笑みを向ける。

馬車が走り出す。妻は、外の景色を見ていた。今日はフィアはいない。家庭教師と勉強中だ。私も、つられて外へと視線を転じた。

音も立てずに馬車が進む。一年前にはなかったことだ。こうなったのも、フィアのおかげだ。

一年ほど前、公爵家の領地は他の領地と同じくらい環境が整って
いなかった。道はガタガタ、下水の処理も不完全だった。

きっかけは三歳だった息子を連れ出した時だ。視察といって領地
を見せたら、息子は驚いた顔をして、帰るときには落ち込んでいた。
調子が悪くなったのかときけば、大丈夫だといって、早々と休んで
しまった。

数日後。フィアは私の部屋に來ると、開口一番切り出した。

「ちちうえ。おはなししたいことがあります。」

「なんだ、フィア。いってごらん。」

まだ幼い息子の頼みだ、ほしいものがあれば与えるつもりだった。
しかし、続けられた言葉は、想像していないものだった。

「この前 رفتりようちについてです。わたしが思うに」

それからはすごかった。息子は領地についての改善点を提示して
きたのだ。たった数日で考えたことにしては、信じられないことだ
った。三歳であることも含めて。

そしてその中身はぜひ取り入れるべきものだった。私はすぐ頷き、

さっそく取り掛かった。息子は本で読んで考えた、とは言っていたが、三歳児は考えもしないだろう。

それらを含めて、私の息子はかなり聡明だった。

領地の視察から数日。久しぶりに見た領民は、皆元気そうだった。それに嬉しさを感じる。それを他の貴族は分かるうとしない。悲しいことだった。息子にはそういう考えを持って欲しくない。私はそう考えて、力を使用する剣の稽古は自分で息子に教え始めた。剣は容易に人を傷つけられる。それを分かって欲しいからだ。

息子には毎日素振りを言いつけていた。陣術も妻から習っているらしい。今の力量を知るため、久しぶりに息子と鍛錬をした。

中庭で切り結ぶ。何度も切りかかってくるが、私には当たらない。想像以上にキレがよく、鍛錬の証がみて取れた。あきらめたのか一度切りかかるのを止め、突きを放ってきた。剣に乗った殺気が感じられる。殺気を放てるまでになつたか、と嬉しく思いながら私は息子の首筋に剣を当てた。

「・・・私の勝ちだな。」

「ありがとございました、父上。」

その後はこれからどうすべきか話した。その向上心には目を見張るものがあり、親として嬉しく思った。慢心もなく、このまま行けば腕も上達するだろう。

「では、そろそろじかんですので、行きますね、父上。」

「ああ。そうだ、ファイア。」

「はい？」

「この前領地の視察に行ったんだが、かなりよくなっていた。」

「そうですね。それならよかったです。」

立ち去るとき、見せた笑顔は太陽のごとく私のこころに喜びをくれた。

ファイア……どうかそのまま、澄んだ魂をもっていてくれますように。たとえ、伝説とされるものを持っていても……

5話・成長の中で - 別視点Ⅰ（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

6話・湖畔にて（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

6話：湖畔にて

「その者 光を導き 我の先を照らす 名をフラッシュロード・・・
これはライトみたいなもの？たとえば抽象的だな・・・」

本を片手に持ちながらさくさくと道を進む。もう片方の手にもっているのはバスケットだ。

「その者 炎を導き 眼前の敵を焼く 名をファイヤーアロー・・・
これは攻撃の炎、かな？一応呪文を覚えるって言ってもな・・・
数が少ない。自分でオリジナル作れるってこと？・・・おっとと。」

あまりに本に集中していたため、危うく躓きそうになってしまった。転ばなくてすんだが、次はやらないように、と一度本を閉じた。

「この森ってこんなところあったんだ・・・」

気付けばいつの間にか湖が近くにあった。いまいるのは領地にある家からも程近い森の中。この前、家のテラスから見える森はなんだとメイドに聞けば、あれはさまざま動物や種類豊富な植物があるのだと言っていた。そして私は森には縁のなかった現代っ子。父

上に頼んで、数時間だけ散策の許可をもらった。危ない生物も居らず、子供があるいても良いらしい。

そんなわけで、私はおやつが入ったバスケット&本で気ままに歩いてきたのだ。気の赴くまま歩いて綺麗な湖。なんかうれしい。

「ああ・・・ちょっと休憩かな。よっと。」

私は湖の近くに座った。風は殆どなく、本のページがめくられる危険性もないので、バスケットは横に置き、本を広げる。持ってるのはもちろん、陣術の本だ。といっても、使えるかどうかも分からない陣術の呪文を覚えるだけ。呪文の数も少ないので、読み終わっているのとはほぼ同じだ。家の書庫から持ってくればよかったかな、と考えつつ、私は時折バスケットの中に入っていたビスケットなどをつまみつつ、2ハイドほど過ごした。

太陽の位置もだいたい移動し、そろそろ帰ろうかと立ちあがった、その時。どこかで狼のような、イヌ科の動物の遠吠えが聞こえた。しかもこれは助けを求めているのではなく、仲間を呼んでくる声だ。どうしようか、と身を固まらせる私に、呼びかけてくる声らしきものがあつた。

<大丈夫、安心して>

<私達が守るわ>

「誰ですか・・・？」

私の声に答えるように誰からか分からぬ声は続く。

<声は伝わるわね>

<私達は水の精霊>

「水の精霊？この、湖の？」

私は驚きを隠せなかった。恐怖を取り払いその声に問いかける。

<そう。貴方は分かるはず>

<認められた方だから>

「認められた・・・誰に？」

<私達の王と>

<空の方に>

話は聞くほど分からなくなってきた。王とは誰か、空の方とは？王はそのまま精霊の王、精霊王だと考えるべきか。それは信じられないことだった。そんな私を置いたまま会話は進む。

<危険が迫ってる>

<どうかここを離れないで>

その時。近くの茂みが大きく揺れ、数匹の狼が出てきた。しかしその頭には二本の角が生えている。私は息を呑んだ。狼 おそらく魔獣だろう がこちらを向くと同時に私の前に水の壁が展開した。それを見て、うなっていた狼達は走り去っていった。

「ふう……。」

彼等が去ったあと、私は地面に座り込んでしまった。そして、自分を護ってくれた彼女達に礼を言う。

「ありがとう、水の精霊さん。」

<どづいたしまして>

彼女達も律儀に返事をくれた。気付けば、湖の上に水色の光らしきものが見えていた。そしてその中に人影らしきものも。

「それが君達の姿？」

<姿も見えるのね>

<当たり前よね、澄んだ魂をもつ方だから>

<さあ、危険がおとずれる前に帰りなさい、森の中なら守りが働くわ>

<樹の精霊も守ってくれるから>

理解しがたい言葉が次々とでてくる。頭で理解しているだけといったほうが正しいか。

ともかく、これ以上怖いことは体験したくないので、私はあらためて後日お礼しようかと考えながら、湖を後にしようとした。

「それじゃ、私は ！？」

急に何かを感じた。まるで、すぐに消えてしまう火を見つけたような。それは先ほど狼達が駆けてきた方向からだった。

「何？」

私は自分でも気付かぬままいつものまにか走り出していた。

<行ってしまった>

<仕方ないわ、それが彼だから>

<そう。きつと見放せないと分かっていた>

<でも、出会うのは当たり前かもしれない>

<きつとすばらしき相棒となる>

< 私達は見守りましょぅ >

< ええ。私達の愛するお方を >

6話・湖畔にて（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

7話・森の中の出会い（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

7話：森の中の出会

ガサガサと草を掻き分けつつ進む。本とバスケットは置いてきてしまった。後で取りに行かなくちゃな、と思いつつ、足を止めることなく走った。

「どこだ・・・？」

その気配はだんだんと距離が近くなっていることを知らせていた。そしてだんだんと小さくなっていることも。

「痛っ・・・」

枝にが手に引っかかり手の甲に傷を作った。痛みが走るが、気にせずにその場を抜けた。幸い、血は出ておらず、皮だけを切ったらしい。手当ては屋敷に帰ってからで良いだろう、と菌が入らないようにハンカチを結ぶだけにした。

そして、さらに進んだ先では。

「グルルルル・・・」

狼のうなり声。前方には、さっき見た狼と同じもの達が、銀色の

生き物を囲んでいた。

「鳥の雛・・・？」

鳥の雛らしき銀色の生き物は懸命に立ち上がるうとしていた。しかし足を怪我しているらしく、じりじりと狼達に輪を狭められていた。

飛ぶことをあきらめたらしい鳥の雛は、今度は殺気さえ籠っているような瞳で狼達をにらみつけた。

『やってみるがいい、魔獣ども。我も空の方より力与えられし者。魔をもつお主らの手にかかるわけにはいかぬ。』

「え・・・？」

喋ったのだ、その鳥の雛が。嘴は動かしていないが、明らかにそうだとわかる声で。

『何だ、来ぬのか？腰抜けどもが。我が屈するのは、我の相棒となるものが屈したときのみ。しかしその場合は相手も地につく。お主にできるか？』

「ガアッ！！」

雛の言葉に狼達は耐え切れなくなったように飛び掛った。私は走り出した。

『なんだと!?!』

雛のいるほうに向かって。

「キャインツ」

後ろに狼達が樹に衝突する音を聞きながら、私は雛を抱えて茂みに飛び込んだ。

「……もういいですかね?」

『いいのではないか?近くに気配はないぞ?』

「そうなんですがね。狼は鼻がいいので。」

『そうか。・・・ところでお主。』

「なんですか？」

『何故我の言葉が分かる。』

「何故って・・・聞こえてるから？」

『違う。普通は聞こえないのだ。お主は』

そこまで言って、雖は私の目をみて固まってしまった。どうしたの？と、問いかけの意味を込めて見返す。

『なんでもない。お主は、そうか、澄んだ魂の持ち主なのだ。な。』

澄んだ魂の持ち主。今日は言われる回数が多い。

「今日はなぜかたくさん言われますね。私の魂は、澄んでなんていませんよ。」

『何を言う。今日とは、つまり森の中。大方、この森の精霊達に言われたのだろう？ならば、それは証明になる。お主の魂が澄んでい
ることの。』

「……。」

そうだ。精霊が現れるのは澄んだ魂の持ち主の前にだけ。それ以外には、会話することはおろか、視認も出来ない。

『それに、お主は我を助けた。これも証拠だな。』

それを聞いてさらに私は押し黙った。実感ができないからだ。自分で自分を認められないとでも言おうか。

私は話題を変えるため、気になっていたことを聞いた。

「ああ、そうでした。どうして貴方は襲われていたんです？」

雛がまた固まった。聞かれて困ることなのだろうか。私は首をか
しげた。

『……ああ。どうして、か。お主は知らぬのか？』

「何をです？貴方のことをですか？知りませんよ、だって銀色の鳥とか見たことありませんし。」

『そうか。・・・私は、神獣なのだ。人はフェニックスとも呼ぶ。』

「そうなんですか。」

『ああ・・・随分と軽いな。捕まえようとか、思わぬのか？』

「いえ、別に。捕まえて欲しいですか？」

『いや、そういうわけでもないのだが・・・』

本当に興味、というかそういうったものがないのだ。フェニックス？そうですか。と簡単に言ってるのけるくらいで。普通の人だったら驚き、喜んで売るだろう。何せ、フェニックスといったら、その涙一粒さえ金になるのだ。

「あれ？でもフェニックスって金色じゃないんですか？」

『今の生は月の銀色なのだ。フェニックスは太陽の金色と月の銀色』

を入れ替わりながら生まれ変わり続ける。ちなみに死ぬのは今から10年後だな。先ほどの毛色になったからな。』

「初めて知りました……。」

私の声にフェニックスは胸を張った。

『もちろんだ。教えたのはお前が初めてだからな。そしてフェニックスは一羽。我しかおらぬ。』

「それはすごいですね。伝説を作り上げてきたんですね、相棒の人と?。」

『否。相棒はいなかった。我が頼まれたために近くにいたまで。いままで、相棒はんしんと呼べる者はいなかった。もうそうではなくなったからな。』

「?では、その相棒の方の所に帰らなくてはなりませんね。』ところでお主、家はどこだ?』家ですか?屋敷ならばこの森の近くですが……。」

家というのはもはや習慣だ。この世界で帰る場所がある、という証に家と呼んでいる。人に言うときはちゃんと屋敷というのだけだ。

『では、参るうか。』

「貴方の家に？」

『ああ。お主の家に』

「私の？」

『もちろん。お主は我の相棒になれる存在だからな。』

「え！？いいんですか、そんな簡単に決めて？私は貴方がともにいた方々とは違いますよ？」

『同じではこまる。第一、お主とあやつらでは魂が違う。我が相棒とすべきなのは、お主のような澄んだ魂の持ち主。』

「はぁ。。。。。」

『問題はあるのか？それとも、我のことは嫌いか？』

「いいえ、貴方とは会ったばかりですが、嫌いにはなりませんでした。むしろ、友になりたいです。」

雛 フェニックスは嬉しそうな声を上げた。つられて私も微笑む。

「ああ、相棒になるには、何か証が必要ですか？」

『そうだな・・・では、手をだしてくれ』

私が出すと、フェニックスはハンカチをスルリと解いた。そして傷口に顔を近づける。

『我はこの者を生涯の相棒とする。その証に』

ぼたり、としずくが流れた。傷口が瞬く間にふさがる。そして、手の甲に模様が現れる。それは金と銀の光を持ち、暗くなり始めた森の中でもよく見えた。

『これでよいか。手の甲では拙かったか？』

私はそれをもう片方の手で触りながら答えた。胸のうちにこみ上げてくる嬉しさを感じて。

「いいえ　　ありがとうございます、フェニックス。私も君の相棒になれて嬉しく思います。では、行きましようか。」

私はフェニックスをまだ雛なので落とさないように持ち上げて、歩き出した。

ゆっくりと歩きながら思う。未来はわからないものだ。好奇心で森に来てみれば、水の精霊と出会い。そして生涯でただ一人となるであろう、相棒はんしんと出会った。こんなのも悪くないなど、考えている自分がいることも不思議だ。

私は手に感じる鼓動とともに、ただただ、先を見ていた。

7話・森の中の出会（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

閑話：公爵家の者達の手記（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

今回はいろいろな人からの視点です。

閑話：公爵家の者達の手記

- 公爵家当主 -

春・3の月 13日 (日)

今日の天気は良い。私達の住む国、というか大陸には春・1、2、3の月というようにあと夏、秋、冬が続く。個人的に春の月は好きだ。なんといつても暖かい。誕生日は夏・2の月なのだが。今日は仕事がなかったので、領地の視察と息子と剣の鍛錬をした。剣の才能がある息子の将来が楽しみだ。

春・3の月 15日 (火)

今日の天気は良い。30日ある月の中間だ、気を引き締めて過ごした。曜日は空にある星で決めたそうだが・・・息子ならば知っているだろうか？あの子は歳のわりに聡明だ。領地の問題も改善できるくらいだからな。

誕生日の冬・3の月が来れば5歳だ。王城にも連れて行くべきだろうか？

春・3の月 26日 (土)、27日 (日)

今回は書けなかった昨日の分も書こうと思う。今日も昨日も天気は良い。もうすぐ月の終わりだ。王城での仕事が終わりに帰宅した。他の貴族からの視線が煩い。なぜ娘を薦める。私には妻がいるんだ

が？と笑うとすぐにいなくなつた。そんなに怖いか、と友に聞けば、お前は分かつてないな、と言われた。その顔だからだよ、とも。ますます訳が分からない。

帰宅した後、森に散策にでかけた息子がまだ帰ってきていないことが分かった。慌てて探しに行かせようとしたとき、手に雛を抱いて息子が帰ってきた。どうやら迷つたらしい。疲れているだろうからと、休ませた。

そして今日。驚くべきことが分かった。雛がフェニックスということだ。朝食の席で息子が教えてくれた。そして、相棒になつたと私も妻も驚いた。けれども、息子が滅多に言わない願いだ。自分で世話をすることを条件に、屋敷で住むことを許した。

- 公爵家のメイド長 -

春・3の月 24日 (木)

天気は良好。私の役目である公爵様のご子息を起こしに参りました。ノックを三回。返事が来たことに驚きつつも部屋に入りました。

部屋に入ると、ご子息様はすでにベットから起き上がっておられました。

挨拶をしてから支度を手伝います。挨拶には挨拶を返してくださいませし、お礼もいただけます。そしてあの笑顔。生きがいといつてもおかしくありません。

支度が整うとモーニングテイーです。ご息様は暖かい日はテラスで召し上がります。本当は二階にはベランダなのですが、広くしたため、他のものと見分けるためにテラスと呼んでいます。ご息様がテラスから見える森について訪ねられました。お教えいたしますと、きらきらとした目をなさって・・・思わず食べ・・・ゴホン、見ていて幸せです。

その後、ご息様は公爵様にお会いになられたそうです。なにを話したんでしょうか？

本日も問題なく仕事を終え、就寝です。

春・3の月 27日 (日)

今日もいつもどおり起こしに参りました。返事が来るのもいつもどおりです。ですが、今日はいつもより元気に感じます。

私の顔に出ていたんでしようか。ご息様自ら、今日のご予定を教えてくださいました。森への散策・・・今日は頬を赤くさせて・・・思わずたべ(以下自重)・・・あれ？私は一体・・・そうでした、たぶんご息様のことを考えていましたね！(半分正解)

ともかく、ご息様は午前中はお勉強、昼食のあと、コック特製のビスケットなどをバスケットに詰めて出掛けられました。

・・・緊急事態が起こりました。出掛けられたご息様が帰宅されないのです。屋敷の者が総出で探しにいかうとしたとき、鳥の雛らしきものを抱いてご帰宅されました。

そしてそのまま就寝されました。大事そうに雛を抱いて眠る姿・・・さて、私も休みましょう。寝坊するわけには行きません・・・

- 公爵家の料理長^{「コック」} -

春・2の月 25日 (金)

今日も朝は早い。といっても、日は出ているが。いつもどおり着替え、厨房に向かう。この屋敷で働いて早30年。料理長となり、今では見習いをしごいている側だ。しごかれていた10代はもはや昔のことだ。

何故こんなことを言うのかというと、今日、公爵のご子息に会ったのだ。なんと、厨房で。来たことに驚いたが、それ以上にあまりにもなじんでいることに驚いた。ご子息の顔を知らない見習い達とまるで知り合いかのように話している。敬語もなしで、からかわれども笑顔のまま。

お前達は幸せだなあ・・・とついそんな目で見習いを見てしまった。自分はそんなことした記憶はないが、こんな心の広い人もいなかった。どこからか「料理長！かえってきてくださいいい！！」とか声が聞こえるが、気のせいだろう。

と、その時。すぐ近くから声がした。

「うわあ、料理長さんって、かつこいい人なんですね！」

声のした方を向くと、そこにいたのはなんとご子息。キラキラした目で自分を見ていた。

「今日ですね、お礼を言おうと思って。料理長さん、いつも料理おいしいです。ありがとうございます。」

ああ、この人はすごいな、と。素直にそう思った。自分より下の身分の人と一緒にいて対等な人間のごとく話してくる。敬語なもの、こちらが年上だからだろう。

その後、いろいろと話して、ご子息は帰っていった。これから家庭教師と勉強なんだとか。最後に、
「あのですね・・・僕が来たこと、誰にも言わないで欲しいです。というか、内緒にしてもらえますか？」
と、言っただけで帰っていった。やはりそういうところは子供なんだと安心した。いつも見る姿が子供のそれではなかったから。

P.S. 見習いが「あの子誰なんです？料理長のお孫さんですか？」と聞いてきたので、鉄拳制裁をしておいた。公爵のご子息だというと、かなり驚いていた。

夏・1の月 8日 (金)

今日は久しぶりにご子息に会った。春・2の月以来だ。場所はまた厨房だったが。

今度は見習いたちも敬語で接していた。ご子息が悲しそうな顔をする。すぐに敬語を崩して接するあたり、あいつらもまだまだだ。という自分も、すぐにビスケットを出していたが。周りからの視線はスルーだ。

そして自身の相棒だと鳥の子供を紹介された。それには驚いたが、であったのは一週間ほど前らしい。長年一緒にいるかのような姿に感嘆した。普通の人が出来ないことをしていても、当たり前のように出来てしまうのがご子息だ。本人はそれを自慢するでもなく、いつもと変わらないのだが。だから、いや、相棒をもてるのは本当に少数なんだよ、という言葉は飲み込んだ。

すべてご子息だから、で納得してしまうのも恐ろしいところだ。将来はどうなるのだろうか？

ご子息は1ハイドほど過ごして出て行った。いつもどおり、「あ

りがとう」「と口にこめて。

さて、もう寝るとしよう。ご子息と公爵家の皆様のためにお出しする朝食の仕込みには、早く起きなければ。手を抜くなど出来ない。私が尊敬する皆様のために。

閑話：公爵家の者達の手記（後書き）

この世界では、春夏秋冬がありますが、すべて1から3までの数字で月を表します。

例）春・1の月 春・2の月 春・3の月

夏・1の月 夏・2の月 夏・3の月 という感じですが。

曜日は今年（2011）のもので、春を一月と同じ曜日から始めていますが、季節感は現実と違います。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

8話・まずは用意を（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

お気に入り登録20件以上ありがとうございます。

8話…まずは用意を

「うーん……どうしようか……」

『どうしたのだ、フィア。何か悩みでもあるのか？』

今いるのは書庫の中。ここは天井近くまで高い本棚があり、横は置いてある本がみえなくらい長い。さすがに大きすぎないか？と思うが、王城にある書庫はさらに大きいらしい。一度見てみたい。考えすぎた頭が思考を変えたことに気付き、慌てて戻す。

「ああ、フェニアス。もうすぐ父上の誕生日でしょ？プレゼントをどうしようかと思って……」

『ふむ、プレゼントか……候補はないのか？』

「候補は、新しい手帳、万年筆とか。」

『そうか……はてさて、どうすべきか……』

そう言って悩み始めるフェニアス。鳥の雛だった彼は、もうすで

に雛ではなく小ぶりの鳥になっていた。まだ成鳥ではないらしい。名前はフェニックスと私のサイフィアスをくつつけてみた。フェニアスは喜んでくれた。そして、彼には敬語をやめると言われ、彼にだけは敬語なしで話している。これが相棒になった良いところだな、と思い、自然と顔が綻ぶ。それを見たフェニアスが怪訝な顔で見てきた。フェニアスは私の顔をもても固まらない数すくない者だ。彼曰く、馴れたらしい。何にだろうか？

一旦それらの思考は置いておき、フェニアスに問いかける。

「なにか思いついた？フェニアス。」

『口調が完全に人任せなのは気のせいか？・・・小剣などどうだ？』

フェニアスの言葉はスルー。注目するのは後半。

「小剣か・・・いいかもしれない。さすがだね、フェニアス。」

小剣・・・思いつかなかった。そうだ、もしもの時のために必要かもしれない。出来ればもしもなんて考えたくもないけど。身を守るものは必要だろう。

『だろう？伊達にお主の相棒はやっておらんよ。』

胸をはってそう出張する姿は見ていて微笑ましい。知っていたフ

エニックスとの差が大きいからだ。

元の世界のフェニックス、つまり不死鳥は5、600年生き、その姿は金色で炎をまとうているとか。

そして、この世界のフェニックスは姿を変える。金から銀、銀から金に。体を変えるだけで中身は変わっておらんよ、とフェニックスは言っていた。いうなれば、体の死、なのだろう。

「それじゃあ、注文しないとね。どんなのがいいかな。」

『銀の縁取りの柄などどうだ？紫でもいいだろう。髪か瞳に合わせてみるのだ。』

「そうだね、父上の瞳は紫だ。髪は黒っぽい銀だし。よし、じゃあ頼みに行かなくちゃね。行こう、フェニックス。」

『うむ。』

私は肩にフェニックスを乗せて書庫を出た。窓から太陽が覗いている。まだ午前中だ。私は目的地に向かった。

向かった先は鍛冶場のすぐ外の端。そこで、木箱に座って休憩している男に近づいた。

「小剣、ですか。」

「もうすぐ夏・2の月なので、誕生日に父上に送ろうと思っんです。作ってくれませんか？」

「私でよければ作りますけどね・・・いいんですか、私のような見習いで？」

「はい、もちろんです。見習いと言っても、フォージンさんは上手いと思うし、この前見た剣も切れ味がよくて凄かったです。どうでしょうか。」

「分かりました。今の私に出来る最高の物を作しましょう。なんとって、ご息様の頼みですからね！」

「フォージンさん・・・その呼び方はやめてくださいって。」

「しかしですねえ・・・分かったよ、ファイア。」

「さすがフォージンさん！そうでない。」

彼に勝ったことのないフォージン。きっと記録には無敗ではなく無勝となるだろう。

フォージンは屋敷にきてから5年ほどになる青年だ。それなのに今だ見習い。その訳は、他の見習いからのイジメも混じっている。

この国では空神の名前から「フ」+「アイウエオ」をつけることは王族に近い者か、その子供につけるべきだと親が考えた時のみである。フォージンは親、もしくは名づけ親から何かをする者とみられていたのだ。

それらのことから、妬まれたりして、フォージンは他の見習いに責任を押し付けられ、その上功績を隠されていた。だから見習いから上にいかない。

鍛冶場の親方と呼べる者は気付いているのだが、自分が手をだしたら悪化する危険性があり、本人に乗り越えて欲しいのと言っていた。それを聞いたのは公爵の息子ただ一人。つまり、フォージンは自分はまだ見習いの力量と思っ込んでいたのである。本当は親方を軽く凌ぐほどあるのだが。

だから私は彼に気付いて欲しくてこんな頼みをする。それがいつ終わるか今はわからないのだが。

「デザインはどうする？何か決めてる？」

「細かいところまでは。剣の柄は紫か銀だと嬉しいな。」

「公爵様の瞳か髪に合わせるわけか？なら、紫で銀の縁取りにしよう。装飾は少ないほうが使える。長さは手から少し長い位に、使う機会が少ない小剣だと持ちなれていないから落とさないようにそうして・・・あと希望は？」

「特には。フォージンさんに一任します。」

「そうか、分かった。期日は二週間後の誕生日パーティーだな？」

「はい。ではお願いしますね。」

「おう、任せとけ。」

フォージンさんの返事を聞き、私はその場を立ち去った。鍛冶場の中からは鉄を叩く音が聞こえた。フォージンさんももうすぐその作業になるだろうか。

『楽しそうだな、ファイア。』

「うん。楽しいよ。そして楽しみ。フォージンさんはきっとすごいのを作ってくれるだろうし。」

『そうか。我也見てみたい。二週間後が楽しみだ。』

「そうだね。さ、昼食の時間だ。フェニアスの好きな甘い果物もあるはずだよ。」

『そうか。それは楽しみだ。』

私とフェニアスはそのまま屋敷に入った。平和で何より、と実感する今日この頃。

8話・まずは用意を（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

9 話・誕生日パーティー、当日（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

9話・誕生日パーティー、当日

「よう、ファイア。出来たぜ、約束の物だ。」

「ありがとうございます、フォージンさん！……さすがです。」

鍛冶場の外で、私はフォージンさんに小剣を渡されていた。

出来上がった小剣は、曇りのない刀身が、紫の銀の装飾がなされた柄に収まっている。

真剣をみる機会の少ない私が見ても、すばらしい出来だと思えた。

「そうか？公爵様も喜んでくださるいいんだけどな……」

「大丈夫です、父上も喜びますよ、すばらしい剣です。」

「はは、照れるよ、ファイア。ほら、もう行け。パーティーは始まっているんだろ？遅れちゃ駄目だろ、」こ子息様？」

「からかわないでください、フォージンさん。似合わないって分かっていますから……」

落ち込む私。今日は誕生日パーティー当日。格好は正装だ。純白

の服に袖を通した途端、着替えを手伝ってくれていたメイド達が固まったのだ。きっと服に着られているからだろうと思っっている。

「違うぞ、フィア。自覚なしか？もったいない・・・似合ってるぞ。お前の想像と逆だ。」

「そうですか？」

『もちろんだ。この服はお主しか着こなせないだろう。』

それらを聞いて安心した。つまり、見れないものではない、ということだ。両親に恥をかかせないですむ。

「じゃあ、行ってきますね、フォージンさん。」

「ああ、頑張れよ。」

最後の言葉の意味が分からなくて首を傾げたが、フェニアスに急かされ、大広間に向かった。

「おめでとございます、ファルディナ公爵。」

「私からもお祝い申しあげます。」

「ありがとうございます、皆さん。私のような者を祝いに来てくださったことをうれしく思います。どうか、今宵はお楽しみください。」

大広間はきらびやかに輝いていた。あちこちにドレスが舞い、テーブルには種類豊富な食べ物が用意されている。

その中でも一番目立っているのは主役である公爵とその妻だった。動くたびに銀が流れ、招待客を魅了した。

そして、執事が、入場を告げた。

「ファルデナ公爵第一子、サイフィアス・ド・ロデス・ファルディナ様、ご入場！」

ふわり、と。扉で起こされた風に肩口まで伸びた銀の髪が揺れる。多くの貴族の視線に動じることなく、サイフィアスは入場した。

扉からまっすぐと今夜の主役へと近づく。その間も、誰一人として彼から目を離さなかった。

彼の父はその光景に苦笑し、母は当たり前かな、と笑った。そして三人が出会い、彼は極上の笑顔を向ける。

「遅くなって申し訳ありません。父上、母上。」

「問題ない。さあ、皆さんに挨拶を。」

「はい。」

そこできると振り返る。その動作はどこまでも優雅で、およそ4歳の子供とは思えなかった。

「お初にお目にかかります。サイフィアス・ド・ロデス・ファルデイナと申します。以後、お見知りおきを。」

ゆつくりと礼をする。彼が貴族達の前に出るのは初めてのことだった。今までは、幼かったからというのが理由なのだが、もっと早くでも大丈夫だったのではないかと思うものがたくさんいた。実をいうと、煩い貴族に纏わりつかれない様にするため、というのも理由にあつたりするのだが。

何も知らなかった貴族たちは色めきたった。純白の衣装を着こなした姿に。そのどんな名工でも作り出せないだろう容姿に。

そんな貴族達を放置し、彼は父のいるほうに振り返った。

「誕生日おめでとうございます、父上。これは、私からのプレゼント

トです。」

「おお、ありがとう。箱を開けても？」

彼が頷くと、箱を開けた父は目を見開いた。

「これは・・・小剣。しかもかなりの業物らしいな。誰が作った？」

「鍛冶師のフォージンです。デザインも彼で、色は父上の瞳と髪をイメージしました。」

「そうか。フォージンには礼を言わなければな。それにしても・・・」

鞘から抜き出した刀身をしまいながら、その見た目に見入った。紫色に加工され、銀の装飾は特に目を奪われる。光に反射するさまは、見ていて飽きない。

「あの、公爵・・・」

「ん？」

思考を声に遮られる。声をかけてきたのは、娘を連れだしたクルノア伯爵だ。

「どうかしましたか、伯爵？」

「いえ、ご子息に私の娘を紹介しようかと思ひまして・・・」

彼の身分は自分より下。断つてもよいのだが、この雰囲気だ、断るわけにもいかない。そうすぐ判断した伯爵は、サイフィアスをすぐそばに呼んだ。

「こちらが、娘のライラ・デ・モルキス・クルノアでございます。」

「ライラです。以後、お見知りおきを・・・」

そんなことがサイフィアスが退場する直前まで続いた。

「ふう・・・」

『疲れているな、フィア。休まないのか？』

「うん、疲れた。でも、眠気が来ないんだよね。フェニクス、先に寝てていいよ？」

『いや、我も起きていよう。寝なくとも我はフェニックス、問題はない。』

「そう……ん？」

視界の端にちらりと。テラスのふちに寄りかかっていた私は外に何かがあるように感じた。

「なんだろう……」

『下に行きたいか、フィア？下ろしてやるぞ。』

「うん……行っちゃおうか。」

なんとなくの好奇心で、私はフェリアスとともに下に下りた。

9 話・誕生日パーティー、当日（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

10話・夜の出会い、それは・・・(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

10話：夜の出会い、それは・・・

『ここらへんでよいか？ファイア。』

「うん。ありがとう、フェニアス。」

フェニアスの足に掴まっていた手を解き、私は地面に降り立った。テラスにいる時点で靴を履いていたため、地面を歩いても問題は無い。この世界の洋式仕様に内心感謝した。

「さて、それじゃ歩いてみようか。森の方かな？」

『ファイアの好きなようにするとよい。我はついてゆくぞ。』

「そうだね・・・じゃあ、森のほうに歩いていってみようか。なんとなく見たような気がしただけだし。いなかったら帰ってこよう？」

『うむ。』

フェニアスの返事を聞き、私は森の方に歩き出した。夜に一人と一羽で不用心だと思われがちだが、鳥はフェニックス。そこら辺にいる者なら、簡単に倒せる。

そんなわけで、私は剣も持たず、歩いてきた。

どのくらい経っただろうか。森に入っただけしばらく歩き続けている。

「どうしようか、フェニアス。帰る？」

『そうするか、ファイア。・・・ん？』

「え？・・・あ」

緑が占領する森の中で、そこだけ白い一角があった。正しく言う
と、塊が。

『みつけたようだな、ファイア。近づくか？』

「うん・・・なんか人っぽい気もするし・・・」

慎重にそれにちかづく。気配を殺して。剣の鍛錬で自然と身についたものが、いまこんなときに使うとは思っていなかった。

「あの……」

「きゃあっ！？だ、誰だ！！」

「……女の子？」

そこにいたのは少女。私より年上だろうか。白い簡素なドレスを着ている。飾りもなにも無いが、生地は質はよさそうだ。貴族だろうか？

「お前は誰だと聞いているんだが？」

「え？……私はサイフィアスと申します。この者はフェニアス。貴女は？」

こんなときも動じない。それがマイクオリティー……。嘘です。内心は焦ってます。

ただ、こんなふうにはしか対処の仕方を知らない……。。

「私はサラフェルミアという。」

答えてくれました。良い人ですね。というか、ミス・サラフェルミアはどうして此処にいるのでしょうか？私が聞くと、なぜか黙り込んでしまった。どうしたのだろうか？

「その……つまりはだな……迷った。」

「迷った？」

「そうだ。ちょっと、好奇心で森に来て見たのだ。その結果、迷った。」

「そうなんですか……」

『ファイア』

そこでフェニアスに声をかけられた。私も声を口には出さずに問いかける。

「（どうしたの、フェニアス？）」

『いや……この娘、パーティーとやらに来ていた。我はファイアと

同じものが見れるだろう？その時、大広間の端で見かけたのだ』

「（そうなんだ・・・ってことはお忍び？とにかく、送ってかなくちやね。」

『そのようだな。』

「では、送っていきましょう。」

「うむ。頼んだ。」

彼女の返事を聞き、私は連れ立って歩き出した。
と、いきなり足を止めた。

「ミス？」

「ああ、悪いな。・・・あの湖は、なんだ？」

どつやら、湖の近くだったらしい。方向はそちらに変わった。

「この湖に名前はありませんよ。夏はとても涼しく、綺麗なところ

です。」

「そうなのか。確かに涼しいな。サイフィアス、お前は良いところを知っているな。」

「はい。よろしければ、休んでいきますか？」

二人で腰を下ろす。フェニアスは私の隣に座った。湖の水は静かで、見ても飽きない。月の光も反射され、あたりが明るかった。そして、今となって彼女の容姿がはつきりした。

先ほどまでは、私より身長が少し高いかな、というぐらいだったのだが、今は地面に流れる銀髪と、水色ではないが、薄い藍色の瞳が見えていた。

そこで、彼女も自分を見ていることに気付く。

「お前は・・・男にしては綺麗な顔をしているな。しかも、ただ綺麗ただけではない。心にも偽りがなさそうだ。」

「ミスも綺麗ですよ。銀髪と藍色の瞳・・・魅了される方が多いでしょう。」

私の言葉を聞いて彼女は笑った。少しの悲しみを含ませて。

「そうだな・・・本当に、よってくる者が多い。目的はこの見た目が財産だと分かっているのだが。」

そこで私の方を向いて言葉を続けた。

「お前みたいな者ならば良いが・・・ああ、なんでもない。ところでお前は歳は幾つだ？」

急な話題転換に戸惑いながらも答える。

「4歳ですが？」

「そうか、私より二歳年下なのだな！成人するのもあと12年後か。」

「そうです。王城に行くのもおそろくは・・・」

王城、という言葉に彼女の肩がぴくりと動いたように見えたのは気のせいだっただろうか？

私をよそに、彼女は嬉々として喋り続ける。さっきの憂い顔は嘘かと思えてくるほどだ。

「そうかそうか。そのころ私は・・・いや、いるな。いなくてはならん。」

最後の頃の言葉は意味が分からなかった。いるとは、なんのことだろうか。

と、そこで思い出した。これは言った方がいいのだろうか。

「そういえば、私はもう少ししたら父の手伝いとして王城に行くそうです。後、10歳になれば騎士団の入団試験を受けますよ?」

「それは本当か!？」

彼女の勢いに押されつつ、言葉を続けた。

「はい。なんでも、領地の改善や、新しく始まったことについて・・・」

そう。じつは、家庭教師に教わることが終了次第、王城で父上の手伝いをする事になっている。しかも内容が自分の提案した領地の改善。なんでも、王様が触発されて他の貴族にも促すように言ったらしい。ならば言い出した私が必要、ということ、私が引つ張り出されることになった。まだまだ先のことになるとは思っけれども。

「あの領地のことはお前が考えたのか？すごいな。」

「そうでもないです。ほとんど、本の引用ですから。」

「それでもだ。騎士団も受けるのだろうか？お前は剣もすごいのだな
「！」

「いえ・・・」

ちなみに騎士団の方は、希望するものなら入団可能で、けれども入団試験を合格しなければはいれないのだ。正式名称を「サイファルド王国直屬神空騎士団」。

所属する者は「神空騎士」と呼ばれ、国民からは憧れの目を向けられる。

さらに言うと、貴族の男子はほとんど試験を受ける。合否に関わらず、受けれると見られている、と箔がつくからだ。

なので私も受けることになっていたりする。

「知っている、試験は貴族が箔をつけるために受けるのだろうか？殆どの者が駄目で、今は平民が多いのだとか。」

「そうらしいですね。私はよく分かりませんが・・・」

「実際そうなのだ。なんだか、お前は試験を受けたくなさそうに見えるな。どうしてだ？」

「いえ・・・ただ、興味がないんです。箔がつくとかは、はっきり言って気にしませんし。」

「興味がない、か・・・合格すれば、騎士だぞ？周りは、お前を尊敬の目で見るだろう。」

興味は本当になかった。尊敬などいらぬ。自分は自己満足しかできないのに、誤解された結果など欲しくはないのだ。

彼女の目が疑うようだったので、私ははっきりと言った。

「尊敬は何かをして受けるものでしょう？試験だけでなんて、良い加減すぎませんか？」

彼女は考え込むように腕を組み、うつん・・・と唸り声を上げた。

「つまりお前は見かけだけの尊敬はいらぬというのだな？」

「そついつのことです。自己満足にしかならないでしょうっ。」

「自己満足……？そっか、お前はそう考えるのか！」

楽しそうな笑い声が響く湖に響く。

「今日は良いことが聞ける日だな！貴族への挨拶などと思っていたが……こついつのも悪くない。」

そのまま勢いで立ち上がる。私も慌てて立ち上がった。

「それでは帰るとしようか。森の入り口までいい。いくぞ！」

「あ、はい。フェニアス。行くよ。」

私はフェニアスを肩に乗せ、彼女と並んで歩き出した。

途中、逸れそうだったので手をつないだ。彼女が真っ赤になっていたが、どうかしたのだろうか？

15二ドくらい経った頃、屋敷が見えてきた。彼女の顔に安堵が広がる。

「おお！ご苦労だったな。あと、楽しかった。ありがとう。」

「どういたしまして。私も楽しかったです。」

「そうだお前、騎士団の中にくはいろもまて羽衣騎士ひいろもまて>というのがあることを知っているか？」

聞いたことのない言葉だ。私が知らない、と口にする、彼女は頷いたのち、続けた。

「その騎士はな、王女専用の騎士なのだ。」

「王女専用？」

「そう。騎士団の中でもかなりの実力者でないとなれない。しかも王女に一人ずつ。これがあることは騎士団団長ぐらいしか知らない。」

そうなんですか、とうなづきつつ思った。それを知っている彼女は何者なのだろうか？

そしてそれを明かす理由は？

「お前は他の貴族共とは考えかたが違う。騎士団が通過点だと考えず、驕るわけでもないし、尊敬は不必要だと言う。

自己満足は皆やっていることだ。主に欲のために。しかしお前は他人のためだろうか？否定していても同じだ。お前は自分でも気付かないうちに誰にも真似できないことをしているんだ。」

それに、と言葉が紡がれる。

「私はこれだけは絶対だと言える。お前は間違っただけだ。自己満足だろうがなんだろうが、していることは救いなのだ。事実、多くの国民が命を救われている。私も今日、救われたしな。

だから　　誇りを持って。自分の信念を持って。それが間違っていないことを誰でもない、私が証明してやる。」

彼女の言葉は他の何よりも私の迷いを消した。心の奥深くにあった前世への思い。自分自身に対しての感情。それらすべてを理解するかのごとく、当たり前のように受け止められた。

「ありがとうございます、ミス。」

「いいや？・・・さて、私は行く。さよならだ。」

「はい。あ、待ってください」

これは彼女への敬意を示して。自分の意思で、することだ。誇りと信念を思い出させてくれた彼女に。

「改めて名乗ります　私の名前はサイフィアス・ド・ロデス・ファルディナ。貴女への敬意を示します。」

驚いた表情をした彼女は次の瞬間には顔を綻ばせて。

「私の名はサラフェルミア・フェザー・フェンライト・サイファルド。敬意に感謝を。」

「え」

フェザーとサイファルド。その二つが表すのは・・・

「では、今度こそ。王城で待っているぞ、サイフィアス！」

『ファイア？大丈夫か？』

彼女が消えて数二ード。私は動けなかった。

「大丈夫・・・あの子、王女だったんだね・・・」

『らしいな。まあ、問題あるまい。魂も汚れておらんしな。』

「そつなの？にしても、驚いた・・・」

あの口調。誰も王族だとは思わないだろう。自分も名前を言われるまで気付かなかった。

「あれ、でも何で気付かなかったんだろう？大広間にあんなに人いたのに、あの容姿は目立つとおもっけどなあ・・・」

『おそらく、陣術を使っていたのではないか？そのような術を聞いたことがある。』

「そうなんだ・・・」

『ファイ』

「うん？」

『嬉しそうだな。吹っ切れたのか？』

「うん・・・まあね　いろいろと思い出したし。さて、戻ろうか。見つかったら大変だ。」

『そうだな。』

足取りはいつもより軽い。誇り、信念。今の自分には、それらがある。そして目標も。

「<羽衣騎士>・・・彼女のもとに

」

10話・夜の出会い、それは・・・(後書き)

誤字・脱字がありましたらお教えください。

2月16日・誤字を訂正いたしました。教えていただき感謝です！

11話：初登城、父の友（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

11話：初登城、父の友

「フィア。今日は、昨日も言ったとおり、お前を王城に連れて行くと思う。準備はいいか？」

「はい、父上。大丈夫です。」

玄関前に馬車が用意され、親子は荷物と共に中に乗り込む。まもなく、馬車は出発した。

音もなく馬車は進み、少し経った頃、父が口を開いた。

「フィア、お前はまだ6歳だ。今日が最初の登城だが、いつもどおりのお前なら問題ない。子供だと甘く見られないように気を付けなさい。」

「はい。でも、私が行って大丈夫でしょうか？」

「問題ない。フィアの歳よりは大きいけど、来ている子供もいる。それに、お前はやるべきことはしてあるしな。」

「そうですか・・・」

彼女との出会いから早2年。私は6歳になっていた。この2年間は剣と勉強が主だった。陣術は契約がまだなので術を覚えるだけにとどまっている。実は、オリジナルを考えていたりするのだが、それはフェニアスしか知らない。

ともかく、彼女の言葉により変わった私は、目標　　彼女のく羽衣騎士>となる　　を達成するため、自分を鍛えてるのだ。

そして今日。家庭教師による授業が1ヶ月前に終了し、父に剣術の鍛錬はもうあとは伸ばして行くだけだと言葉を貰い、とうとう登城になった。フェニアスは森に行っている。そのため、私と父だけで行くのだ。

まだ見ぬ城に心が弾む。そんな私を乗せ、馬車は進んだ。

「ここが私の執務室だ。私一人が使っているから、他の人を気にしなくて良い。さあ、入りなさい。」

「失礼します。」

王城は信じられないくらい大きかった。屋敷の何倍だろうか、あの屋敷もかなり大きいので此処は相当のはずだ。

そして、門を通り父に連れられ執務室に入った。貴族に与えられる執務室は一部屋に数人割り当てられるのに、一人とは。公爵はすごいな、と改めて実感した。

「大きい部屋ですね。いつも此処で仕事を？」

席に向かった父に問いかける。

「ああ、そうだよ。お前の席は、そっちだ。」

そういわれて指差されたのは父の物よりも若干小さな机と椅子。机の上にはインクスタンドがおいてある。これはインクつぽにペン立てが付いているものだ。そして数枚の羊皮紙が置いてあった。

それらを確認した私は、入室した時から気になっていた一角を指差した。正しくはソファの上なのだが。

「ところで父上。そのソファで横になられている方は、どなたですか？」

「え？・・・あっケイ！何故ここで寝ている！？」

父は勢いよく立ち上がると、その人のそばにいき、頭を小突いた。

「んー？おお、ロディーじゃないか。おはよう。」

「おはようじゃない！何故此処にいるんだ？ここは私の執務室のはずなんだが。」

「それはだな、ここらへんを担当するメイドからお前が小さい男の子を連れてきたなんてことを聞いたから、様子を見にな。そう怒るなよ、ロディー。」

「はあ・・・疲れた、さつさと自分の執務室に戻れ。息子も私も暇じゃないんだ。」

「へえ、息子か。・・・よお、初めまして、ファルデナの天才。俺の名前はケイライン・ド・ランゲージ・アルテキシア。こう見えて侯爵をしている。」

初めてみる父の姿に唾然としながら、案外普通に話しかけてきた彼に慌てて返す。

「あ、はい。初めまして、アルテキシア侯爵。私はサイフィアス・ド・ロデス・ファルディナです。お見知りおきを。」

侯爵は楽しそうに片頬だけを持ち上げた。

「さすがはこいつの息子だな。一回で名前覚えたのか。聞き返されること多いんだ。お前、本当に子供か？」

「え？それは……」

おそらく冗談だと思われる口調に分かっていてもドキリとした。冷や汗を背中に感じながら立っていると、侯爵が言葉を続けた。

「冗談だ。……よし、お前にはその記憶力を賞賛して、俺を名前で呼ぶことを許す。さあ。呼んでみる！」

「褒めてもらったのは嬉しいが。仕事しろ、仕事を。ケイ。」

父が侯爵の頭をまた小突いた。癖みたいなものかな？とか思いつつ、成り行きを眺める。

「はいはい。起こられる前に退散しますよ。じゃあなサイファイアス殿。」

そういつやいなや、侯爵は風のように消えていった。扉も閉まっている。律儀な人なのかな、と思ったりした。

「はぁ・・・」

父がおおきなため息をついた。

「大丈夫ですか、父上？」

「ああ。あいつはいつもああだね。こっちは迷惑だったりするときがあるのだが・・・」

「え？でも、楽しいんでしょう、父上？顔が笑ってますよ？」

笑っている、とまではいつていないが、来たときよりも和らいでいるのは確かだった。きつとそれも考えて来ていたんじゃないかと考えてみたり。

「そうだな。楽しいのかもしれない。実際、あいつといると楽しだな。身分を気にせず接してくれるしな。」

苦笑しているように見えて、やはりその顔は楽しそうだった。

話はいつか父が独身だったころへ。仕事はいいのかな、とちらと思っただが、楽しかったのならばらくは昔話を聞いていた。

それが終わったのは2ハイド経ってから。屋敷を出たのが9時。もうすぐお昼だということ、私と父は食堂に向かった。

王城には身分を問わず入れる場所が数箇所ある。大浴場や広大な庭、そして食堂だ。

昼時になれば騎士やメイドなどが席を埋める。貴族の殆どは執務室に運ばせたりする場合が多い。食堂で食べる貴族は少ないのだ。つまり、3人は良くも悪くも目立っていた。特に、幼い子供は。

そして当の本人達は。

「おいしいか、フィア？この料理人は私達の家で働いてくれる料理長の弟子（つまり公爵家で働いていた人）がいて、とても評判なんだ。」

「そうなんですか？とてもおいしいです。」

「はは、口にあっただか、フィア。ロディー、お前たちは好みが似ているらしいな。」

周りを気にせず食事をしていた。その周囲だけ、人が少ない。と
いうかいな。

三人の前に並んでいるのはさらに盛られたミートソースパスタ。チーズがアクセントを加えている。

マナー無視で喋っているのは貴族らしくない。だが、代わりだとも言いたげに、周りは静かだった。

「そういえば、静かなんですね、王城の食事って。」

「そうだな。いつもはもっと声が聞こえるはずなんだが・・・」

「それは、あれだろ？いつもと違うものがあるじゃないか。」

「「違うもの？」」

ケイライン様は苦笑していた。訳がわからず父と顔を見合わせる。

「分からないならそれでいい。ほら、食べないと冷めるぞ？」

そう促されて、結局理解しないまま昼食を終えた。最後まで食堂は静かだった。

「さて、そろそろ帰ろうか、ファイア。」

「はい、父上。」

昼食のあと。時計の針が？を指すまで、私は父と仕事をしていた。といっても内容は領地の改善点の追加とか、補足。それから領地で取れる果物や野菜の出荷数や税金の確認など。簡単な（？）ことだけだった。

門をでて、馬車に乗る。馬に鞭を入れる音が聞こえ、馬車が動き出した。

「ファイア。」

「はい？」

「ケイは、良いやつだろっ？」

「そうですね。ケイライン様はいい方だと思います。」

「そうか・・・」

父の顔が安心したように緩んだ。おそらく、不安だったのだろう、息子が王城で初めて会った友人が彼で。

けれど、その心配は無用だった。それは私がフィアと呼ばれ、ケイライン様、と侯爵を呼んでいることから分かるだろう。

気付かなかったけれど、いつの間にかそうなっていたのだ。自分では嬉しいことなので問題はない。

ただ一つ気がかりなのは

と、馬車の窓から、いつかと同じように白いものがちらりと見えた。思わず身を乗り出す。それは王城の一つの窓からだ。

馬車が動くにつれ、大きさは小さくなっていくが、間違いなく彼女だ。顔が見える距離だったので、なにか口が言った事も分かった。

まってるから

確かにそう動いたように見えた。次の瞬間、木々に遮られ、彼女の姿は見えなくなってしまった。

「どうした、フィア。うれしそうだな。」

「そうですか？いえ、はい。」

私は自然とこころが軽くなっていることを感じた。頬が緩むのを感じる。

（私は、あの方のおそばに　　）

11話：初登城、父の友（後書き）

出会えないなら言葉だけでも、ということ。

出会う機会の少ない主人公&ヒロイン。頑張って書いていきたいと思えます。

誤字・脱字がありましたらお教えください。

12話・精霊と・・・(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

12話：精霊と・・・

『フィア、お主の母君の用事とは、なんなのだ？』

「さあ？私にも分からないよ。行ってみるのかなさそうだね。」

『そうか・・・。』

広い屋敷の庭をフェニアスを肩に乗せ歩く。馴れれば問題ないのだが、この廊下は縦にも横にも広い。最初の頃、すぐに疲れてしまったのはいい思い出だ。

王城に出入りするようになり早3ヶ月。相変わらず仕事があれば王城に、それ以外では本から知識を取り込むか剣の稽古だ。

だからだろう、この頃食事の時しかまともに顔をあわせない母から呼び出しがあった。なので、今は母の私室に向かっている。

「ここか・・・。」

扉の前まで来ると、深呼吸を一つ。これはもう習慣だ。自分の緊張をほぐすために、滅多に入らない部屋だから。

コンコン、と二回ほど扉を叩く。

「母上、参りました。」

「どうぞ、フィア。」

返答を聞き、扉を開ける。最初に見えたのは椅子に座った母の姿。それから、紫で統一された部屋が視界に映し出される。

「さあ、座って。この頃、貴方とはまともに話していないからね。」

「はい。失礼します、母上。」

私が席に着くとそばに仕えていたメイドが給仕をする。紅茶のいい香りが部屋に広まった。

「いい香りですね。」

「でしょう？今、気に入っている紅茶なのよ。」

暫しの間、紅茶を嗜みながらくつろぐ。メイドは母が下がらせた。

「ところで、フィア。」

「なんですか、母上？」

「好きな子でも出来た？」

慌てて噴出ひきだしそうになるのをこらえる。つい、母をまじまじと見てしまった。

「だって、ファイア、このごろかなり頑張ってるでしょ？やる気がでる理由はないのかなーと思って。」

「そうですか・・・」

自分の母ながら凄い人だと思う。そして自分がそう見られていたことにいまさらながら気付いた。

「それで？なにかあった？」

「えっと・・・まあ、多少はありましたが・・・」

「話なさい？」

言葉に込められた圧力に驚きながらも、隠すことでもないので話す。父と同じ紫色の瞳なのに差を感じた。

「ファイア？大丈夫か？」

「大丈夫だよ？フェニクス。」

解放されたのは2ハイド30ニード経ってから。ある程度の理由を話し、「それなら当たり前よね？」との言葉を母から貰った。

「それじゃあ、騎士団入団がまず最初の目標ね。大丈夫、今の貴方なら問題ないわよ。無理して体を壊さければね？」

母の応援が決定し、公爵を継ぐ前には騎士団に入団していてもいいことが分かった。実は、父もそうだったとか。ケイライン様や母と知り合ったのも、騎士団に入団していたかららしい。会話の後半が昔話だったのは当たり前なのだろうか。

似たもの夫婦だな、とか思ったりする今日この頃。

『して、ファイアよ、それはどうするのだ？』

そういうフェニアスが指すのは私の手に握られた液体。小さい瓶に入ったそれは、振るとちやぽ、と音がする。

「これ？どうしようか？」

『精霊との契約に必要なのだから？』

「うん、そうだよ。」

そう、この液体は名を<契約水>。安直な名前だが、それとしかいいようがないのだ。何故なら、これを使って精霊と契約をするのだから。

「いい、ファイア、よく聞きなさい。これは<契約水>。精霊との契約に使う水よ。精霊が姿を現して契約を認めてくれたら、肌に刻印が入るの。こんな風に」

そういつて見せてくれたのは左腕に標された刻印。

「精霊はこれを標しるとして契約者を識別するの。精霊は水、火、樹、

風、光、闇と分けられるわ。種類が一種類でなく、たとえば水と樹だったりと持っている種類が多いほど力の強い精霊として見られるわ。あ、種類はスペックといってね、一種類だとワンスペック、あとはそのまま増えていくの。精霊王はコンプリートスペックとよばれるわ。」

「貴方は6歳となった。もうそろそろ契約をしても大丈夫でしょう。いつまで、という区切りはないわ。時がくれば自然と契約できるでしょう。」

さきほど母から聞いた言葉がまた頭に浮かんだ。絶対の自信を持って母はああ言っていたが、私はどうすべきか分からない。やはり本で読んだ知識だけでは不足しているなと思えた。

なるようにしかならない、そう考えて、私は歩き出した。

「ああ、疲れた・・・」

『いきなり書庫に行ったときは驚いたぞ。どうしたのだ？』

フェニアスが不思議そうに聞いてきた。外はすでに暗い。夕食と入浴を終えた私はベットに横になりながら、そちらに顔を向ける。

「いや・・・本当は森に行こうかな、と思ったんだ、精霊がいるだろうし。でも、前に行ったときになんか契約しないみたいなのを言っていたからさ。」

『そうか。それは知らなかった。して、書庫への目的は？』

「フェニアスと会う前だからね。書庫は精霊の知識を確認しておくと思うて。あと、フェニアスは知ってると思うけど。」

私はベットの下から箱を取り出した。開けると中に入っているのは丸められた羊皮紙だ。

「陣術のこともっと調べられないかな、とも思って。これはオリジナルだけど、使えるかどうかも分からないし。あと、領地のこともついでに。」

『フィアは努力家だな。まあ、精霊は気ままなところもある。契約は焦らなくともよいだろう。』

「そうだね・・・ふあ・・・」

小さく欠伸がでる。今日はいつもより時間は早いはずなのに、何故だか眠気を感じる。本を読みすぎたのだろうか？

「今日はもう寝るよ、フェニクス。お休み。」

『うむ。私も寝よう。お休みだ、フィア。』

フェニクスの言葉を最後まで聞いたかどうかというところで、私は眠りについていた。

「ん……？ここは……」

先があるのか分からないような白い空間。あたりを見渡すと自分ひとりしかいなかった。

「どこなんでしょうか？夢？ならば精神世界でしょうか……」

ひゅつと光の尾を引いて何か明るいものが視界の前を駆けた。

「え？これは……」

その数はだんだんと増え、色は赤や青、緑や黄色、黒だった。しばらくそうしていたのだが、唐突にそれらはなくなった。

正しくは一箇所に集まって人型をとったのだ。

<初めましてだな、サイフィアス。>

「貴女は？」

<私は精霊女王。>

「精霊女王？王ではなく？」

<そう。私は王と並び立つもの。精霊王は空のお方に仕えている。そして私は、人間の中でもっとも魂が美しい汝と契約するためここにいる。>

「契約・・・私とで、いいのですか？」

<もちろんだ。さて、私は契約に合意する。文句はないな？>

「あ、はい。」

<では >

手を出せ、と言われて手を出すと、精霊女王はどこからともなく
<契約水>を取り出した。

<精霊女王の名を冠す私は、この者を契約者とし、魂の浄化のとき
までもにすることを誓う。さあ、祝福の光が目覚め、照らしの火
が現れ、感謝の雨が舞い、結ばれた樹が育つ。安らぎの風が吹き、
眠りへ誘う闇をこの手に。 契約は、ここになった。 >

いつのまにか<契約水>消え、私の首元に刻印が出来た。それは
精緻な模様で、人の手では絶対にまねできないものだった。

「ありがとうございます、女王。」

<いいや？それはこちらの言葉だ。礼を言おう、サイフィアス。 >

「どういたしまして。あ、私のことはフィアでいいですよ。親しい
人はみなそう呼ぶんです。」

<そうか？分かった、ファイアだな>

女王は嬉しそうに顔をほころばせた。自然とこちら頼も緩む。
そこで、重要なことを思い出した。

「あの、女王。質問しても？」

<いいぞ。というか、もっと砕けた口調でよい。私は契約者に敬語
など使われたくない。>

「そうですか？前の契約者の方も？」

<いや？契約したのは汝が初めてだ。堅苦しいのは嫌いだな>

結構すごいことを聞かされた気がする。ということは、最初の契
約者が私ということになるのだろうか？

<そう驚くな。気に入ったやつがいなかったのだ、仕方あるまい。>

「はぁ・・・という事は、名前とかは・・・？」

<名前か？ないな。呼ばれる必要もなかったしな。聞きたいことはそれだったのか？>

「ええ、まあ。では、私が名前をつけても？」

女王は驚いた顔をした。そして、うむ、とばかりに頷く。

<ああ。頼んだ。>

「はい、では」

<女王様、嬉しそう>

<初めての契約者を手に入れたんですもの、しかも澄んだ魂の持ち主を。>

<そして名も貰っていたわね>

<すばらしいことだ>

< 私たちはあの方々を見守っていきましよう >

< ええ >

< もちろん >

< 私たちの敬愛する女王様とその契約者。そのとなりにはフェニックスもいるわ。 >

< きつとなにかを変える >

< きつとなにかを残す >

< それが空の方に愛された者達の定め・・・ >

12話・精霊と・・・(後書き)

誤字・脱字がありましたらお教えください。

13話・陣術の練習を（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

13話：陣術の練習を

「<その者 風を導き 他者への偽りを作る 名をフェイク・ヴィジョン>」

ふわ、と風が吹き、私の周りを覆った。

手を下ろしながら、ゆっくりと目を開ける。

「・・・これでいい？」

<上出来だ。さすがだな、ファイア。>

「良かった。練習した甲斐があったね。」

今しているのは陣術の練習。契約をした彼女と誰もいない森の中で行っている。

屋敷の庭でやってもいいのだが、それは彼女がいたため中止となった。

なぜなら、精霊は人型がとれるほど力が強いので、しかも精霊女王である彼女は簡単に人前に出せないのである。人と偽ることも出来るが、それはそれで違和感があるため出来ない。

<大して練習をしていなのになにを言う。普通は、3ヶ月で基本を習得して、力を完璧に操ることは出来ないのだぞ？まったく、才能があるのも教えがいがないくてつまらぬな。>

「そう言わないで、エンフォニー。大体は貴女のおかげなんだから。」

ふん、といわんばかりに顔を背けてしまった彼女に声をかける。エンフォニーは彼女の名だ。女王ではなく女帝のエンプレスと陣術が私と彼女の力で出来ていることから考えて交響曲のシンフォニーを足して出来た。

彼女が思いのほか喜んでくれたので安心した。フェニアスといい、エンフォニーといい、優しい人（？）が多いなあ、と思ったり。

<そうとも言えるが。殆どは汝の力だろうよ。>

「持っけていても使えないけどね。」

機嫌が直ってきたと思えるエンフォニーに苦笑しそうになる。

陣術は人の魂の力が元になる。しかし人はその力を体の外に出すことが出来ない。それを出来るのが精霊だ。人は精霊に自身の力を多少自由に使うことを条件に契約を持ち込んだ。しかし精霊は力を扱うために影響されやすい。そのため、契約は魂が澄んだものしか出来ないのだ。

しかも力が強い精霊ほど魂が澄んでいなければならず、その女王と契約した彼は凄かったりする。それに気付いていないのも彼なのだが。

『ファイア。』

「あ、フェニアス。どうしたの？」

と、その時、フェニアスがやってきた。私の肩に止まる。そこがもう定位置となっており、それも体がさらに成長しているためだ。

『様子を見に来たただけだ。どうだ、エンフォニー？』

<もう殆どやることはない。あとは、．．．オリジナル程度だな。せっかくだから参加するか？フェニアス。>

『そうだな。光と闇は我の力も付加される。どうする、ファイア？』

「やってみようか？まだ自信ないけど．．．」

私は地面においてあった箱から羊皮紙を取り出した。オリジナルの陣術を書いていたものだ。

そのうちの一枚を開き、地面に置いた。

「いくよ?」

『うむ。』

<ああ。>

息を吸い、手を持ち上げる。

「<その者>

体の少し前にくるり、と円を書く。

「<光を纏い>

円の中に光を意味する太陽を書く。それらが次第に黄色く発光し始めた。

「<輝く目を我が手に>

目が真ん中に描かれる。

「<名をシャウト・アイ>」

あたりに光が溢れた。

<ファイア?・・・寝ているな。>

『ベットまで運ぼう。』

月明かりが差し込む部屋。フェニアスがファイアをゆっくりと持ち上げ、移動させる。自分より大きなものでも持ち上げられるのがフェニックスだ。

エンフォニーはテラスの椅子に座り、その様子を眺めていた。戻ってきたフェニアスに向け、声をかける。

<ご苦労だな、フェニアス。>

『うむ。しかしこういうのはたまにしかないからな。苦ではない。』

フェニアスもテラスのもう1脚の背もたれに飛び乗った。

<それにしても、驚いた。>

『何がだ？ 昏悶こんもんころのあのオリジナルのことか？』

<いや、すべてにだ。まあ、あれにも驚いたがな。実験であの威力。信じられなかった。>

『ふむ。我もファイアには驚かされている。我々に名前をつけたことといい・・・驚かされっぱなしだな』

<はは、そうだな。私も始めての名前を貰った。エンフォニー。女帝との交響曲だ。>

『しかし、それがファイアだともいえる。私の相棒はファイア以外ありえんよ。』

<そうか。私の契約者もファイア以外ありえないと断言できるがな。>

精霊の女王と不死鳥はしばし笑いあう。

『だからこそ。我等はファイアを強く。』

<ファイアが自分の力を完全に出し切れるようにするために。そうしなくてはな。女王とフェニックスの名が廃るというものだ。>

『そのとおり。ファイアに貰った名と共にな。』

<ああ。>

『<我等は、最後までファイアと共に>』

13話：陣術の練習を（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

今回は最後の頃を女王と不死鳥視点にしてみました。

14話：理由は会議で（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

また多少時間が飛びます。

14話：理由は会議で

「サイフィアス殿、こちらの書類の確認を。」

「分かりました、クロレア伯爵。そこをお願いします。」

「サイフィアス殿、民からの嘆願状です。目を通してください。」

「それはあちらに。これが終わり次第そちらに移ります。ヘルリア子爵からの連絡は？」

「いえ、まだ・・・再度連絡をいれます。」

「ではそのようにお願いします。返答が来次第、書類の確認作業に領地ごとの工事はどれくらい進んでいますか？」

「大体半分ほどです。特に問題はありません。」

「そうですか。引き続き作業を。」

部屋から人が去っていく。残ったのは二人。小さい机を使う方は書類を一度置き、はあ、と息を吐き出した。

「大丈夫か、ファイア。」

「大丈夫です、父上。今日中に終わらせますから。」

「いや、そうでは……そう言って片してしまうしなあ……」

丁度その時時計の針が??を指した。ポーン、ポーンと時計から音が響く。

「よう、お二人さん。昼飯持って来たぜ！」

バンツと音がしそうな勢いで扉を開けて入ってきたのはアルテキシア侯爵。私がケイライト様と呼ぶ方だ。

「ケイ……もっと静かに入って来れないか。」

「いいじゃないか、音は立ててないし？」

父の言葉もどこ吹く風とばかりにソファに座る侯爵。事実、扉は勢いだけで音は立てていなかった。それでもいきなり開いたら驚くが。

「ファイアも食べ。仕事しっぱなしだろう？父上と同じで能力あるからなあ」

茶化しをいれつつ持つてきた紙袋を開け、中身を取り出す。入っていたのは、三人分のサンドイッチだった。

もう何も言わないのか、父もソファに座る。この執務室は二人掛けソファが二つと一人掛けが一つ。侯爵と私はそれぞれ二人掛けへ、父は一人掛けに座った。

サンドイッチを食べながら会話は続く。

「にしても書類の山か、あれ。どっちの机も多いな。ファイアの方が多いか？」

「そうですね？いつもああですよ？」

「まじかよ……。9歳でよくやるな、ファイアは。貴族の餓鬼はみんな10代後半からだぞ？」

「私より才能があるからな。」

父がため息を一つ。ケイライト様が言うには多い書類。当たり前だと思っていたけど違うらしい。これより多いときがあったなんて言ったら驚くだろうか？

どうせだから、と仕事を始めたころから気になっていたことを聞いてみた。

「でも、なんで皆さん私の指示を聞いてくれるんでしょうか？父上がいるからではないのですか？」

私の言葉を聞いた二人が面食らったような顔をした。

「私は関係ないぞ、フィア。お前自身の力だ。」

「そつだ。大体、そしたら何で文句が出てこない？貴族はプライドが高い。簡単に子供の指示は聞かないさ。」

「そついつものなんですか？」

今度はうん、と大きく頷く二人。息が合っていてちょっと面白い。

「分からないか？そつだな・・・じゃあ、フィア、仕事始めて最初

の頃やった顔合わせと会議覚えてるか？」

「覚えてますよ。」

「それだよ。」

「え？」

「さすがに内容は忘れてるか。まあ、思い出したらでいいだろう。結論からいうとな、それなんだよ。それで貴族からフィアは一目置かれたってわけさ。」

「はぁ・・・」

いまいち分からないが、その時何かあったのだろう。思い出したいな、と思いつつ、そういえば仕事がたまってるじゃないかと早々と昼食を片付けて仕事に向かった。

「これから共に仕事をしていく方々に挨拶だよ、フィア。」

「挨拶？」

父は頷き、私を連れ立って歩き出した。向かったのは一つの部屋。中には十数人の人が集まっていた。

「遅れて申し訳ありません、皆さん。挨拶を、サイフィアス。」

大勢の前だからだろう、父は愛称で呼ばなかった。そのことに違和感を感じたが、これから公式の場ではこう呼ぶのだろうと納得した。

「初めまして、サイフィアス・ド・ロデス・ファルディナです。」

「おお、ファルディナ公爵。お待ちしましたよ。初めまして、サイフィアス殿。」

近くにいた初老の男性が話しかけてきた。蓄えられた髭が目立つ。

その後も何人かと挨拶を交わした。

しばらくして、部屋を移動し、今度は机と椅子が並ぶ部屋に来た。各々が着席し、私は父と一番端に座った。この時入ってきたケイライン様も近くに座った。

見渡すと分かるが、殆どが最初に声をかけてきた男性と同じ年齢で、若い者は少数だった。子供はもちろん私しかない。

「では、これから会議を始めたいと思います。右一番後ろの方から現在の担当の進行状況の報告を。今回初参加の方は担当するものをお願いします。」

会議の進行係に言われるまま、報告が始まる。私は左の一番後ろ。U字型のように並んでいることから、おそらく最後だろう。

この王国は貴族それぞれに担当が与えられる。貿易から農業までその種類は幅広い。

「以上で終了です。」

そうしているうちに順番が回ってきた。今は父の報告だ。

「私は税などを担当しております。現在」

さすがに馴れているだけあってその口調に淀みはない。担当するのが税など、生活にかかってくるものだから、不正を見逃して欲しいと賄賂が来たこともあったそうだ。報告するぞと脅したらしいが。

さあ、私の番が来た。

「今回から担当を持ちます、サイフィアスです。私が担当するのは領地の改善です。」

それからこれまで見つけた改善すべきこと、出来ることについて。

もつすぐ終わりと言つところで、口をはさんでくるものがいた。

さきほど農業について報告した子爵だ。

会議の場では身分は関係ない。そのため、誰もとめるものはいなかった。

「ですので、他の方面からも」

「ちよつとよろしいですか？」

「……ぜひぞ。」

子爵の顔にいやらしい笑みが浮かぶ。

「それはかならずやらなければいけませんか？内容としてはいさやかたらないのでは？」

「では、子爵に改善の提案がありますか？」

「ええ。まず、平民からの税の徴収を行います。それを使い、道の整備を。それから、下水の処理は平民に任せてよいでしょう。彼等も一応は人です、多少やり方を教えれば作ることも使うこともできます。」

「他には？」

父とケイライン様が肩を揺らした気がしたが、そちらは向かなかった。

「そうですねえ・・・市場、でしたかな？平民が食べ物などを売っているという。それにも税をとるべきです。あと、井戸を掘るのは時間の無駄です、ああいうやつ等は湖にでも汲みに行けばいいでしょう。私の提案はどうですか、ご子息殿。」

「ええ、よく考えさせられました。」

声に感情が籠っていないのを感じた。
気付かずに子爵は話し続けようとした。

「でしよう、ですから、」

「残念ですが、その提案は却下させていただきます。」

子爵は言われたことが理解できなのか口を開いて固まった。

「民からこれ以上税をとる必要はありません。道や井戸をつくるのも、日々つねに働いている民には不可能です。そもそも、なぜ税をとるのかはつきりしていたただかなくてはなりません。」

「な……。」

「下水の処理をすることは、畑などをもつ家にはかなり有益です。農業を担当する貴方ならば分かると思いますか？」

「そ、それは……。」

「とった税は何に使うのです？井戸などは我々が使うわけではないので、維持費はかかりません。税を納められなければその身を引き換えにしなければならぬ者が出てきますし、それを狙う方もできます。私が却下した理由が分かっていただけでしたか？」

子爵は完全に沈黙した。そればかりか、部屋全体が静まり返っている。

不思議に思いつつ、報告を閉めた私は席に着いた。

「これにて、会議を終了する。」

進行係の声で部屋から人が出て行く。私と父も出て行こうとしたが、貴族の一人にとめられた。

「サイフィアス殿。貴方はかなり聡明な方だ。6歳には見えない。私に協力できることがあればいっておくれ。」

「私も喜んで協力しよう。私は貿易担当の。」

それから初老の貴族のほとんどには声をかけられた。

それらが終わり、廊下を歩いているとき。父が話しかけてきた。

「さすがだな、フィア。彼等はお堅い貴族の方々で、悪い人ではないが、歳もあいまって若い者を認めない。それをお前は最初に認めさせた。」

「そうなんですか？よくわかりません、私は何もしてませんよ？」

「その歳であんなことが言える時点ですごくいいことなんだよ、フィア。どうか、そのままできてくれ」

「・・・ア、フィア！」

「えっ？」

気付くとそこは執務室だった。窓からのぞく日は赤い。

どうやら寝てしまっていたらしい。

「起きたか、フィア。帰るぞ？」

「あ、はい。」

顔を覗いてくるのは父だ。手に上着を上着を持っていた。冬・1の月だが今日は寒かったためもってきていたのだ。

幸い、仕事は片付いていたので、私は上着を持って立ち上がり父のあとを追いかけた。

14話：理由は会議で（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

今回はモブキャラとか脇役キャラなど、登場回数が少なくなるだろうキャラを出しました。

次回は準主役級がくるかもです。

15話・小さき者達(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

15話：小さき者達

「お帰りなさいませ、ロデス様、サイフィアス様。」

「ただいま、セバスさん。」

「ただいま、セバス。皆は部屋にいるかい？」

「はい、リリアナ様とメイフィス様、レイフィオ様はリリアナ様の部屋においでです。」

「そうか、ありがとう。さあ、フィア行こうか。」

「はい。」

家に帰り最初に出迎えてくれたのが執事長のセバスさん。セバスは愛称で、本名はセバスチアさんという。貴族ではないので苗字は存在しない。

私が最初に彼をセバス、と呼んでから屋敷内では使用人に対して愛称で呼ぶようになった。メイド一人一人もちゃんと愛称呼びになっている。

ファルディナ家では昔から使用人も大事に、という考えが根付いており、屋敷内であれば使用人も主人を名前呼びになる。これは対等な存在だ、と扱っている証で、その証拠に先ほどの執事長の呼び方は名前となっていたのだ。

「サイフィア様、上着をお預かりいたします。」

「あ、ありがとうございます。じゃあ、よろしくね。」

父のあとを行くこうとしたとき、セバスさんに声を掛けられ、上着を渡した。

さすがプロだな、と真面目に思ったりする。

「「ファイア兄様ー!!!」」

「おっと・・・ただいま帰りました、母上、メイ、レイ。」

母の部屋に行くと三人が出迎えてくれた。

「おかえりなさい、あなた、ファイア。二人とも、ファイアから離れな

さい。」

「はい。」

そう返事をして離れない二人。父が椅子に腰掛けたのを確認して、私も二人をくつつけたまま椅子に座った。持ち上げられたことに喜んで、二人は笑顔だ。

この二人は私の妹と弟で、レイフィオは父似の髪、メイフィスは母似の髪を持ち、どちらも濃い紫色の瞳だ。私と7歳も離れた双子で、今は2歳になる。

生まれは冬・3の月で私と同じだ。日にちは24日。あの頃母が妊娠していたとは気付かずに、私の誕生日のときに、今年は妹が弟をあげるわ、と笑顔で言われた。

そして生まれた二人。私を驚かせようと隠していたというから驚きだ。

「ねえ、ファイア兄様、部屋で本読んで？」

「ファイア兄様、騎士ごっこもしよう？」

低い視線から上目遣いでいつてくる二人。これに勝てる日は来ないだろうな、とおもったりする。

「分かりました。では、部屋に行きましょう。失礼します、父上、母上。」

私の返事を聞いて声を上げて喜ぶ姿を引きつれ、私は部屋を出た。

<ファイア。>

「あ、エンフォニー。ただいま。今から二人と遊ぶんだけど・・・来る?」

<お帰り。暇だからついてゆこう。>

向かう途中、どこからともなくエンフォニーが現れる。

契約して2年ほど経った今でも彼女の姿は変わっていない。透明感あふれる白の髪と瞳。背はまだ追い越せない。

「エンフォニーだ!」

レイがエンフォニーを指差して叫んだ。メイも気付いたらしく、同じく顔を綻ばせた。

二人に何故姿がみえるのかエンフォニーに聞いたところ、子供のころは魂が浄化されたばかりなので澄んでいる者が多いらしく、それが理由らしい。

二人がエンフォニーに近づく。精霊はスペックがあるほど実体化できるらしく、そういえば練習中も見えないのでは？と思った私が聞いたところ実体化したから魂が澄んでいなくともなんとなく存在を感じるらしい。だからか、と納得したのはいい思い出だ。

「ファイア兄様、エンフォニーとフェニアスも加えていい？」

『そうするべきか？ファイア。』

声が出たほうを振り向けば、窓辺にフェニアスが止まっていた。その体は一メートル近い。あと5年ほどで3メートルほどになるらしい。

「フェニアスがいいなら。」

『では、私も行く。今日は客がいないだろう？』

「うん、大丈夫。」

フェニアスはその容姿から人前に簡単に姿を現せない。そのため、私ที่บ้านにいないときはほぼ森にいる。私を通して私と同じものを見られるのから不満はないのだとか。

彼曰く、相棒であればそれでいい、とのこと。私は彼の気遣いが嬉しい。だから、家にいるときは出来るだけ一緒に過ごししている。

私が腕を出すと、フェニアスはふわ、と浮いて室内に入ってきた。そして腕にとまる。

一度これをやりたいとレイにせがまれたが、それだけはフェニアスが頑として譲らず、やらないままとなっている。

その後、レイの部屋でレイ希望の騎士ごっこを、メイ希望の本の朗読をした。

二人の寝顔を見つめ、自然と頬が緩んだ。

そんな私をエンフォニーとフェニアスがいつも以上に優しげな瞳で見つめていた。

15話・小さき者達（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

自分で小説の確認を行っていたところ、エンフォニーの矛盾点に気が付きました。やや強引ですが、この回で補足とします。

16話・雪降る祝いの席で（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

16話：雪降る祝いの席で

ふわふわと白い雪が舞う。

「メイ、レイ、どこにいますか？」

「ここだよ、ファイア兄様！」

そろった声が聞こえ、そちらに足を向けた。地面を踏むたびサクサクと音がした。

今日は冬・3の月の最初の日。庭はまさに雪化粧と言っているほど変わっていた。一面を雪が覆いつくしている。今も振り続ける雪は止まることを知らないかのようだった。

「メイ、レイ、もう支度をしなければいけませんよ。メイドの皆さんが着替えの準備を待っています。今日はお客様も待っていますから、欠席は出来ませんからね。」

雪の中から足音がして駆けてくる者が二人。続いて勢いよく抱きついてくる。

「おきやくさま？だれ？」

メイの不思議そうな声にレイも首をかしげた。その様子がおかしくてつい笑ってします。

「ははっ・・・私にもくわしくは分かりませんが、知り合いだけですよ。さあ、行きましよう？誕生日の主役がいなければ始められませんか？」

「はい。」

寒さに負けない元気な返事を聞き、二人を待っていたメイドに預けると、私も準備のため、部屋に向かった。

『フィア。今日はお主とメイとレイの誕生日パーティーなのか？』

部屋に戻るとフェニアスがベッドの上にいた。返事をしつつ、ワードロップから着替えを取り出す。私は簡単なことは自分でやる主義なのでこれがいつものことだ。さすがに正装はすべてはできないが。

「そうだよ。私とメイとレイは同じ誕生日だからね。一緒にやっ
てしまおうってわけ。」

『そうなのか。また大勢の客がくるのか？』

「ううん。メイとレイがまだ幼いから呼ぶのは数人だって。ごめん、
フェニナス、また部屋にいてくれる？」

と、その時メイドが部屋に入ってきた。その手にあるのは正装だ。
備え付けの鏡の前に立ち、着替えを手伝ってもらった。

『問題ない。我も見てよいのだろうか？』

「（うん、もちろん。）」

その間もフェニナスとの会話は続く。見るとはもちろん、私の目
を通してみていいか、ということである。

「サイフィアス様、準備が整いました。」

「ありがとう。(それじゃフェニアス、行ってくるね。)

』』

メイドに礼をいい、部屋を出る。扉を開いたところで、誰かに当たった。

「「「」

「えっ!?メイ、レイどうしました?」

いたのはメイとレイ。二人も正装に着替えている。3歳なのに服に着られていないその姿。将来が恐ろしい。

「フィア兄様といっしょに行こうと思って」

「ははづえも、ちちづえもそつしなさいって」

順番にメイ、レイだ。幼い二人に手を握られ、私の顔も緩んだ。

「では、参りましょうか。あ、先ほどは大丈夫でしたか？怪我は？」

「大丈夫！ほら、早く！」

ぶつかったことなど物ともしない二人にすごいな、と思いつつも、言われるまま急いだ。

「おめでとうございます、サイフィアス殿。そして、メイフィス様、レイフィオ様。」

「ありがとうございます、クロレラ伯爵。さあ、メイ、レイ。」

私が促すと二人も小さく会釈をする。

「初めまして、レイフィオです。本日はありがとうございます。」

「メイフィスです。お会いできたことを嬉しく思います。」

伯爵の顔が挨拶を受けて笑みを形作る。

「さすがはサイフィアス殿の妹、弟君ですな。」

それを聞いてメイとレイの顔も綻ぶ。

「サイフィアス、メイフィス、レイフィオ。こちらに来なさい。」

父に呼ばれる声が聞こえ、伯爵に断りを入れてから私達はそちらに向かった。

移動するたびに声が掛けられ、そのたびに立ち止まる。少し時間を要したが、数人だったためすぐに終わった。

「三人とも、誕生日おめでとう。今日はサイフィアスも知っていると思うが、城内で働いている方々だけだ。残念ながらケイは来られなかったが……」

「はい、覚えています。皆さん祝いに来てくださり……父上のおかげですね。」

「またお前は……お前の誕生日会も含まれてるからだというのに。気付かないのも考え物だ。メイ、レイ、楽しんでいるか？」

苦笑しながら父は話題を二人に振る。二人はすでに挨拶だけで疲れていた。

「「ふえ・・・？」」

返事も眠そうで、瞼が落ちかかっている。

「眠そうだな。部屋に下がらせよう。」

「でしたら父上、私が送っていても？」

私の提案に父は頷いた。

「ああ、そのほうが二人も納得するだろう。一番になついているのがお前だからな。フィアは大丈夫か？」

「大丈夫です。では、行きますね。」

「そうか。お前は小さいときからそうだからな。お休み。」

「はい、お休みなさい。」

私は二人の手を握ると、辞退の挨拶をして部屋に向かった。

「ふう……。」

『おかえり、ファイア。早かったな?』

自分の部屋に入りベットに倒れこむ。正装の上着はすでにぬいであるので問題はない。

「うん。メイとレイを部屋に送ってきたからね。今日は辞退するのが早かったんだ。」

『そうなのか。何か貰ったのか?』

「うん。毎年なことだけど、欲しいものはないからね。」

<それでよいのか?>

フェニアスとの会話中にエンフォニーが現れた。彼女は基本、刻印を通して私の中にいるため、いつでも現れることが可能だ。といっても気まぐれなところがあるのでいたりいなかったりだが。

「といつても・・・無理やり貰うより、欲しいものがある二人にあげるべきじゃない？」

剣が折れれば新しいのをもらえるし、新品の服も前のが古くなれば作ってもらえるし。不満はないよ。」

<だが・・・>

「それに私にかけのお金が減れば領民のために使える分が増えるし。」

精霊と不死鳥は思った。この者はどこまで人のことだけを考えるのだろうか、と。

「まあ・・・それも自分が納得してやってるから、気にしないで？」

<ああ・・・。>

<なあ、フェニアス。>

『なんだ？』

テラスに影が二つ。部屋の主はすでにベットで寝ている。

<誕生日は物を貰うべきなのだろう？>

『まあ、そうだろうな。しかしフィアは受け取らない。仕方なくフィアの父と母はいつもばれない程度に服や剣をよくしている。』

<そうなのか？>

『そうなのだ。そのほうがフィアも納得するからな。言つなよ？人のためになにかしたいと思えるような奴だからな、フィアは。』

<そのとおりだな。・・・ところで、フェニアス。お前は相棒になにかやらないのか？>

『 やっても受け取らないだろう。 』

< それで汝に相談がある。 >

『 ……? 』

「ここそと囁きあう二人(?)。それを聞いているものは誰もいない。」

『 よかるう。公爵は許可を出すだろう。 』

< ファイアは納得するだろうからな。 >

そしてははは、と笑い声をあげる。あくまでも静かに。

16話：雪降る祝いの席で（後書き）

悪巧みではありませんよ？一人と一羽からのプレゼントです。（たぶん。）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

17話・視察という名の・・・（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

申し訳ありません、書くのに一日以上つかってしまいました。

17話：視察という名の・・・

「視察・・・ですか？父上。」

「そつだ。実際に見たほうが得られるものもある。それに将来は公爵家を継ぐ身だ。今から領地を見ても問題はない。仕事と兼用してな。」

今いる場所は父の書斎。パーティーから二週間たった今日、呼ばれたのだ。

「分かりました。では、仕事のない明日行きたいと思います。視察結果をまとめる必要はありますか？」

「いいや。民の現状を確認してくるだけでいい。重要なのは交流だからな。馬車を用意させるか？」

「いえ、いいです。身分を隠して行きたいと思いますので。」

「そつか、分かった。お前の言うとおりにしよう。」

「ありがとうございます。では、失礼します。」

一礼し、扉に向かう。そこで父に呼び止められた。

「ああ、フィア。今は冬だからしっかりとした格好をね。」

「はい、分かっていますよ、父上。」

父の心配の言葉に嬉しさを感じる。父に微笑み返して、私を扉を閉じた。

「ああ、寒いね……。フェニアス、大丈夫？」

「大丈夫だ。お主こそ大丈夫か？」

翌日。私はさっそく出掛ける準備をした。玄関の扉を開けると冷たい風が入り込んできた。

空は雲ひとつなく晴れている。地面に積もった雪が消えるのも、時間の問題だろう。

そのまま玄関から少し横にずれた場所に私はたった。肩にはフェ

ニアスが乗っている。

「うん。それじゃ、いこうか。エンフォニー、準備はいい？」

<いつでもいいぞ。>

「よし。 <その者 光を導き 彼の道に身を任せる 名をスピード・オブ・ライト・ムーブメント>」

その瞬間。彼は姿を消した。

「<キャンセル>」

その言葉と同時に彼の姿が現れた。肩には相変わらずフェニアスが乗っている。

「しくるつさま、エンフォニー。」

<ああ。それにしても、これはすごいな。汝が作ったオリジナルな

だけある。>

エンフォニーが褒めるこの陣術、実は私のオリジナル。名前は簡単に光速の動き。光と同じ速さ、というわけだ。

「そう？思いつきなんだけどね。」

光ってこんなこともできるのでは？という思考から生まれた術。思いつきで普通は思いつかないことを気付かなかつたりする。

『ところでフィア、目指す町はあそこか？』

そこでフェニアスが話しかけてきた。ん？と私もそちらを向く。

見えたのは簡単な獣避けが作られた場所。人の姿も見える。

「うん、あそこだね。ここから大体500メートルくらいかな？」

ミーンはメートルと同じで、センチはセンチと何故か一緒。けれどもこの世界ではセンチミーンという。これ、私の中で無くならない不思議。

「ちょっと遠くで止まりすぎた？」

『よいのではないか？ファイア、寒ければあの陣術を使うとよい。』

「そつだね・・・あつ！」

私の突然の大きな声にフェニアスの肩がビクリとゆれた。あたり

『どうしたのだ、ファイア。』

「思い出したただけだよ。ごめん。さあ、行こうか。」

苦笑いを残し、私は歩き始めた。

「いらっしゃい！冬限定の野菜、入荷したよ！」

「いらっしゃいませー！！女性必見の美容にいいもの！どつですか
ー！！」

「今流行色の布、たくさんあります!どうぞいらんください!」

「(すごい活気だね、フェニマス・・・)」

『そうだな・・・』

町の市場は大勢の人で溢れていた。冬だというのに活気に満ちている。

人の間を縫うようにして、私は進んだ。

「いらっしゃいませ!一名様ですか?」

しばらく歩き、大体を見て回ったところで、人の波に押され、私は一軒の店に入った。料理屋らしく、食事中の者がいる。人気のようで、開いているテーブルは少なかった。そのうちの一つに案内され、座る。

「お勧めはラムの煮込みです。どうですか?」

「では、それをお願いします。」

「はい、かしこまりました。」

案内をしてくれた店員の女性が厨房に消えた。フェニウスは隣の椅子に止まっている。テーブル同士の感覚は広いので、大きい彼でも問題はなかった。

私はゆっくりと店内を見渡す。どの客も笑顔で談笑している。視察に来たかいがあつたな、と思った。

『フィア。どうやら術は効いているようだな。』

「（そうだね。誰も私を見て固まらないし、フェニウスを見ても驚かない。大丈夫そうだね。）」

そう、じつは今の姿は栗色の髪と目、フェニウスは小さなただの鳥と見られているように術がかけてあるのだ。ついでに、違和感をもたれないような術も施した。

民から敬遠されないようにという対策が功をそうしたようで、誰も気付いていない。

さっき思い出したのもこの術だったりする。

「それにしても皆幸せそうだね。視察にきて良かったよ。」

『そうだな。フィアの提案が役にたつておる。』

「おまたせいたしました、ラムの煮込みです。」

「ありがとうございます。いただきます。」

店員の女性が料理を運んできてくれた。用意されたナイフとフォークを取る。

「……うん。おいしい。」

ナイフを使う必要がないほど柔らかい肉。口の中でソースと合わさって深い味がでていた。

私の一言をきいたのだろう、隣の男性が話しかけてきた。見た目から10代後半だろうとあたりをつける。

「そうだろう、坊主。ここの料理は町じゃ一番うまいんだぜ。こっちいいか？」

私の向かいの席を指差してきたので頷くと男性はそこに座った。

「俺の名前はクリス。しがない傭兵さ。」

「傭兵、ですか？」

「ああ。農作業も他の職も肌に合わなくてな。唯一のとりえの剣を手に取ったって訳だ。」

これはいい収穫かもしれない。剣を使う職を考えることにしよう。私がひそかにそんなことを考えていると、彼に質問をされた。

「ところで、坊主、名前は？」

「え？・・・アスカです。」

アスカ。正体がばれないために考えた名前だ。本当の名前に一文字くっつけただけだが。

「そうか。言い名前だな。アスカは、他の町の者か？」

「どついつ意味ですか？」

「ああ、なんだか此処にいなれていない奴のように見えてな。この

町の溜まり場みたいなところでもあるからな、ここは。」

「そうなんですか・・・私は町のものではありませんが、同じ領地のものです。」

「そうか。同じ幸運な奴どうしだな。」

「幸運？なんのことですか、クリスさん。」

私が問い返すとクリスさんは不思議そうな顔をした。

「知らないのか？この領地のことだよ。他の領地と違って、ここは税が重くないし、ひどいことも何もない。」

「税ですか？他の領地も同じなのでは？」

「違うんだよ、これが。俺等の領主様が税に関することを取り締まってくれているだろ？他の領地では賄賂とかそんなものが黙って使われてるらしい。領主様も大変だよな。」

「はぁ・・・その領地が具体的にどこか知っていますか？」

「ああ、ええと・・・ベルなんとか子爵とイデイト男爵とか、じやなかったかな。その領地の住民が何人か逃げてきてたりするしな。」

その二人の人物をあとで父に報告しなければ、と頭に書き込む。

しばらく話しているうちにだんだんと人が集まってきた。

「領主様のことを話してるのか？ここの領主様はいい人だよな！」

「それじゃ他の領地の領主はみんな駄目ってか？捕まるぞ？」

「いいじゃないか、貴族は誰も聞いてないんだからな！」

店に笑い声が響く。どうやら酒がはいつているらしい。外も暗くなつて来たからそういう客もいるのだろう。

「だが、なんといっても人気なのはご子息様だな！」

いきなり自分のことをいわれてドキリとする。クリスさんにどうした、と目で聞かれたけれど、笑ってごまかした。

「坊主、お前くらいの歳でこの領主の息子様はすばらしい方なんだぞ！俺等のために頑張ってくれているんだからな！」

「そうよ、この料理屋がやっていけてるのだって、ご息様が家畜の肉を商品とする許可をくださって、しかも名前もつけてくださったからよ」

見た目が仔羊っぽい、じゃあラムで、と軽く決めた自分になにか言いたい。

「市場つてよばれるやつも作ってくださり、こっちは儲かって何よりだ。」

「俺達は幸福な領民、そういきれる！」

『ファイア？』

「何、フェニアス。」

『いや、さつきから静かだからな。どうかしたか？』

「ううん。ただ、嬉しくて。」

屋敷に帰る為に町からたところ、私は空を見上げた。この空は汚れておらず、どこまでも澄んでいる。空神のように。

「私がやったことは間違っていないって言われて。彼女に言われてから実際やってみて、民から話を聞いて。やってよかった、そう思えたよ。」

『そうか。』

「フェニアス。」

『ん？』

「ありがとう。エンフォニーも。私ができるように父上に頼んでくれたでしょ？」

『気付いていたか。』

「なんとなく。収穫もあったし。だからありがとう。」

『・・・そうか。』

そういったフェニアスは顔を背けてしまった。

「フェニアス・・・照れてる？」

『照れてなどいない。』

<照れているな>

『エンフォニー！』

フェニアスが咎めるがエンフォニーは笑みを浮かべたままだ。

<はは。では照れているフェニアスに変わって私が言おう。どういたしまして、だ。>

ますますむくれるフェニアスに私もつい笑ってしまふ。

その日は結局、屋敷に帰るまで笑っていた。

17話・視察という名の・・・（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

三月二十二日修正いたしました。燐架。さん、感想ありがとうございます。
います。

18話・職場での驚き - 別視点Ⅰ (前書き)

読んでくださりありがとうございます。

18話：職場での驚き - 別視点 -

「小さい子供？あいつが？」

今日は意外なことを聞いた。しかも王城で、だ。

「はい、そのようです。ファルディナ公爵が共に歩いていたら・・・」

「ふうん・・・そうか。ありがとう、若いメイドさん。」

「あっはい。失礼します。」

顔を赤くしながらメイドが立ち去る。こういう光景も親友といると見慣れた。

「さて、じゃあ行ってみますかね。」

そして、俺、ケイライン・ド・ランゲージ・アルテキシアは親友の執務室へと向かった。

頭を小突かれ、身を起こす。視界には親友と噂の子供が立っていた。

挨拶をすると「おはようじゃない！」と文句を言われた。仕方ないじゃないか、来るの待って寝てただだから。しかもまだ午前中だぜ？

息子、といわれて子供の方をむくと顔が驚きを表していた。だぶん親友のこういう姿を初めてみたんだろうな。昔からこうだったんだが。

親友、ロデスの息子は名前をサイフィアスというらしい。じゃあ、愛称はフィアだな、と思ったり。ついでにロデスはロディーだ。こいつを愛称で呼べるのは親族以外は俺くらいだろう。いや、あと数人いたか？あいつ等とか。

サイフィアスはロディーと同じく俺の名前をすぐ覚えた。さすがだな。騎士団にいたときは覚えられなくて名前だけだったからな。かなり新鮮だ。

ロディーは公爵だからとかいって正体隠してたし・・・あの時は後悔したな。周りから敬遠されるし。懐かしい思い出だ。

流れてそんなことを思い出したりした。サイフィアスに名前を呼んでいいと言ったらまたロディーに頭をこづかれた。仕方なくその

まま退散することにした。

昼食時。今日はロディーも執務室でとるだろうと思い、誘わずにまっすぐ食堂に来た。

しかし驚いたことに二人の姿が見えた。周りが空いているのが分かる。

俺も二人と同じパスタをとって、反対側の席についた。

話しているうちにフィア、と自然に呼ぶようになった。ケイライン様と呼ばれなんとなくすぐつたい。

それにしても二人とも似てるな。好きな食べ物も動作も。おまけに周りからどう見られているのかさえ気付いていない。二人で俺の問いに首を傾げたところとか特に。

昼食はいつも以上に楽しく終わった。

フィアが仕事を始めてからしばらく経ったある日のこと。いつもどおり俺は執務室に来ている。今日は昼の時間だから持ち物は昼食のサンドイッチだ。

席に座ったところでフィアにこんな質問をされた。

「でも、なんで皆さん私の指示を聞いてくれるんでしょうか？父上がいるからではないのですか？」

かなり勘違いをしている質問。やはり自分の魅力に気付かないのは血筋ゆえか。

俺が説明してもフィアは納得していないようだ。あのとき、あんな言葉を6歳で言った本人なのに。そしてそれがファルディナの天才と呼ばれる由縁にもなった時だった。

あの時とはフィアが仕事を始めたばかりで王城で働く貴族に挨拶をした時のこと。今働いている貴族は悪くはないんだがかなりの堅物。しかも古株が多い。かなり不安だった。

そんなことをかंगाえている自分におかしさがこみ上げてくる。それも当たり前か、と思った。あの子と一緒にいれば、だれでもそうなるだろう。将来、罪作りな方と呼ばれるかもしれない。

会議が始まった。何事もなく進み、俺の番も終わる。俺の担当は騎士団関係。といっても幅広いので、この担当はあと何人かいる。とうとうフィアの番が来た。その内容は6歳とは思えないほどまとまっていた。ロディーは手伝っていないそうだから、フィアの実力なのだろう。

古株のやつらも頷いたりしている。これはフィアの勝ちだな、と

内心で思った。

と、そこで意見をのべる者がいた。名前は……ベル……えーと……そう！ベルリア子爵だ。最近仕事を始め、まだ仕事の意味も分かっていない奴だ。

ああ、イライラしてきた。どんな教育つけてきたんですか、子爵どのー？

彼の言葉は全て自己中心的だ。フィアもよく頑張っただけだと思っ

そろそろとめようか、と身を乗り出したとき、それを感じた。

まるで、殺気を直接当てられたような。肩が自然と揺れた。ロデイーも俺と同じような反応をしている。他の者も感じ取ったようだ。

しかし、その子爵……もういいか、バカで。バカは気付いていないようで、そのまま話し続けている。お前が話しかけている人物から発せられているのに何故気付かないのかその頭に聞きたかった。

「ええ、よく考えさせられました。」

その声に感情は籠っていない。

「ですが、その提案は却下させていただきます。」

それからフィアはすごかった。バカの提案全てを巧みに言葉を操

って封じたのだ。

それには他の、特に古株の奴等が驚いていた。

会議が終わると、バカはすごすごと帰って行った。そうじゃなければこっちから追い出しているところだ。

そして古株の貴族の殆どがフィアに協力を申し出ていた。フィアはそのままの意味でうけつつとっていたが、それはその貴族達がフィアの担当する仕事のうちなら従う、といっているようなものだ。

俺やロディーの時、そう簡単に動かなかった奴等がフィアと対等に話しているところをみていると、ロディーと同じで誇らしかった。

「10歳か、じゃあ騎士団の入団テストだな。お前とおなじようにするのか？ロディー」

「そうだな。フィアの希望しただが。」

「ふうん？まあ、しばらくは仕事もお前の担当になるんだろ、領地の改善は？」

「いや。」

「は？じゃあどっちもやるのか？頑張りすぎじゃないか？」

「そうなんだが、私が騎士団にいたころ多少仕事をしていたのがばれてな。私の時は父の手伝いが殆どだったのだが。仕方ないからできるだけ、私がやるつもりだ。」

「そうか。まあ、頑張れよ。」

「お前は手伝ってくれないのか？ケイ。」

「うん。俺はお前らみたく多くの仕事できるような人間じゃないからな。ほら、酒飲んだらどうだ？明日は仕事ないんだろっ？」

「。。。。。」

親友同士の夜は、酒の香りが常に漂っていた。

18話：職場での驚き - 別視点Ⅰ（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

感想、批評、待ってます！

19話：二人の秘密（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

19話：二人の秘密

「では、ファイア。私はクロレア伯爵の所に行ってくるからね。」

「はい、分かりました。」

ぱたん、と扉が閉まり、父が出て行った。ここは王城の執務室。いつもどおり仕事をしている。

<ファイア>

「ん？何、エンフォニー？」

目を通した書類を机に置く。そこでエンフォニーが話しかけてきた。

<そろそろ休まないか？>

「そうだね。でももう少しだから。」

時刻は4時。時計の針が？を指していた。私はあと数枚の書類を指差す。反対側には私の座高より高い紙の山ができていたりするが。

<そうか。では、>

そこでエンフォニーが扉の方に目を向けた。私も釣られてそちらを向く。人が来る気配はしなかった。

鍛錬のおかげで鍛えられていることの一つを使うのはこんな時だけだったりするのだが。

「どうかした？」

<ちかくで光の精霊と水の精霊が騒いでいる。何かを探しているよ
うだな>

「どうしたんだろう。あ、何を探してるか分かる？」

<・・・人、らしいな。地面を見ていない。部屋があるほうを見て
いる。近づいてくるぞ。>

「えっ？」

何故かエンフォニーの顔が笑っている。私が声を上げる前に扉が勢いよく開いた。

「サイフィアス・ド・ロデス・ファルディナはいるか！」

「はいっ！……姫様？」

現れたのは紛れもない、彼女だった。

「久しぶりですね、サイフィアス様。今、紅茶を持ってこさせますわ。」

「いえ、お気遣いなく。」

「あら、せっかく招待したんですもの、これくらいはいたしませんと。頼んだわよ、パメラ。」

「はい、承知いたしました、姫様。」

メイドが扉を閉めるところまでしっかりと確認して、姫様は思いっきりため息をついた。

「はぁ・・・疲れた！」

「姫様・・・」

「何だ、サイフィアス。言いたいことがあるならいつてみる？」

「言葉遣いをどうしたんです？」

「使い分けている。こっちが素だ。他の者の前ではちゃんと演技をしている。問題なかるう？」

問題ありすぎです、という言葉は飲み込む。

私は視線を彼女へと向けた。

「私がここに来て問題は無いのでしょうか・・・？」

「大丈夫だ。」

そう言っただけで彼女は胸を張った。

「私はたまたま散歩をしていた。すると偶然公爵家嫡男の姿が。そういうば、あやつはかなり有名なあれ・・・よし、招待しよう。」

「あれ？あれとは？」

「知らないのか？まあいいか。とにかく！私が招待したかったからしたのだ。文句はいわせない！」

私は曖昧に笑った。仕事は明日に回しても問題ない量だからいいか、と考えつつ。

それに、喋っている彼女を見ていて楽しかった。

「聞いているか？サイフィアス。」

「はい、聞いていますよ。姫様。」

私の言葉に彼女が頬を膨らませた。

「私のことはサラと呼べ。名前は教えただろう？皆が皆、私を姫と

しか呼ばん。自分の名前を忘れそうだ。」

そういった彼女の目は諦めが浮かんでいた。
では、と私は妥協案をだす。

「では、こういうときだけですな。サラ様。」

私の一言に彼女はたちまち笑顔になった。私も釣られて笑みを作る。彼女が今固まったように見えたのは気のせいかな？

「・・・ああ！それでいい。いまさらだが、お前をサイフィアスと呼んで問題はないか？」

「ええ、大丈夫です。私もご子息様なんて呼ばれますからね。名前を忘れそうですし。」

「そうか。では、これは二人だけの秘密だな。」

秘密、という言葉に一瞬ドキッとしたのは気のせいだろう。

その後、メイドが運んできた紅茶を飲みながら過ごした。

そして時計が？に差し掛かる少し前、私は執務室へと戻った。

「エンフォニー、聞き忘れたんだけどサ・・・姫様はどうやって姿を誤魔化す陣術をつかっていたんだろう？一緒にいたのは光と水の精霊だよね？」

<おそろく、術がこめられたものを持っていたんだろう。>

「道具？風の陣術がこめられた？そんなのあるの？」

陣術がこめられたもの。私にとって初耳だった。

<ある。術師が術をこめるのだ。出来るものは少ないから、希少な物だが。ネックレスやイヤリング、なんでも可能なんだ>

「そうなんだ・・・」

<ファイアも出来るぞ>

「え？」

<フィアはそれだけの才能があるからな。今度やってみるといい>

「そうだね・・・」

こうして、驚きを含んだ一日は終わった。

19話：二人の秘密（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

20話：入団テストを受けに（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

20話：入団テストを受けに

「おはようございます、サイフィア様。朝でございます。」

「ああ、おはようございます。」

カーテンが開かれ、朝日が視界に入り込んでくる。今日は春・3の月。テラスにでると、暖かい日と対照的に風が少し冷たかった。

「サイフィア様。モーニングティーをお持ちいたしました。」

「ありがとうございます。」

メイドが置いてくれた紅茶を口に含む。モーニングティーらしく、すがすがしい味わいがした。頭にちらりと彼女と飲んだ紅茶が思い出され、私は口元に笑みを作っていることに気付いた。

『フィア。』

「（何？フェニアス）」

丁度その時フェニアスが話しかけてきた。メイドがいるので声は出さない。

『今日は入団テストとやらがあるのだろうか？』

「……………」

フェニアスの言うとおり、今日は<神空騎士団>の入団テストの日なのだ。

内心緊張していたりする。それでもこうやって紅茶を飲む余裕はあるのだが。

『フィアなら受かるだろうな。ところで、テストはどんなことをやるのだ？』

「(テストは、剣術と軽い筆記をやるんだって。)」

『ほう。筆記とは何をやるのだ？』

「(たぶんサイファルド王国についてだろうね。)」

と、フェニナスとそんな話を話していたとき。父から呼び出しが来た。

「（なんだろう？行ってくるね、フェニナス。）」

『うむ。』

私は足早に父の書斎に向かった。

「失礼します。」

扉をノックし、父の返事を聞いてから書斎に入る。父はいつもどおり椅子に座っていた。

机の前に立つ。父が口を開いた。

「お前を呼んだのは、騎士団の入団についてだ。」

「何か問題が……？」

父が言いづらそうな顔をしている。何かまずいことでもあるのだろうかと私は不安になってきた。私の表情を見て、慌てて父が喋りだした。

「いや、そうじゃない。違くてだな・・・フィア、お前は騎士団の今の状況を知っているか？」

「たしか、殆どが身分を持たない方だと・・・」

「そのとおりだ。だから、騎士団で貴族は敬遠されがちだ。貴族を嫌っている者もいるしな。特に、公爵家ともなればなおさらだろう。」

そこで私も父が何を言いたいのか理解した。

「つまり、貴族でない人物となって入団すべきだということですか？」

「ああ、そうだ。そのほうが、お前も過ごしやすいだろう。嫌ならいいのだが」

「分かりました。そうさせていただきます。」

私の言葉に父は嬉しそうに顔を緩めた。

「そうか。では、今後は」

執事が出かける準備ができたと呼びに来るまで、私と父は話して
んでいた。

「私がいけるのはここまでだな。行ってらっしゃい、アスカ。」

「はい、行ってまいります。」

父に見送られながら王城の門をくぐった。父は馬車の中で待つて
いるらしい。私が一緒に馬車で王城に入るとばれる可能性があるか
らだ。

しばらくして、私はこれから入団テストを受けるのだろう、建物
に向かう集団に混ざった。

人数はざっと80人ぐらいだろうか。

あたりを見渡していると、前を歩く子がハンカチを落としたのに
気付いた。それを手にとり、その子に近寄る。

「あの」

「ん？あつハンカチ！ありがとう。」

「いいえ、どういたしまして。」

私がハンカチを渡すと彼は恥ずかしそうに笑った。

「これ、なくすと大変なんだよ。妹からでさ。」

「お守りってことですか。優しい妹さんですね。」

「いや、喧嘩ばかりだけどな・・・俺の名前はシディアン。君は？」

「私はアスカ。貴方も入団テストに？」

彼は大きく頷いた。肩まで伸びている黒い髪が揺れる。

「ああ、騎士団は憧れだったからな。此処いる皆がそうだろうね。」

「憧れか……」

憧れ。私の中で騎士団は憧れだったのか分からない。けれども、なりたかったものとしてならばそうだと言えるだろう。

目的地に着くまで二人で話した。彼は住んでいる町や家族、騎士団をどう思うのかなど、話の種は尽きなかった。

「あ、ついたみたいだな。」

「此処が……」

シディアンの声にそちらを向く。見えたのは白い建物。おそらくここが会場なのだろう。

「入団テストを受ける諸君、よく来てくれた。私は試験官のコンダクター。さあ、中に入りたまえ。」

入り口に高身長男性が立っていた。聞いたところによると、名前はコンダクターというらしい。その雰囲気から、上に立つ者のよくな気がした。

だんだんと人が入っていく。私も最後のころに続いて入った。

「君がアスカだね。では、私と模擬戦をしてもらおう。」

「はい。剣は自分のを？」

私の返答に試験管の彼はやや驚いた顔をしながら頷いた。

「質問しないとは、めずらしいな。」

「これは試験ですから、私はやるべきことをします。」

「そうか。では、説明からだな。最初にいったことを覚えているか？」

「一人ずつが剣の試験を別室にて行い、後に筆記を行う。尚、試験官にどんな注文をされても出来る所まで行う。」

「そのとおり。お前みたいに皆理解してくればいいのにな。・・・」

失礼、では始めようか。私からの質問は一つ。全力でかかって来い。それだけだ。」

彼が剣を構え、私もそれに倣う。二人だけが姿を見せる部屋の中で、空気のはりつめていくのが分かった。

「それでは」

神経を集中する。彼も神経を張り巡らせているのが分かった。

「開始！」

瞬間。その場に風が巻き起こった。

20話：入団テストを受けに（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

シディアンは黒曜石のオブシディアンから。コンダクターは指揮者でそのまんまです。

どちらも読みだけですので、おかしいところがあるかもしれません。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。小説の批評、待っています。

21話：テストの終了（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

とうとう受験が近づいてまいりました。もう少ししたら更新休止するかもしれません。それまで頑張って書きたいと思います。

21話：テストの終了

キーンッ

剣が勢いよくぶつかる。やはり騎士団団員だけあって、相手はすごかった。

力で押されそうになりながらも、私は全力を出すために動き続ける。

「はっ！！」

「まだまだ！本気でいいぞ！」

キーンッ カンッ ギーンッ

剣の交じる音は止むことがない。呼吸はまだ乱れないが、それも長くは続かないだろう。

そして終わりが見えなくなってきたその時。

シュッ・・・

空気を裂くような音をさせ、相手の剣が私の剣を飛ばした。

「ありがとうございます。」

「ご苦労さま。こちらこそありがとうございます。久しぶりに楽しかった。」

そういう彼の顔は笑顔だった。本気を出されていなかったようで残念だが、私も途中から楽しんでいたのでからお相手だろう。

「剣は問題なしだな。いまさらだがお前の力量に敬意を称して名を名乗ろう。俺はスイフト・ソード。こう見えて、騎士団剣術隊の隊長をしている。」

その言葉はかなり驚くべきものだった。剣術隊は騎士団でも人気があるのだとシディアンに聞いた。その隊長はかなり強いということだ。

そんな相手と模擬戦とはいえ戦えたと思うと嬉しくなった。

「そんな俺と長時間戦ったんだ、誇りに思え。さて、次は筆記だな？ 頑張れよ。」

彼がくれた笑みは私を応援してくれているようで、私は一礼して部屋をでた。

「初めまして、皆さん。僕は筆記を担当するポシテイオン。さて、皆さんは剣のテストは終わったよね？それじゃ今から、筆記のテストを開始するよ。」

そういう彼は柔らかかそうな金髪をもった人だった。口調も他の試験官と違ってかなり柔らかい。

「時間は50ニード。不正したら僕が外に飛ばしてあげるからね。」

前言撤回をする必要があるかもしれない。

「では・・・開始!」

カリカリカリ・・・

会場にペンが走る音が溢れた。受験者全員が納まる会場は端の人物がかなり小さく見える。

そこでパンツという音が響いた。そちらを見ると、空席の近くに試験官が立っている。腕を上げているところを見ると、どうやら何

かをしたようだ。考えられるのは陣術だが。

試験官は周りににこっと笑うと何事も無かったかのように前に戻った。通る席の貴族だと思われる少年達が紙に真剣に向き合っていた。

私もそこで配られたものを見た。問題数は30問ほど。一緒に配られたペンを手に取った。

「疲れた・・・」

「大丈夫ですか、シディアンさん？」

「呼び捨てでいいぞ。俺もアスカって呼ぶしな。アスカは疲れなかったのか、あのテスト。」

試験終了後。私は会場の入り口で合流したシディアンと門に向かって歩いていた。

「大変でしたが、面白かったです。特に剣の模擬戦などが。」

「そうか、俺もあれは楽しかったけどな。」

「でしよっ?」

二人して笑いあう。気付けばすでに門のところまで来ていた。

「それでは、結果発表の日に。」

「ああ、それじゃあな!」

手を振り、駆けていく彼を見送った。

私は馬車が待っている方に向かって歩き出した。

21話・テストの終了（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

22話：推薦試験 剣・槍（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

受験日まであと一ヶ月となりました。申し訳ありませんが、この期間を更新休止とさせていただきます。次の更新はおそらく2月下旬になるかと思われれます。

22話：推薦試験 剣・槍

「それじゃあ行ってきます。」

「いつてらっしゃい、ファイア。」

「行ってらっしゃいませ、サイフィアス様。」

父とセバスさんに見送られながら屋敷を出た。外に一步でると、空から太陽の光が遠慮なく降り注いでくる。今日が夏・1の月などだと納得できる天気だ。

「会場はこの前と同じで、説明と振り分けの予定だよ。今日と明日を使って。今日は執務室に泊まりになるかな・・・」

予定は騎士団のことではいっばいだ。私は手元にある紙に視線を落とす。

合格 貴君をサイファルド王国<神空騎士団>に配属する。

その一文のみが大きく書かれている。それを見ただけで、私の胸は自然と高鳴っているように感じた。

前世でも騎士団に憧れるような気持ちは無かった。やはり、テストを受けたことで考え方が違ってきているらしい。不思議と悪い気持ちはしなかった。

「シディアンは合格したかな・・・」

昨日はじめてであった黒目黒髪の少年。初対面から楽しそうに笑いながら話していたその姿はかなり強く残っている。腹の探り合いをする貴族というよりいて私も楽しかった。

彼も合格していればいいな、と思いつつ、私は王城に向かった。

「諸君、私は騎士団団長として、団を代表して<神空騎士団>への配属を祝そう。試験を合格した君達は騎士になる資格がある。しかし、必ずしもそうなるわけではない。自分の行動に責任を持ち、騎士足りえる者となれるように精進しなさい。以上。」

テストを受けた会場で、コンダクターと名乗っていた彼が話しを終えた。拍手がおこり、だんだんと止む。

次に前に進み出たのは黒髪と茶色い目をした人だった。

「初めまして、皆さん。私は騎士団副団長の一人、ストリング・ヴィオリーです。私は騎士団の一員となる皆さんに今後のことを説明

します、一度しか言いません、よく聞くように。」

あの人が副長なのだ、と声があちこちから聞こえてきた。それも副長の咳払いでおさまる。

副長がいったことをまとめるところになった。

まず、騎士団について。騎士団は総帥から始まり、団長、副団長、術隊長、副隊長、隊員となっている。最初に術隊のこと。騎士団を大きく分けると術隊と呼ばれる6つの隊に分けられる。剣術隊、槍術隊、弓術隊、体術隊、陣術隊、馬術隊だ。

団員はそれぞれ術隊に所属しており、私達も全員が所属することになる。

しかし最初の三年間は新隊員全員が無所属となる。この間はそれぞれが術隊長らに推薦されたことにのみ訓練を行い、馬術は全員が必修となる。ちなみに拒否権はない。

四年目で改めて隊に所属となる。それまでは無所属隊員と呼ばれる。

あと、訓練だけをするわけではなく、普通に魔物退治などもある。

次に今後の予定について。今日と明日をかけて推薦を貰うための試験をする。武器は用意されたものを使用すること。陣術が使用できるものは申し出ること。

二日間なので住んでいる場所が遠い者は城の宿舎で泊まってい

大体こんなところだろうか。今日の試験は剣術と槍術だ。私は指定された場所に足を向けた。

「アスカ！」

聞き覚えのある声。視界に黒髪が揺れた。

「シディアン。貴方も合格したんですね。」

「ああ。筆記は危なかったけどな。なあ、アスカ、今日はどうするんだ？」

「どうするとは？」

「明日も試験あるだろ？だから俺は家近いから帰るけど、アスカは遠いだろ？」

陣術を使えばさほど時間はかからないのだが、屋敷にまっすぐ帰るわけにも行かないのでいつも遠回りを私はするのだ。そして時間は30ニード。念のため屋敷の裏にまわるのでさらに20ニードほどかかる。

方角からして遠いと思ったのだろうか。

「ええ、まあ。」

私の返事にシディアンは笑顔で続けた。

「それじゃあ、俺の家に来ないか？」

「え？」

それは自分にとってなかった提案だった。貴族なのでこれといった友もおらず、屋敷の外に泊まる必要も無い。

このときの私の顔はかなり驚いていただろう。

「俺の家はここからだいたい10ニードくらいなんだ。城下町ってやつで、裕福層ではないけど、悪くないところだぜ？どうだ？」

「では、お邪魔させてもらっても？」

「ああ、もちろんだ！妹に騎士の友達だって自慢するからな。」

友、そう彼が口にしても違和感がなかった。私は顔が緩むのを感じ

じた。

「お守りをくれた妹さんですね。」

「ああ。ま、楽しみにしといてくれ。それじゃあ、俺はあっちで試験だから、終わったら門で待っていてくれ！」

「はい、では。」

シディアンはあっち、と指差した長方形の建物に走っていった。それを見送り、私も歩き出した。

「ああ、どうしょ・・・剣は、苦手なのに・・・」

「大丈夫ですか？」

私はつい、隣の少年に声をかけた。

「えっ！？あ、だ、大丈夫です。ありがとうございます・・・。」

そういう彼は見た目からもかなり緊張しているようだった。顔が心なしか青い。黄緑色の瞳が揺れていた。

「大丈夫ですよ、皆、完璧に出来るわけじゃありませんから。それに貴方もテストは合格して此処にいるのでしょぅ？」

「あ、はい、そうです。でも、僕は弓が専門なので……」

彼も広げた手は想像以上に硬く、相当鍛錬したのだと思われる。きつと言つとおり剣などは好きではないのだろう。

「そうなのですか？私は弓を握ったことありません。出来ることがあるのですから、剣の推薦がなくても気にしなくていいのでは？」

「そつでしょぅか……」

「はい。」

私の言葉を聞いて彼はだいぶ安心したようだった。顔色もだいぶ良くなっている。

「ありがとうございます。おかげでだいぶ緊張がなくなりました。あ、僕の名前はアダメント……です。」

「どういたしました。私の名前はアスカ。よろしく。」

返事を返したただけなのに、何故か不思議そうな顔をされた。

「アスカさんは、貴族ではないのですか？」

「……いいえ、違いますよ。」

「すみません、何故かそういう気がしたんです。」

正直驚いた。今の私には陣術がかけられている。一つは髪・目の見え方を変える術、もう一つは空間になじませる術だ。

自分の癖は一人称が私、二人称を貴方、そして敬語。これは普通貴族に多く、爵位を持たないものはほとんど使用しない。使っても貴族を相手にする商人や、教育面に携わる人達、もしくはその家族のみだ。つまり、普通の人にはかなり違和感を持たせる。そこで術を使うことで、違和感を認識させないようにする。時間がたてば経つほど、違和感が無くなっていき、当たり前前になるのだ。

それを見破った彼は陣術の才能があるのだろう。

「いえ、ところで貴方は陣術を使用できますか？」

「何で分かったんですか！？はい、契約をしています。」

やはり。彼はきつと陣術に関しては一流になるのだろう。それだけ術に対して敏感であるのだから、分かって当然なのだろう。

「なんとなく、ですね。」

「へえ……」

不思議そうな顔をされたが、笑って誤魔化した。しばらくして、順番がきて彼は部屋に入っていった。私はその後、呼ばれるまで順番待ちの部屋で待っていた。

「君がアスカ？スイフトの試験パスしたでしょ？私はスピアー。槍術の試験を担当するよ。」

「よろしくお願いします。」

彼は手に何本かの槍を持っていた。

「槍術は初めて？」

「はい。」

「そっか。じゃあ・・・これかな。」

そういつて差し出されたのは装飾の無い白い槍。長さは私を少し越す程度だった。だいたい140センチメートルぐらいか。

「よし、それで私に切りかかってきて。構えはこう。」

言われたとおり構えをとる。槍を脇に抱えた。

私をみて、スピアーさんがへえ、とかふうん・・・などといった。どうしたのだろうか？

「私が見込んだとおりだね。」

「え？」

「君は初めてやったんでしょ、これ？」

「ええ、まあ・・・」

「剣術と槍術、両方できる奴なんではないかと思ってたけど、そうでもないみたいだし。このまま全部の推薦とか？」

最後の方は声が小さくで聞くことが出来なかった。ぱつと彼が顔を上げる。

「よし、では始めるよ？」

彼の声に槍を再度構えた。彼も槍を構え、二人相對する。

「開始！」

地を蹴る。それと同時にやりを突き出した。

キーンッ

しかし剣と違い刃は短い。すぐにそらし、今度は柄で足を狙う。風を切る音がして、彼の槍の突きが来た。自分の槍を回転させ、はじき返す。

「なかなかやるね！」

楽しそうな声が聞こえる。あいにく、扱ったことがない槍でこちらには集中している。会話をするのも苦労しそうだった。

「それでもないです・・・」

息を乱さないようにしながら、ステップを踏む。踏み込み、防がれては逆に防いで、というのが続いた。

そして。

「はっ！」

掛け声とともにカラン、と音をたてて私の槍が地面に落ちた。

「終わり。ありがとう」

「こちらこそありがとうございます。」

彼の顔は相変わらず笑顔。体力が尽きていないのは私も同じだが、疲労は彼の方がすくないだろう。

「久しぶりに楽しかった。スイフトと同意見だね。君は騎士団に入ったら忙しくなるね。」

何故かそれは危険な笑みだった。頬が引きつる。

「さ、今日は明日のためにさっさと帰って休みなさい。」

「はい、失礼します。」

私は足早に部屋をでた。

「アスカ！」

「シディアス。待ちましたか？」

「いや、俺も今終わったんだ。」

門に向かうとそこにはすでにシディアンが待っていた。

「じゃ、行くうか。」

「はい。」

二人で歩きだす。空はすでに赤くなっていた。

22話・推薦試験 剣・槍（後書き）

誤字・脱字がありましたらお教えください。

23話：城下町での外泊（前書き）

お待たせいたしました。更新を再開したいと思います。

更新ペースは遅くなるとおもいますが……。お付き合いくださると嬉しいです。

23話・城下町での外泊

「いらっしゃい、どうぞ見て行って！入荷したばかりだよ！」

「出来立てのパイはいかがですかー？」

城下町は人で溢れていた。一番広いとされる大通りは露天が並び、そこかしこから声がかかっていた。そう見えるのは、ファルディナ領にある町より人が多いのも理由の一つだろうか。

「すごい人ですね。いつもこうなのですか？」

「そうだな、いつもよりは多いよ。俺等と同じ騎士団に公爵家の長男が入隊したとかで、そいつに買ってもらおうとしているらしい。貴族が城下町にくるとは限らないのにな。」

「そうなんですか……。シディアン、貴方は貴族が嫌いなんですか？」

「嫌いだ。」

「……。」

彼の声にはまぎれもなく嫌悪がこめられていた。自分の心が重くなるのを感じた。

「それで、誰がその貴族の長男なのか貴方は知っていますか？」

「いいや。知らない。まあ、俺としても関わりたくないけどな。」

言葉がそれだけなのはきっともうこの話をやめよう、という合図なのだろう。

もちろん、私もそれ以上そのことを話題にあげることがやめた。きっと私が彼に本当のことを言う日はこないだろう、と心の中で思いながら。

「さ、アスカ！ちょっと買い物していいか？妹から頼まれてるんだよ。」

「ええ、いいですよ。」

「悪いな。あっちの店だ。行こう！」

駆け出した彼の後を追い、私も走り出した。

「ただいまー。さあ、アスカ入ってくれ。」

「お邪魔します・・・」

大体40ニードくらいで買い物を終え、シディアンに案内されるまま私は彼の家に到着した。

外はもう暗く、家々には明かりがついている。ちなみにこの家の明かりは売られている陣術を用いた道具で、一般家庭にはあつてあたり前なのだ。貴族も同じものを使用している。大きさが違ったりしているところもあるようだが。

「お帰りなさい、兄さん・・・え・・・?」

シディアンの家に入ったところで家の奥から少女が出てきた。おそらく彼女がシディアンのお姉さんなのだろう。

「来るのが遅いぞ。ダイアナ、俺の友達^{ダチ}で今年一緒に入団したアスカだ。」

「初めまして、ダイアナさん。アスカです。」

「あっ……は、初めまして。ダイアナです。」

そう言ったきり、彼女は口をつぐんでしまった。私になにかした
だろうか？

しかもそれをみてシディアンは笑っている。そして笑ったまま包
みを彼女に差し出した。

「ほら、なに固まってるんだ？今日はアスカもウチに泊まるからな
夕食を多くしてくれ。」

「あ……う、うん。分かった。アスカくんも上がってね。」

そう言って彼女は奥に包みを持って走っていった。

「ま、照れ屋？とも思っておいてくれ。」

「そうなんですか？可愛らしい方ですね。」

私の言葉を聞いてシディアンは驚いた顔をしたあと、こらえきれずにふきだした。

『ファイア』

「（フェニマス？どうしたの？）」

夜。私は案内された部屋でベットに横になっていた。

『今日はファイアと朝しか会っていないからな。様子見た。』

聞こえてくるフェニマスの声は心配しているようだった。私は今日のシディアンとの会話を打ち明けた。

『・・・そうか。仕方があるまいな。王はともかく、いつの時代も貴族はいいものとはいえない。例外もあるがな。』

「（きっと、私が彼等に正体を明かすことはないだろうね。・・・

いや、できればしられたくないかな。」

『感情は変化する。いつか明かすときが来るかもしれない。焦ることとは無いだろう。』

「……そうだね。ありがとう、フェニマス。」

フェニマスに打ち明けることでだいぶ気持ちが楽になった。なれるようになれ、というわけではないが、今悩んでも仕方がないだろう。

『もう遅い。休息を取れ。』

「(うん。お休み、フェニマス。)」

フェニマスとの会話を切り、視線を窓に向ける。

空には、無数の星が瞬いていた。

23話・城下町での外泊（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

24話・推薦試験 弓・体(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

24話：推薦試験 弓・体

「アスカ！起きてるかっ」

扉が勢いよく開いた。私がそちらに目を向けると立っていたのはシディアンだった。

「起きていますよ。どうかしましたか？」

私が服のボタンを留めながら聞き返すと、シディアンは扉にもたれかかった。

「いや、朝飯を知らせに来ただけだ。それにまだアスカは起きてないんじゃないかなーと思って。いこうぜ。」

「はい。」

「アスカくん、おはよう。」

「おはようございます。ダイアナさんも早いですね。」

台所に立つダイアナはエプロンをつけ、鍋をかき回している。私も挨拶を返した。鍋をかき回す腕の動きが早まった気がする。

「うっん、そうでもないわ。ここら辺の人はこのくらいに起きるのよ。私は朝ごはんを作るしね！きゃあっ!？」

「おっと・・・大丈夫ですか？」

落ちそうになった鍋を押さえ、同時に倒れそうになった彼女も支える。

「あっ、ありがとう・・・さ、座ってっ?」

彼女は慌てて離れた。やはり支えるために触れたのはいけなかっただろうか。彼女の顔は真っ赤だった。促されるまま私も席に着いた。

「罪作りってか・・・。」

「え？」

向かい側に座ったシディアンが何か言った気がした。聞き返しても彼は昨日と同じような笑みを浮かべるだけだった。

「はい、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

そうしているうちにダイアナさんが朝食を出してくれた。お礼を言って受け取る。

「おー。朝から豪華じゃないか？」

シディアンのからかいを含んだような声があがる。

「いつもどおりでしょ、兄さん。アスカくん、たくさん食べてね。鳥の煮込みはたくさんあるから。」

「はい。いただきます。」

「いただきます。」

皿に盛られた料理を口に運ぶ。具材は柔らかく煮込まれていて、自然と笑顔になった。

「おいしいです。」

「そう？良かった・・・」

朝食は話し声が絶えなかった。

「それじゃ、またな、アスカ。頑張れよ。」

「ええ。シディアンも頑張ってください。」

軽く手を振り、シディアンと別れる。此処は城の入り口だ。昨日待ち合わせした場所で今度はそれぞれの場所に別れた。昨

「さて、と……。最初は弓か。」

私は指定された場所に向かった。

「アスカさん！」

「?……ああ、貴方は昨日の……」

会場で、アダメントと名乗った彼と会った。こころなしか息を切らしている。

「昨日ぶりですね。アスカさんも弓の試験を？」

「ええ。私のことはアスカでいいですよ。弓が終われば体術と陣術を受けます。」

私の言葉を聞いて彼は顔をほころばせた。

「そうなんですか!?!じゃあ、僕といっしょですね。あ、僕のこと

もアダメントでいいですよ。」

「では、そう呼ばせていただきます。・・・ああ、呼ばれましたね。」

私の名前が呼ばれた。アダメントに別れをつげ、私は部屋に入っ
た。

「初めまして。じゃ、弓持って。そこにあるのからとってね。」

待っていたのは弓を持った男性。彼は名を名乗らなかった。何か理由があるのだろうか。あまりにもそれが自然だったので、聞こうとは思えなかった。今は仮に試験官としておくべきだろう。

「よし。それじゃ・・・」

弓を使うときの簡単な動作を教わる。弓道と同じようなものと考えればそれほど苦ではなかった。けれども、的にあてるのは難しいだろう。私は弓にさわったことさえない初心者なのだから。

教わったあと。遠くに見える的に向かって撃つように言われ、そちらに鏃を向けた。

距離は大体30メートルくらいだろうか。少しずつ力をこめる。

シュンッ・・・カッ

「おお。これは面白い。まさか一発目でねえ・・・」

「・・・。」

どう反応すべきだろうか。弓は遠慮など知らないかのごとく真ん中に刺さっていた。

その後、試験が終わるまで試験官の怪しい笑みは収まらず、その姿にスピーアーさんの笑みが重なった。

試験が終わると会場を移動した。体術の試験は基礎体力を見るもので、足などに重りをつけた場合の動きなどもした。これは剣を持ったときに動けるかを見るためらしい。

危うく一度よろけそうになり、側転をして回避した。その際にも、試験官の笑みにデジャヴを感じたのは気のせいではないだろう。気のせいだと思いたいが。

陣術の試験に向かう際、アダメントと会ったので、共に会場に向かった。

24話・推薦試験 弓・体（後書き）

一度此処で切らせていただきます。

誤字・脱字がありましたらお知らせください。感想まっています。

25話：推薦試験 陣（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

おそらくこれが今月最後の更新です。

いきなりですが、技名&人名を募集したいと思います。 なにか案がございましたら、感想にお書きください。お待ちしております！

25話：推薦試験 陣

「アスカも陣術が使えたんですね。僕は火と樹のスペックなんです
が・・・アスカは？」

「私は・・・光と風と水です。他はあまり使いませんよ。」

「へえ、スペックが三つも・・・アスカの精霊は力が強いんですね。」

「ええ、まあ・・・。」

アダメントとは、お互い陣術が使えるということ、陣術のこと
について話した。アダメントはかなり詳しいところまで知っていて、
話していて楽しかった。これは、専門的なことも含まれるので、私
としては嬉しいことだった。

「アスカは・・・家族に陣術が使えることを話していますか？」

突然、アダメントがそんなことを聞いてきた。

「ええ、話してはあります。」

「そうですね・・・。」

事実、私は家族に陣術が使えることを話してはあ。隠していることは契約している精霊が精霊女王であることだ。

理由はエンフォニーにとめられたこともあるが、もう一つはどこからかこのことが漏れてなにかに巻き込まれないようにするため。精霊の女王と契約していると知られば、他国に限らず自国から狙われることもありうる。それだけ術師は貴重で、力が強ければなおさらなのだ。

「実は、僕は家族に話していないんです。」

「理由を聞いても？」

「はい・・・怖かったです。」

「怖い？」

私はアダメントの言葉に疑問を抱いた。家族に対して怖いという感情はあるのだろうか。しかられることで怖いと感じることはあるかもしれないが、日常では普通思わないはずだ。ここで、私はある可能性を思いついたが、黙っておいた。隠し事をもっているのは決

して自分だけではないのだ。

「僕の家族は全員陣術が使いません。二人いる兄もです。僕は一番下なので兄たちから陣術が使えるからと妬まれることが怖かったです。」

「……。」

「僕はいつも兄達を気にしながら生きてきました。二人の視線に気付いてからずっと……。だから、」

「アダメント。」

私はたまらず声をかけた。彼の話を遮ったと言ったほうが正しいか。それでも私はこれ以上彼につらいことを話して欲しくなかった。彼の表情が苦しみを表していたから。

「アダメント、貴方はもっと前を向きなさい。」

「アスカ……？」

「隠していることはいつかばれるでしょう。重要なのは、その時、貴方がどうしているかです。恐怖を抱えて過ごすか、恐怖に打ち勝つか。意思を持ってください。貴方のことは貴方自身でしか決めることはできません。」

「・・・！」

アダメントは驚いたような顔をして。そして笑みを浮かべた。

「そうですね・・・僕は、自分の意思を持たなくちゃいけませんね・・・ありがとう、アスカ。」

「いいえ。それに、」

「？」

「私がいいます。貴方の背中を押すぐらいなら出来ますよ。」

今度こそ、アダメントは破顔した。

「私はポシテイオン。よろしく、アスカ。」

「よろしくお願いします。」

会場に着き、試験が始まった。今度の試験官はグレーの髪と瞳を持つ人だった。名前を名乗られ、そういえば弓の試験官の人の名前を聞いていないな、と思い出した。

けれども、考え事をしている暇はなさそうだった。

<その者 水を導き 深くに潜む大蛇となる 名をアクア・スネーク>

空中に陣が描かれ、術が発動したからだ。水の蛇はまっすぐ私に向かってきた。

<その者 風を導き 恐怖を払う壁となる 名をウィンド・ウォール！>

私の前に風の壁が出来、水の蛇を粒となって消えた。

「とめましたか。とっさに発動できるとは。なかなかですね。」

彼は笑顔でそんなことを言ったが、攻撃をされたこちらとしては笑えない。自分の発動が遅ければ衝撃で気を失っていただろう。いまさらながら、練習をしていてよかったと思う。

「さて、手慣らしはおわりましたね。アスカ、ちょっとした試合をしましょう。」

「試合……ですか？」

「ええ。術の打ち合いです。」

彼は実にイイ笑顔で言った。まるでちょっと散歩に、とでも言うかのように気安く。

内容はかなり危ないのだが。

「心配しなくて大丈夫ですよ。建物は頑丈ですから、燃えても、樹を生やしても、水浸しにしても、切り刻んでも、消滅させようとしても問題ありません。」

「はぁ……。」

前半はともかく、刻んだり消滅はほんとに大丈夫なのだろうか。それは自分たちもただじゃすまないのでは……？かなり不安になってきていた。

そうしているうちに、始まりの合図が来た。

「では……始め！」

<その者 風を導き 鋭利なる刃と化す 名をウィンド・カッター>

265

風が集まり、私に向かって放たれた。私も応戦するべく、陣を描く。

<その者 風を導き 迷いの流れとなる 名をサークル・アウト>

私の周りに風の円ができ、風の刃の軌道を逸らした。刃が霧散する。

「やるね。」

「ありがとうございます。」

彼はまだ余裕そうな表情だ。私はそれを確認し、今度は自分から術を放った。

<その者 水を導き 渦巻く柱となる 名をアクア・トルネード>

「ほう・・・<その者 炎を導き 敵を貫く弾となる 名をファイアー・キアノン！>

その日。陣術の試験の会場は変更となった。理由は炎と水がぶつかったことによる水蒸気爆発。建物は瓦礫の山と化したらしい。

25話：推薦試験 陣（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

何故公爵が主人公が陣術を使えることを知っているのかという感想をいただきましたので、この回である程度説明させていただきました。あとは・・・作者の力不足とっておいてください。

ちなみに、16話のエンフォニーとフェニアスの会話の内容はこんな感じですよ。

『なにかあるのか、エンフォニー？』

<ファイアの母上には契約した精霊がいるだろう？>

『ああ。いるな。』

<そやつに話をとおして、母上から父上に伝えてもらおうのだ。ファイアが領民に会ってみたいと思っっていると。>

『考えたな、エンフォニー。精霊であることが利点になったな。』

<だろう？さっそく、明日にでも実行しようと思っっている。>

『よからう。公爵は許可を出すだろう。』・・・

という感じですよ。

あと一つ、主人公が<羽衣騎士>になる動機は？という感想もありましたが、それは伏線ですので、物語を待ってくださいると嬉しいですよ。

26話・待ち合わせの時間（前書き）

お待たせいたしました。更新を再開します。

26話・待ち合わせの時間

「アスカー。ここにいたか。」

「シディアン。試験は終わったのですか？」

建物が崩壊してから数ハイド後。私は最初に騎士団について説明を受けた建物にいた。

近寄ってきたシディアンに問いかけをする。

「ああ。俺は陣術がないからな。体力だけはあるから、ちょっと疲れたぐらいだな。アスカも終わったんだろ？」

「うん。一応……。」

歯切れの悪い私にシディアンが不思議そうな顔をする。

「なんかあったか？……ああ、そういえば陣術の会場崩壊したんだって？大変だったな。」

その言葉に心臓がはねた。私が顔を背けると、シディアンはまさか、という顔をした。

「・・・アスカ。まさか、会場壊したのって・・・。」

「・・・私です。」

シディアンの言葉に頷くと、彼は顔色を変えた。

「マジか。いや、まあ、アスカがそこまで力があるとは知らなかったけどよ・・・。怪我が無くてよかったな？」

「うん。会場にいた術師の人達が防御の術をやってくれたから、私も試験官も無事でしたよ。」

「詳しく聞いても？」

シディアンの瞳に興味映っている事に気付いた。私は苦笑して、試験のことを話し始めた。

<<<その者 樹を導き 身を護る枝となる 名をナチュラル・ブ
ロツカー!!!>>>

「これは……。」

建物の崩壊によるゆれが収まり、私は目を開けた。最初に見えたのは緑。私を覆うように樹が生えていた。

「大丈夫ですか？」

そのうち、樹は縮んでいき、視界が開けた。そこで、声をかけられた。

「申し訳なかった。ウチの隊長が調子に乗って。建物が壊れたのはキミの責任ではない、気にしないでくれ。」

「あの、あなた方は？」

下げていた頭を上げ、顔を見せた男性は陣術隊副隊長なのだそうだ。その後ろにいるのは隊員の人たち。

「うちの隊長は期待できそうな新人がいるとすぐこんなことするんだ。さつきも、金髪の子と試合やって壁にヒビをいれてたし。こっちの身にもなって欲しいんだけどね……。」

その口ぶりから日ごろからの苦勞がうかがえた。後ろの隊員も一緒に頷いている。

「うう……ん……。」

と、そこで隊長のうめき声が聞こえた。

「ああ、目を覚ますかな？ キミ、もういいよ。起きたら面倒だし、それに……。」

その時副隊長はかなり危なかった、と今なら思う。

「……お話、するからさ。じゃ、またね、アスカ。」

三人に見送られ、私はその場を去った。

「……というわけです。」

「……すげーな。」

「ええ。」

自然と無言になる。

「あー、ところでだ、なんでアスカはここにいたんだ？まさか、説教とかないよな？」

「いいえ、貴方に合わせたい人がいるので。」

「俺にか？」

「そうです。……あ、アダメント、こっちです！」

「アスカさん！……あれ？」

アダメントが走りよってきた。シディアンをみて、その足を止める。

「紹介したいのってこいつか？」

「ええ。アダメント、紹介します。私の友人のシディアンです。」

「あつ、始めまして、シディアンさん。僕はアダメントといいます。」

「俺はシディアン。こっちこそよろしく。呼び捨てでいいぞ。アダメントって呼んでいいか？」

「はい。そうしてください。」

出会ってからすぐに打ち解ける二人。会話をしているうち、緊張も取れてきたらしく、固い雰囲気が無くなった。

これで一つの目的は達成できた。私は内心笑みを浮かべる。アダメントは支える人が必要で。シディアンは騎士の友情を望んで。

そして私はともに過ごせる仲間を欲した。

「アスカー？なにしてんだ、行くぞ！」

「アスカ、行きましょう！」

「はい、今行きますよ！」

私は友であり仲間である二人と肩を並べた。

26話・待ち合わせの時間（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

27話・休日は町で（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

一度データがきえたため書き直すのに時間がかかってしまいました。申し訳ありません。

遅くなりましたが、感想を下さった皆様にお礼を。アドバイスや誤字訂正、たくさんありがとうございます。誤字のところは訂正いたしました。これからも頑張って書いていきたいと思えます。

27話・休日は町で

「いってらっしゃいませ、サイフィアス様。」

「行ってきます、セバスさん。」

家の外に一步踏み出すと、空から太陽が照り付けてきた。屋敷の玄関にたつセバスさんに見送られ、肩にフェニアスを乗せた私はゆつくりと歩き出した。

『どうしたのだ、フィア？陣術は使わないのか？』

「まだね。久しぶりにフェニアスと歩こうかな、と思って。」

「そうか・・・」

フェニアスが照れたように言葉を切る。

「といっても、少しだけど。領地にある町はここからだちょっと遠いしね。」

『そうだな。それにしても、今日は予定がなくてよかったな。』

「うん。どのくらいぶりだろう・・・何回か行ってるけど、数ヶ月ぶりかな？」

『かもしれぬ。仕方ない、フィアは騎士団で忙しかったからな。』

「だね・・・」

今日は推薦試験が終わったということ、休日となっている。シディアンやアダメントも家で休んでいることだろう。シディアンには「お前が家に来ないとダイアナに怒られそうだな」といわれたが、あれはどういう意味だったのだろうか？聞き返すとシディアンは笑っていた。そのまま二人とは別れたが、シディアンと話したアダメントまで笑っていたのがとても不思議だった。

「休日といっても仕事もないし、暇になっちゃうんだよね。町に行くことは考えていなかったよ。提案してくれた母上に感謝だね。」

『そうだな。我もフィアと居れるし、領民の様子を見ることもできる。』

「うん。そろそろ術を使っね。」

『分かった。』

しばらく歩いたところで私は歩みを止めた。陣術を使ったために手を持ち上げる。

「じゃあ、いくよ？　<その者　光を導き　彼の道に身を任せ　名をスピード・オブ・ライト・ムーブメント>」

瞬間。私は術に身を任せた。

「お、アスカじゃないか。久しぶりだな。」

「アートさん、お久しぶりです。」

町で顔見知りの自警団の人と会った。

「買い物か？」

「ええ、そんなところです。アートさんは？」

会話をする彼の服装は自警団の制服ではなく、日常できるような普通の服だ。

「俺は、・・・クラフトにつき合わされてる。」

なんとなく濁しているのは、理由がそれだけではないからだろうか。ちなみにクラフトさんは自警団でアートさんがペアを組んでいる人。警備のために自警団を提案したのが、団員同士の交流にも役立っているらしい。

「そうなんですか。では、クラフトさんは」

私の言葉はそこで途切れた。人ごみを掻き分けて、大柄な男性があわられたからだ。

「アート！お前が探してた画材、見つけたぞーって、アスカ！来たのか！」

「はい。今丁度、アートさんと話してたところです。」

「そうか。今、アートが新しい画材欲しいっていうから探してたんだ。てことで、これ。」

「あ、ああ、悪いな。」

実は、アートさんは名前のとおり、絵を描くのが好きだったり。しかも上手い。そしてクラフトさんは同じく名前のとおりものづくりが上手い。

この世界では名前にそんな意味はないが、前世の記憶がある私はその偶然が面白くてならない。

「せっかくアスカもいることだし、どっか店に」

その時。すぐ近くで叫び声があがった。

「きゃあああああ！！！！」

あたりを見渡すと、走る少女とそれを追いかける男達の姿が目に入った。

「あ、おい、アスカ！？」

私は二人の言葉を待たずに、走り出した。

「放して!!」

「嫌だね。俺達は頼まれてるんだ。それにここは誰も来ないしな？」

「そうそう。それに恨むならお前の兄を恨めよ？」

「お兄ちゃんを・・・!？」

少女は目を見開き、男達をみた。それにいやらしく笑う男の一人が少女の服に手を伸ばした。

「だから、おとなしくっぐはっ・・・」

「なんだ!？」

「申し訳ありませんが、それ以上はやめていただかなくてはなりません。」

私は思いつきり、ただし手加減をして男を蹴り飛ばした。街中なので陣術を使うわけにも行かず、走り、ぎりぎりで間に合った。

私の姿をみて、それから壁に打ち付けられ、気を失った仲間を見て、立っている残りの男達4人は体を振るわせた。そのなかでまとめ役と思しき男が声を発する。

「お、おい。なんなんだ。こっちは貴族様の依頼で動いているんだ、手をだすんじゃないねえ!!」

「そんなのは関係ありません。私は女性に暴力を振るおうとする荒くれ者をとめただけです。あなた方もあなりたいですか?」

貴族、という単語を聞いて私は苛立ちを募らせた。まさかこんなことをするのは。領地の改善でこういうことは収まっているかと思っていたが、思い違いだったようだ。

「うあああああ!!」

と、そのうちの一人が私に向かってきた。仕方なく、体術を使い地面にたたきつけた。使ったのは背負い投げだ。

「ふう。それで、どうしますか？」

私の言葉で、負傷者二名がたてたことを知った男達は、あとから追いついてきたアートさんとクラフトさんに連れられ、自警団の事務所に連行された。

「大丈夫でしたか？」

私は地面に座り込んでいた。少女に声をかける。少女ゆっくりと顔を上げた。

「……ありがとうございました。」

「いいえ。何も無くてよかったです。」

声は小さいが、弱くはない。このまま一人で家に帰るのは不安だろう。家の近くまで送っていこうと、彼女に手を差し出した。

「家の近くまでお送りします。」

男に触るのは嫌だろうか。そう思ったが、彼女は私の手に掴まって立ち上がった。しかし顔を赤くしてすぐに離れてしまったが。私と彼女は少しの距離を持って歩き出した。

「本当に、ありがとうございました。」

「どういたしまして。」

何回か行ったことがある食堂の近くで、彼女と別れることとなった。

そして、私がその場から離れようとしたとき。思いもしない声がかかった。

「クーリ！」

「お兄ちゃん！」

「クリスマスさん？」

立っていたのは、慌てた様子のクリスマスさんだった。

27話・休日は町で（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

28話：語られた現実（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

二回連続でデータが飛びました。飛ぶと書き直す気が無くなり。ついつい、遅くなってしまいました。申し訳ないです。

28話・語られた現実

「とにかく、礼を言うよ。ありがとな、アスカ。」

「いいえ。私はやるべきことをしたまでです。」

今いるのは、「町一番の料理屋」というところだ。ここは私が最初にラムの煮込みを食べたあの店で、この町にくるたびに私はここに来ている。・・・ネーミングセンスは気にしないで欲しい。

「傭兵の仕事でしくじってな。まさかクーリにまで手を出されるとは・・・」

クリスマスは悔しそうに顔をゆがめていた。隣にすわるクーリさんが心配そうに腕に手を添える。

「お兄ちゃん、気にしちゃだめよ？私は大丈夫だったんだし・・・」

「クーリ・・・でもな・・・」

「クリスマスさん。その仕事の内容を聞いてもいいですか？」

「あ、ああ・・・実はな・・・この前、仕事で商品の輸送を頼まれたんだ。随分と大降りな箱でな、しかもキツチリと錠前がついていた。空気穴もあって、その時はよほど凶暴な動物でも入ってるんじゃないかとおもったんだが、天候が悪くなってきたとき、風で押されて箱を載せてる馬車が傾いた。その衝撃で錠前が外れて、中が見えちまったんだよ。」

声は自然と小さくなっていった。潜めるように、私は問いかける。

「入っていたものをみたんですね？」

「ああ・・・」

そこでクリスさんは言うのをためらうかのように、一度口を閉ざした。けれども、私の顔を見て、再度口を開いた。

「入っていたのは　人間、だった。」

「！！　　奴隷、ということですか？」

「そうだ。俺は慌てて扉を閉めたんだが、気付かれたんだな・・・」

後悔してる。あの奴隷を、俺は助けられたかもしれないって。でも、その次が自分になる危険性もあって、俺にはできなかった。でも、それはいまさらだな……」

そういつてクリスさんはグラスの酒を思いっきりあおった。

『ファイア?』

「ん?何、フェニアス。」

帰り道。私はまた、町を出てから歩いていた。

『ファイアが好きなようにするべきだと、我は思う。ファイアがすることとは人の役にたつことだからな。』

「……フェニアス。私は、奴隷というものがあってはいけなと思う。人が誰かに自由を奪われることは正しいことじゃないはずだ。誰かに従うことがわるいわけじゃない。それを否定したら、国に使えるもの全てを否定することになるから。大事なのは、本人の意思だ。」

『ファイアの考えは間違っていないと、我は思う。すべての人間の賛同を得られるものなどない。だが、痛みや苦しみをなくすことに賛同しないものはいない。』

「うん。私は私の意志を通すよ。自己満足で終わらないように。」

『うむ。我はファイアのために、我にできることをしよう。』

「ありがとう、フェニクス。私は、私にできることをしよう・・・」

一度止まった足をまた動かす。空は、私の心を表すかのごとく、混ざらない色をしていた。

28話・語られた現実（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

29話・提案の結果は（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

今回は日にちが少し進みます。

29話：提案の結果は

「父上。次行われる会議に、私の出席を許してもらえませんか？」

私は屋敷に帰ってすぐ、屋敷に帰ってきていた父に話を持ちかけた。父は驚いた顔をしたが、事情を話すと真剣に聞いてくれた。

「そうか……。だが、ファイア。それは騎士団の仕事の両立できるか？どちらかをおろそかにすることはできないぞ。」

「分かっています、父上。けれども、私は私にできることをしたいのです。」

私の言葉を聞いて、父は少し思案した後、頷づいた。

「ではサイフィアス殿。貴公の意見を。」

「はい。私からは商業団体、職業の斡旋所の設立、奴隷制度の変更、

さまざまな被害から身を守るための術具の配布を提案します。」

会議場の空気がよどめいた。

私は、それらを見渡し、言葉を続ける。

「先日、私は領内の町を視察しました。ある町の者に聞いたところ、傭兵の仕事をしており、そのため貴族からの力による被害を受けていると申しております。町自体には自警団がいますが、それは仕事では役に立ちません。そのために、職業を持つものの安全を守るための斡旋所をつくることは必要だと考えられます。商業をする者も被害に会う場合もあります。これら二つをかねた施設を作ること、国の流通を守ることに繋がります。」

「ほう……」

「なるほど……」

「では、奴隷制度の変更というのは？廃止ではないのか？」

奥に座る面々は頷いていた。私は手ごたえを感じ、そのまま話を進める。

「二つめの奴隷制度の変更、奴隷制度は長年廃止されなかったものです。ここである疑問がでてきます。それは、「何故、奴隷制度は廃止されないのか？」ということです。これは身分を気にする貴族によるものが大きく、国王は貴族の反感を買わないために廃止することはできません。ですから、するのは廃止ではなく変更です。内容を今より緩めて、身分を持たないものにある程度自由が利くようにします。それからだんだんと廃止にまで持ちこめるようにします。」

「・・・そうか。それには私も賛成だ。」

「私もだ。国王へ、進言してみるべきでないだろうか。」

「そうだな。ここは本人に・・・」

最後に何か聞こえた気がする。なにかの予感がするよう・・・

「では、最後の術具については？サイフィアス殿。」

「あ、はい。」

こちらを向いた古株の貴族達に目を向けられ、私はまた口を開い

た。

「術具は身を守るには最適のもの。私が提案する術具は、悪しき心の者を近づけない結界や、もしものとき、最低限の攻撃を加えられるものです。結界などは、町に一つあればその中に入り、救援を待つことができます。防御できるものは、町のいたるところに設置すれば、誰でも身を護れます。人が少ない場所などには必要だと思います。」

「貴公の意見はいつも必要なものばかりですな、サイフィアス殿。」

298

「オールド公爵。」

会議が終わり、部屋から出ようとしたとき、古株の一人であるオールド公爵に声をかけられた。

「私達年寄りでは思いつかないことを言っただけ。貴公がいなくては今の政治は無かるうよ。」

「いいえ。根元がよくなければ私の意見も取り入れられなかったはず。公爵たちのお力ですよ。」

私の言葉に、公爵は驚いたような顔をし、次の瞬間、笑みを浮かべた。

「そうですね。貴公もさすがはファルデナ公爵家嫡男……いえ、サイフィアス殿ですな。」

「？」

さすがとはどういう意味なのだろうか？私の疑問もそのまま、公爵の話は進む。

「そんな貴公に良い知らせですよ。」

「良い知らせ？」

「ええ。貴公は、今回の提案を王に直接進言していただきます。」

「……え？」

つい返事が遅れてしまった。それくらい衝撃的だったのだ。

「それはどういう・・・？」

「やはり、提案した本人が行くべきだと私達は判断しました。大丈夫、王は思慮深い方です。多少の問題は気になさりません。頑張ってください、サイフィアス殿。」

「え、あの、オールド公爵！」

私が声をかける暇なく、公爵は去ってしまった。私はゆっくりと父の方に顔をむける。

「どうしたらいいですか、父上。」

「うん。フィア、お前なら大丈夫だよ。」

なにも心配していない笑顔を向けられ、私は力が抜けるのを感じた。

「さあ、帰ろうか、フィア。料理長が夕食作って待ってるよ？」

「はい・・・」

私は、頭の殆どが進言（おそらく謁見）を占めたまま、馬車に乗り込んだ。

29話・提案の結果は（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

30話・謁見の日(前書き)

読んでくださりありがとうございます。

30話・謁見の日

「ファイア兄様、午後もきしだんに行くの？」

「いいえ、これから王様にお会いしてきます。」

「おつさまに？」

首をかしげる姿がそろってつい笑ってしまった。やはり、双子だからだろうか？

「そうですね、メイ、レイ。私は、仕事で王様にご相談するのです。もっと、みんなが住みやすい国にするために。」

「メイ、レイ、ファイアは国民のためのお仕事をしてくるのですよ。」

「「へえ……」」

そう。今日は予定されていた王への謁見の日だ。騎士団は推薦試験の結果がでていないので、今はまだ基礎訓練のみで午前中だけとなっている。今の時刻は昼を過ぎた頃だ。

「頑張つてね、ファイア兄様！」

「行つてらっしゃい！」

「行つてらっしゃい、ファイア。頑張つてきなさい。」

メイ、レイに順番に声をかけられ、母に見送られ、私は待たせてあつた馬車に乗り込んだ。

「到着いたしました。」

「ありがとうございます。ご苦労様でした。」

城に着き、御者に言葉を返してから馬車を降りた。向かうのは仕事場。そこでオールド公爵と待ち合わせをしている。

仕事場に向かうと、父上とオールド公爵が話していた。

「父上。」

「来たか。サイフィアス。」

「サイフィアス殿。心の準備はよろしいですか？」

オールド公爵が心配そうに聞いていた。

「はい、大丈夫です。」

私の言葉を聞いて、公爵は面白そうに笑った。

「そうですね。私は最初王にお会いしたときはとても緊張しましたが・・・貴公は強い方だ。では、参りましょうか。」

「はい。行ってまいります、父上。」

「ああ、できることをしておいで。」

父はやはり心配を含んだ顔をしていたが、それでも笑顔浮かべて見送ってくれた。私は、先に歩き出したオールド公爵の後を追っ

て、歩き出した。

公爵に連れられて向かったのは、王の間ではなく、一つの部屋だった。

「ここで、王を待ちます。この部屋は私たち役割を持つ貴族の、そうですね・・・長年勤めている者だけがくることが出来る部屋なのです。ここで待ちなさい。さあ、入りなさい。」

「はい・・・」

促されるまま部屋に入った。後ろで扉が閉まる。私は部屋を見渡した。

部屋の中は思ったより派手ではなく、全体的に落ち着いた雰囲気だった。青を基調とした色合いだ。

<ファイア>

「（エンフォニー？）」

と、エンフォニーが話しかけてきた。

<この部屋は高度な盗聴防止に陣術がかけられている。身を守るための術具も置いてあるな>

「へえ・・・やっぱり、王様が来るところはしっかりしてるね。術具って、そこに置いてある指輪も？」

私は部屋の一角においてある指輪を指した。金の台座に緑の四角い石がはめ込んである。

<そうだ。術が掛けられている、そんな感覚があるからな。あれに掛かっているのは樹のスペックの術だな。だが、術が掛けられていると分かるような道具ではまだまだだ>

「(分からないほうがいいんだね？術の行使を知らせないために?)」

<精霊と契約していない者が、使えるようにするためにと作られたのが術具だ。別の見方をすれば、スペックが少ない精霊の力を一時的に借りているのだ。術が使えると分かっていたら、取り上げられられてしまうこともあるのだ>

「（そっか……）」

前はそれほど考えなかったが、だんだんと術具に興味がわいてきた。今度エンフォニーに教わって作ってみようか。父や母に渡してもいいし、メイやレイにももしものために必要ではないだろうか。

「（あとで術具のつくりかたを教えて、エンフォニー）」

くああ。ファイならば良いものが作れるだろう。

エンフォニーがそう返事をしたと同時に、扉がノックされた。

「っはい。どうぞ。」

反射的に返事をする。頭を仕事の内容に切り替えた。術具の製作を考えるのは家に帰ってからにしよう。

がちやり……と扉を開けて入ってきたのは、銀髪に濃い藍色の瞳を持った、

「初めまして、だな　　ファルディナ。」

紛れも無い、この国の王だった。

30話・謁見の日（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

三月二十二日修正しました。 茄梨さん、ありがとうございます。

31話：謁見のその後に（前書き）

今回の地震の影響で更新が遅れてしまいました。
お待たせして申し訳ありません。

読んでくださりありがとうございます。

31話・謁見のその後

「そう固くなることはない。わたしと話をするために来たのだろう？」

「・・・はい。」

促されるまま私は椅子に腰掛けた。目の前に国王がいるという実感がまだつかめない。

「この席では殆ど無礼講だな。わたしは今、国王としての立場と共に、わたし自身、つまりフェンライトとしてここにいる。もちろん、お主の進言を聞くためにな。」

そう言った目には偽りがなく、国王が本気であることが伺えた。私は自然と背筋が伸びるのを感じた。こういった雰囲気を出せるのはサラ様も同じで、あの方が紛れもなく王族だということを改めて感じさせられた。

「さて、国王としての仕事の前にお主に聞きたい事があるのだが。」

「はい。私に答えられることでしたら。」

「そうか。平均的、いや、年齢からしたら十分に良い答え方だ。わたしが聞きたいことは一つ。なぜ、此処までするのか。」

「それは、一体どういっ……？」

私は質問の意味が理解できなかった。何故進言をするのか、という意味ならば仕事だから、と答えることもできる。けれども、国王の口調からそれだけではない気がした。

「お主の年齢は10歳。その歳で騎士団に所属しながら仕事をしている。そこまで余裕のない生活をしてまで、なぜ民のためにつくすのか。わたしはそれが聞きたいのだ。」

それに対して、私の答えは簡単だった。それは、

「私が貴族という地位をもっているからです。」

「ほう……？」

国王の目が好奇に輝いた。

「貴族であることを地位と考えるか。貴族は殆どの者が自己満足のために生活をする。そこには民を考えるなどというものはない。だからこそ民に嫌われるのだらうが。それでも、お主は民のためというのか？」

自己満足。いつも着いて回るこの言葉。けれども、私はもう自己満足をしないと決めた。

「自己満足と言われようと、私は民のために行動をします。貴族は民がいなくては成り立たないのでから。民のために貴族としての地位を使わなくては意味がありません。」

「地位を持っている者だけができることがあります。それがすべて悪いことにしないためにも、私はできることをしたいのです。」

私の言葉を聞いて、国王は考えるように腕を組んだ。私はただ黙ってそれを見ていた。

しばらくして、国王が口を開いた。

「私が知らぬ間に、新たな考え方ができていた、というわけか・・・
ファルディナ。お主、名は？」

そこで正式な名を名乗っていなかったことを思い出した。

「私の名はサイフィアス・ド・ロデス・ファルディナです。陛下。」

「では、サイフィアス。わたしは国王として、そしてフェンライトとして、お主の進言を受け入れよう。」

「いいのですか？私はまだなにも言っていないませんが・・・」

「問題ない。どの道、動くことは決定だろう。それに、」

「？」

「わたしは、人を見る目はあるつもりだ。」

それから数ハイド、私は国王と話し合った。結果は全て是とされた。私は改めて、この方の懐の深さを知った。

「ところで、サイフィアス。」

いつのまにか、陛下は私を名前で呼ぶようになっていた。

「なんでしょうか？」

「これはまた個人的なことなのだが　　娘のサラフェルミアと会ったことがあるか？」

「え？あ、はい。」

私がそういうと、陛下は国王らしくない笑みを見せた。まるで、いたずらを思いついた子供のような。もしかすると、こんな表情が陛下の本当の表情なのかもしれない。

「そうか・・・だから、あの子はそのように・・・」

「陛下？」

「ああ、なんでもない。気になっただけだ。」

「はあ・・・？」

それだけではない気がしたが……。

「では、私は執務室に戻るとしよう。ご苦労だったな、サイファイアス。」

「いいえ、ありがとうございました、陛下。」

「ああ。それから……。」

陛下は一度立ち止まり、扉に向けていた体を私の方に向けた。

「サラフェルミアと仲良くしてあげてくれ。あの子は、ああ見えて繊細だからな。」

その口調から、陛下がサラ様の言葉遣いに気付いているのだと分かった。了承の意味を込めて頷く。

「はい。もちろんです。」

そして、今度こそ扉に向かい、

「息子達にも、あったら仲良くしてあげてくれ。」

そっぴい残して出て行った。

<ファイア>

部屋をでると、エンフォニーが話しかけてきた。

「（ああ、エンフォニー。ごめん、長かったよね。」

<いや、私はそこら辺を見ていたからな、退屈ではなかった。ファイア、ここには隠し扉などがかなりあった>

「（へえ・・・やっぱり、そんなところは王城なんだね。」

<ああ。案外巧妙で面白かった>

「（ちょっと興味あるかも・・・ん？）」

<誰かくるな>

廊下の曲がった向こうから、近づいてくる気配があった。しかもかなり薄い。これは意図的隠している場合が多い。

私は歩みをとめ、陣術で自らの気配を消した。

<向こうの気配が揺らめいた。こちらの気配が消えたから動揺したのだろう。一応、気を抜くな、フィア>

「（分かった。）」

私は近づいてくる気配が横を通ると同時に鞘からはずしていない剣を振った。

「!?!」

振った先に見えたのは銀髪。国王と同じ色だった。

「遠慮しないで飲んで？」

「はい、頂きます……。」

通されたのは城の一室。

「さっきのはお互い悪かったね。僕も気配消してたし。やっぱり、むやみやたらと術具使っちゃ駄目だね。」

「はぁ……。」

出された紅茶を飲みながら気にした様子もなく喋る彼を見る。

「父上に面白い者がいるって言われてそっちに向かってたらさ、いきなり剣が振るわれたけど。まあ、当然だとは思っし。」

そう。私が剣（鞘付き）を当てようとしたのは王の息子で長男。つまり、

「まあ、第一王子だなんて権利使わないから。安心して？」

この国の第一王子だったのだ。

王と同じで銀の髪。ただし目は紫だ。笑う姿はサラ様に似ている。ただし、歳は私と同じで10歳。

「そういえば、サイフィアス。」

「はい?」

「サラ姉上と知り合いなんだって?」

「ええ、まあ・・・」

どうしてそんなことを聞くのだろうか?

「じゃあさ。僕と、友達になってくれない?」

「え?」

「姉上と知り合いなら僕と友達でも問題ないでしょ?」

そこで気付いた。王子が友を欲する理由に。

彼はきつと、王子としての身分に動かされてきたのだ。だから、友と呼べるものは存在しない。

だから、姉と知り合いで身分の問題なく、自分と話せる人間を求めた。

「……はい。よろこんで。」

だから私はそう答えた。

「よし！それじゃあ、よろしくね、サイフィアス！」

「はい。私のことはフィアでいいですよ。親しいものは皆そう呼びます。」

「そうなんだ。あれ、僕の名前ってまだ言っただけ？僕の名前はキリフィラス・フェザー・フェンライト・サイファルド。キリでいいよ。」

「では、キリ様と。」

彼が難しい顔をする。

「んー・・・友達ならキリって呼んで、フィア。」

「しかし・・・」

「ね？」

有無を言わせぬ響き。彼が王の血を引いているのを実感した。

「キリ。・・・でいいですか？」

「うん。良い感じ。あ、あと敬語もなくしてね？」

「それは、時間がかかりそうですね・・・」

「じゃあ、当面の目標はフィアの敬語崩しだね。」

そういつてキリが笑い、つられて私も笑ってしまった。

その後、窓から差し込む光が少なくなるまで、私はキリと話していた。

3 1 話・謁見のその後に（後書き）

3月24日修正いたしました。トットさん、ありがとうございます。

32話：推薦試験 結果（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

遅くなりましたが、感想を下さった方々、ありがとうございます。

返信ができる時は少ないのですが、感謝しております。

これからも読んでくださると嬉しいです。

3月25日修正しました。滝川さん、けいさんありがとうございます。
す。

32話：推薦試験 結果

「それでは、推薦試験の結果を配布する。名を呼ばれたら前に来なさい。では」

私は今、騎士団の試験結果を貰うために、騎士団本部の建物にいる。いままでは試験会場と思っていた所が実は室内訓練場なんだとか。そして本部、というこの建物は最初に集まった所で、さらに扉をくぐって奥に行くと騎士団の人が集まる場所らしい。ある意味ロビーと同じような位置づけなのだろう。

「なあ、アスカ。」

「なんですか、シディアン？」

と、シディアンが話しかけてきた。声は小さいので、結果を渡す試験官に聞こえる心配はない。

「なんか、疲れてないか？心なしか、顔色が悪い気がするんだが・
」

そういわれてはっとした。気付かれるくらい顔色がわるいだろうか？

「……そうですね。いろいろ忙しかったので。ですが、大丈夫ですよ。」

「そっか？無理するなよ？」

「はい。」

シディアンは本当に心配そうな顔をしていた。それを見て、すこし嬉しくなった。

「ああ、呼ばれたのでは？」

「そっか？じゃあ、行って来る。」

シディアンが歩いていく。その後ろ姿を見ながら、これまでのことを振り返る。

陛下への謁見からキリとの対談。それから数週間は仕事に追われていた。父上やオールド公爵も手伝ってくれ、他の貴族の方も仕事があっても協力をしてくれた。仕事はなんとか順調に進んでいる。

「大丈夫か？」とは何度もいろんな方に聞かれたが、自分では大

丈夫だと思っていた。やはり、無理をしていたかもしれない。他の方に迷惑を掛けないうちにある程度の休養は取るべきかもしれない。今は夏・2の月10日だ。騎士団の方にも予定が増える。仕事の量は減ることになるだろうから、ある程度のところまでは片付けるべきだろう。

「次は・・・アスカ。」

とうとう私が呼ばれた。呼び方はどうやら試験を受けた順らしかった。

私は試験官の方に向かう。

「これだ。頑張ってほしいが、無理はしないように。」

「・・・？はい、ありがとうございます。」

渡された紙は折りたたまれており、中は見えなかった。

なぜか試験官は笑っていた。他の受験者に気付かれない程度に。

私は結果が書かれた紙を受け取り、元の位置に戻った。

「アスカ！シディアン！」

「おう、転ぶなよ、アダメント。」

「転びませんよ！・・・待ちましたか？」

結果配布が終わり、私とシディアンはアダメントのことを待っていた。

「いいえ。約束どおり、開かずに待っていましたよ。」

朝約束したこと。それは結果を三人一緒に見ることだ。三人の手にはまだ開かれていない紙が乗っている。

「よし。じゃあ開けるか。」

「ええ。」

「では、せーの、」

これは、一体なんなのだろうか。言葉が見つからないというのはまさに今の私の状態だ。

「?そろよつと。」

「!」

私が何もいわないでいると、シディアンに紙を奪われてしまった。アダメントも続いて覗き込む。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「よくやった!」「さすがです!」

「えっ……って、うわっ?!」

二人が思いつきり抱きついてきた。私はあわてて支える。

「全部とは、やっぱり俺の友ダチだな！」

「僕でもありますよ！良かったです、アスカ！」

「は、はぁ……ありがとございます……？」

私の紙に書いてあったのは。ただ一言。いや、きっと他の人のものもそうなのだろうが、私のものはきつとだれよりも短かったはずだ。

推薦試験の結果、アスカのすべての術隊への配属を許可する。

たった一文。けれども、それはかなりの重みがあった。

神空騎士団は、推薦試験で合格した隊が、十四歳の時の配属候補となる。そういった理由も含めて、試験を行うのだ。つまり、推薦試験で将来の配属先が絞られる。

シディアンとアダメントは3つ、私は6つ。これが決定されている。

「俺はこんな奴を友に持ったって自慢できるな。」

「僕だってそうですよ。」

「二人とも・・・」

私は私だけがふたりより候補が多いことを申し訳なく感じたが、それは違った。二人はそんな風に心の狭い人ではないし、逆に喜んでくれるような人だったのだから。

「さて、お祝いでもするか！今から時間あるか、二人とも？」

「ええ、そうですね・・・僕は、大丈夫です。アスカは？」

「私も、大丈夫ですよ。」

「よし！それじゃ、城下に下りて、俺の家に行こう。途中で食べ物買っても良いしな。」

そう言って、シディアンが歩き出し、私とアダメントもそれに続いた。

本部をでると、空は太陽の光を余すところなく降らせていた。

33話・三人のお茶会（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

感想、ありがとうございます。これからも頑張って書いていきたい
と思います。

33話：三人のお茶会

「ファイア！」

名前を愛称で呼ばれ、そちらを向くと、すでに庭園においてある席にキリが腰掛けていた。

「お待ちせして申し訳ありません。本日はお茶会への招待、ありがとうございます。」

「ううん。さ、座って。」

促されるまま席に腰掛ける。すぐにメイドから紅茶と菓子が出された。

「ありがとうございます。」

そう言ったただけなのだが、メイドから驚いたような顔をされた。私になにかしただろうか？

メイドが去っていくと、キリがくすくすと笑い出した。

「あはは、相変わらずフィアらしいね。」

「はぁ・・・?」

訳が分からない。しばらく笑ったキリは笑いを収めると、私の近況について聞いてきた。

「それで、フィアは今、何をしてるの?」

「今、ですか・・・主に、仕事と騎士団の二つですね。騎士団の練習は始めましたよ。」

「騎士団の結果発表が3日前だけ?フィアはどの術隊で訓練するの?」

「私は、剣術、槍術、弓術、体術、馬術、陣術です。」

「へえ・・・え・・・全部?」

「はい。」

騎士団の推薦試験ですべて合格だったことは、すぐに知れ渡った。なにせ、今回騎士団に配属された者は全部で50人。しかも私はすべての訓練に顔をだした。知られないほうがおかしいのだ。

「そうなんだ・・・ふーん・・・直属は、いけるね・・・」

「キリ？」

キリがなにかをつぶやいていた。私が声を掛けると、何事もなかったかのようにこちらに向き直った。

「なんでもないよ？それにしても、フィアは忙しいね。疲れてるなら今日、呼び出さなければ良かったね・・・。」

「騎士団の友人にも言われましたよ。ですが、ちゃんと休養は取っています。心配はいりません。それに、」

「？」

「友人の誘いを断るわけにはいきませんからね。」

そう言うと、キリは今度は嬉しそうに笑った。

「・・・そっか！でも、無理しないでね、ファイア。」

「はい。」

「あ、それで、騎士団の友人って？ファイアの友人は僕の友人でもあるんだから、教えて？」

「いいですよ。騎士団の友人は、槍が得意なシディアン、弓が得意なアダメントという名前の二人です。」

「へえ、会ってみたいな。・・・その二人は、ファイアが貴族って知ってるの？」

さすが、王族だ。貴族と地位をもたぬ民の間に壁があることを理解しているのだ。

「・・・いいえ。私は、彼等の間ではアスカという一人の人間として存在しています。」

「そう。やっぱり、階級があるんじゃないだよねえ・・・。」

なんだが、しんみりとした空気になってしまった。私は、空気を
変えるため、あえて明るい声を出す。

「ですが、階級を気にしない付き合いができますし、問題はありま
せんよ。」

「アスカ……。」

私が笑みを向けるとキリの笑い返してくれた。

「そうだね。安心してアスカ、僕が国王になったらこの国を変えて
見せるから！アスカも協力してくれるよね？」

「ええ。もちろんですよ。期待しています、キリフィラス殿下。」

「そうですね。わたくしも期待しております、キリ殿下。」

「ありがとうございます、フィア、サラ姉上！」

「……え？」

顔を横に動かすと私の隣にサラ様が立っていた。私は慌てて立ち上がる。

「サラ様?!なぜ、ここに?いつからいらっしやっただんです?」

「あら?気付きませんでしたの、サイフィアス。先ほどからわたくしはいましたわ。」

そういつて淑女らしく笑う姿は、どうみてもいたずらが成功した子供のそれだ。

私は、こっそりとエンフォニーに話しかけた。

「(エンフォニー)」

<王女のことなら知っていた。フィアには害がないから黙っていたのだ。問題あるか?>

「() . . . いや、ないような、あるような . . . 」「()

<まあ、問題はないのだ。ほら、王女のために椅子を引け。貴族として当たり前なのだろう?>

エンフォニーの声にも、紛れもない笑いが含まれていた。言葉の節々からそれが伺える。

私はエンフォニーに言われるまま、ひとつあまつていた椅子を引き、サラ様の「ありがとう、サイフィアス。」という言葉に笑顔を返した。

「ところで、姉上？僕の前では口調を崩していただいて結構ですよ？フィアも知ってるんだよね？」

「あら、キリ殿下。誰が聞いているか分からない庭園では、そんなことはできませんわ。」

「キリはサラ様の口調が変わることを知っていたのですか？」

私は驚いて口をはさんだ。王だけでなく、王子まで知っているとは。

「うん。僕と姉上は母上が一緒だから、昔から仲が良かったしね。僕の他に、王子は二人、王女がサラ姉上を抜いて二人いるんだ。ちなみに、サラ姉上は第3王女なんだよ。政治の都合で、側室を持った父上は王位で荒れることを知ってたんだけど、父上はあれでかなり切れ者だからね。子供の数も考えられているらしい。・・・あ

あ、ごめん、話がずれた。理由は分かった？」

「ええ。よく分かりました。」

「それなら良かったですね。ああ、サイファイアス、防音のための陣術は結構ですね。わたくしも、たまにはこういう言葉遣いをしていなくては、ぼろが出かねませんの。よろしい？」

今まさに陣術を行使しようとしていた私は体の動きを止めた。

「分かりました。」

「ところで、お二人で何を話されていたのかしら？」

と、サラ様が急な話題の転換を行った。それに釣られるまま、会話の内容が変わって行く。

「騎士団のことについてです、姉上。聞いてください、ファイアは推薦試験ですべての術隊を合格したんですよ！」

「それは本当ですか?!」

「はい。本当です。」

「まあ……。」

サラ様は表情が驚きから喜びに変わった。

「それはすばらしいですね。サイフィアス、もう将来は決まっていますわね！」

それは、<羽衣騎士>に、ということだろうか？それになら、目標とは答えることはできるが、決まったとは言いきれない。私が答えあぐねていると、

「違います、姉上！まだフィアには選択肢があります！」

「まあ、まさか殿下、あなた自身の……それはいけませんわ！サイフィアスは、わたくし側にくるのです！」

「いいえ！それはサイフィアスが決めることです！僕側ということも十分に考えられます！」

いつのまにか言い合いに発展していた。これはとめるべきだろうか？

「あの・・・」

「フィアは黙ってて!」「サイフィアスは黙っててください!」

声を掛けたが、逆にとめられた。どうやら、周りが目にはいつていないらしい・・・。

「わたくしは貴方の姉ですよ?!少しは遠慮なさい!」

「それならば僕は第一王子です!人材確保は重要です!」

「・・・」

私はゆっくりと紅茶を飲んだ。丁度良い温度だ。

「僕のです!」「わたくしのです!」

相変わらず声は止まない。

「いつまで続くんでしょうか・・・？」

私の問いに答える者はいない。空を、雲がゆっくりと流れていった。

閑話・それぞれの日常（前書き）

読んでくださりありがとうございます。一応、これが26日分となっておりますが、投稿する可能性もあります。

感想ありがとうございます。作者としてもキリは好きです。返信をできなくて申し訳ありません。すべての方に返信するのは難しく、申し訳ないのですが、ここでお礼を申し上げます。

そして毎度のこと、誤字が多くて申し訳ありません。もっばらいただくのが漢字ミスの指摘なので気をつけます。

キャラクターへの感想も待ってます。一番感想が多かったキャラはきつと出番が増えることになると思います。

閑話・それぞれの日常

シディアン side

「起きて、兄さん。」

「あと五分……。」

「ばさっ、と布団が取り上げられる。」

「駄目よ、朝ごはんもできてるのよ？それに、兄さん、今日も騎士団の訓練があるんでしょっ？」

「やばい！遅れる！」

俺は勢いよく起き上がった。呆れた顔をするダイアナを尻目に顔を洗い服を着替える。

「早くきてね。朝ごはん、冷めちゃうから。」

「おう！」

今だ馴れない騎士服（無所属隊員用）を着る。これは推薦試験の結果発表の翌日に渡されたもので、前もって採寸していたのだ。

「よしつと。」

鏡を見て、寝癖を直す。それから居間に向かった。

「遅いわよ、兄さん。」

「ごめんごめん。・・・今日は野菜スープにラムの炒め物か？」

「そうよ。昨日、お隣のおばさんにラム肉を貰ったの。」

自分で皿に取り分け、さっそく食べ始める。

「うん、うまい。」

相変わらずダイアナの料理はおいしい。というか、腕が上がっている気がする。

「なあ、ダイアナ。料理の腕上げたな。」

「分かる？」

ダイアナが誇らしげな顔をする。

「腕上がったのは、やっぱりアスカが来てからだよな？」

俺がそういうと、ダイアナは目に見えてうるたえた。

「な、違うわよ、たまたまよ！」

「ふーん？たまたまねえ……。」

笑っていたら、頭をはたかれた。地味に痛い。

「うるさいわよ！……それより、兄さん、騎士団でうまくやれてる。」

「なんだ、いきなり。問題ねえよ。アスカとアダメントもいるしな。槍術は腕上がってるぜ？」

ダイアナとしては、俺のことが心配だったのだろうが、本当になんの問題もなかった。

相変わらず二人とは訓練の時間が異なっても空いた時間に会っているし。

「そう。それならよかった。にしても良かったわ。兄さんに友達ができて。しかもアスカくんは推薦試験全部合格するような人だし。兄さんにはもったいないかもね？」

「かもなー。」

「え？」

「ま、俺の自慢できる友^{ダチ}には変わりねえから。ああ、もうこんな時間だ！わりい、ダイアナ、もう行くからな！」

「え、うん、いってらっしゃいー！」

「いってきますー！」

家を飛び出し、道を駆ける。今日は最初が槍術の訓練でアスカと一緒にだからと王城で待ち合わせをしているのだ。遅れるわけにはいかない。

体に力をいれなおし、王城までの道をひた走った。

アダメント side

ヒュンツ・・・ストツ

「はあはあ・・・」

的には全部で30本の矢が刺さっている。

毎朝、早朝から弓術の訓練をするのが僕の日課だ。

「ふう・・・」

用意されていた水を飲む。水は放置していたため、あまり冷たくなかった。

一緒に置いてあつたサンドイッチも口に運ぶ。これが僕の朝食だ。いつもと変わらない。

「さて、と・・・そろそろでかけようかな。」

時計を見ると、短針が？をすこし過ぎたくらいだった。いまから王城に向かえば、遅れることもないだろう。家にいてもすることはない。両親と兄弟はまだ寝ているだろうし。

服を騎士服に着替える。まだ着慣れない制服でも、生地は柔らかく、動きやすい。そういえば、シディアンも着慣れなさそうにしていた。アスカが始めてといいながら、とてもなじんでいたのには驚いた。騎士服は貴族的な要素も取り入れられている。騎士団では隊に正式に所属して優秀と認められた者は二つ名セカンドネームを与えられる。それは騎士が貴族に匹敵するぐらいの階級になった証でもあり、だから今から貴族風に、という訳らしい。そんなのは無所属隊員にはやらなければならないとおもつのだが。

家をでて、王城に歩き出す。僕を見送る人はいない。陣術を使わなければ遠いが、しばらくは歩こう。時間もあるし、問題はない。

僕は周りの風景を見ながら、ゆっくりと歩き出した。

サラフェルミア side

「王女殿下。今日はお針子を呼びまして、新しいドレスを製作させます。ご希望がありましたら、なんなりとお申し付けください。」

「分かったわ。」

朝食を食べ終えた後、私の担当のメイドをまとめるメイド長からそういわれ、いつもどおり頷いた。

メイド長が出て行き、部屋に一人になる。

「はぁ・・・」

ドレスの製作の中に、私の希望は存在しない。きつとなにか言うのと、「王女殿下にふさわしくない。」とか、「もつと王族らしく気品のあるものを！」と言われてしまうからだ。

まったく持って、窮屈なことだ。しかし、私のために作られるものであるし、着ないわけには行かない。私の姿を貴族に見せてもその目は位欲しさで食欲に光っているというのに。

なんだか、急にサイフィアスに会いたくなってきた。

殆どの貴族は王女であるわたくしにうわべだけの笑顔でよってくる。しかし彼はサラフェルミア本人に接してくれるし、美辞麗句を口にしない。喋っていて気が楽なのだ。

「キリにも会いたい・・・」

私の弟のキリ。10歳にして、この国の未来を背負っている。女王が許されるのなら、私が変わってあげたいような重圧の中での子は生きている。私ともども、なんと異母兄弟に殺されそうになっただか。ただしくは、その取り巻きや側室に、だが。

そういえばサイフィアスも10歳。この国はなぜ幼い者に重荷を背負わせるのだろうか？本人達が望んでやっているところもあるが、何もできない身としてはとても歯がゆい。

王女にできるのは、本当に限られているのだ。

「だから、私は王女にしかできないことを・・・」

こんこん、と扉がノックされ、メイドが伺いをたてた。

すぐに私は『王女殿下』となり、入室の許可をだす。

「いいわ、はいつてきなさい。」

「失礼いたします。」

今日もまた、わたくしの時間が始まる。

キリフィラス side

「王子、そちらが終わりましたら、こちらも目を通してください。貴族の名前を覚えることは重要です。詳細な部分まで、しっかりと暗記してください。」

「分かってるよ。」

ナハトム・デ・ プライネ伯爵、40代、伯爵家当主、姉一人、姉の嫁ぎ先はクレイマー男爵家……

クレト・ド・ フラット侯爵、30代、侯爵家当主 妻はオント侯爵家出身、領地は……

……頭が痛くなりそうだ。

さきほどからこの状態が続いている。午前中はずっと椅子に縛り付けられ、貴族達の情報を教えられている。はつきりいつて役立つとは思えないが、あとあと後悔しないために、一応記憶しようと思っ張っている。紙が山になっているが、考えないことしよう。

「殿下？」

「・・・なんだい？」

どうやら目付け役に集中していないことを悟られたらしい。

「今日の午前中はこれだけです、どうかかんばってください。」

それは机の上に載っている文を覚えればいいという意味か、それとも午前中はこれづくしという訳か。どちらにしろ、僕にはいいものではない。

「頑張ってるよ。」

それだけ返し、また読み始める。これも第一王子の仕事なのだから、やめるわけにもいかない。

と、途中で知っている名前を見つけた。つい、真面目に読み込む。

ロデス・ド・
当主
・ファルディナ公爵、30代、ファルディナ家

嫡男 サイフィアス・ド・ロデス・ファルディナ 10代

「ファルディナの天才」と呼ばれる。その由縁は、6歳までに10代の学習過程を終了し、同じく6歳から貴族の役職を持ったことから。現在は騎士団にも所属し、第3王女殿下と交流がある。

フィアってやっぱりすごかったんだね。初めて知った。ん？双子の弟と妹がいるのか。へえ……。会ってみたいな。きつとフィアと同じような子達なんだろうな……。

新しいことを知って、なんだか嬉しくなっただけで意外と仕事はかどった。このままなら本当に午前中に終わらせることができるだろう。

日の光が差し込み、暖かくなった部屋で、僕はしばらくの間書類との格闘を続けていた。

34話：訓練のさなかに（前書き）

遅くなりました！お待たせしました。

作品に対して指摘を下さった方、ありがとうございます。

今回も読んでくださり、ありがとうございます。

34話・訓練のさなかに

「踏み込みが甘い！出直して来い！次！」

「はい！」

「躊躇するな、剣を動かせ！」

「はい！ありがとうございます！」

「次！」

「お願いします！」

「もう少し後かな、私は。・・・あの子、下半身に力が入ってない。きつと・・・」

ズサアア・・・

「下半身に力が入ってない！だから飛ばされるんだ！出直せ！」

「はい。ありがとうございます……。」

よろよるとした足取りで少年は下がっていった。

「それにしても、隊長は疲れてるようには見えないな……。」

私が今いるのは城の鍛錬場。屋外にある、広いところだ。

周りにいる人は皆剣を腰に下げている。剣は私物だったり騎士団からの借り物だったりとさまざまだ。私の剣は、いつも練習に使っていたもので、少々古ぼけてはいるが、馴れているので使っている。ただし、槍や弓は借り物だが。

そういえば、シディアンは槍、アダメントは弓が私物だといっていた。馴れている物を使うのは皆一緒らしい。

と、誰かに肩を叩かれた。

「ねえ、君。」

「はい？」

そちらを振り返ると、立っていたのは赤い布を右腕に巻いた男性。

「君がアスカだね？久しぶりの全パス者の？」

「ええ、まあ……。」

全パスの意味は多分推薦試験をすべて合格した、ということだろう。

はっきりと問われることはなかったので、口の端が引きつる。

「へえ、自慢はしないんだ？悪くないね。」

「？」

「言い遅れたけど、私は、ストーム・スラッシュ。剣術隊の副隊長。公式の場には隊長しか出ないから知らなかったでしょ？」

「……はい。初めまして、副隊長。」

とても軽快な口調で話すこの男性が、副隊長。正直、驚いた。

「ところで、君さつき隊長と剣交えてた子のこと、何か言ってたでしょ？」

「どうやら聞こえていたらしい。それを聞くために話しかけられたのだろうか。黙っている必要もないので、質問に答える。」

「下半身に力が入っていない、と。腕に力が籠っているだけで、足とかがちゃんと地面についているように見えなかった。体全体を使わなければ、剣を扱うのは難しいです。隊長とはまるで逆でした。」

「よくみてるね。隊長も同じ指摘してたし。君とぜひ剣を交えてみたくなつたよ。」

「え？えーと・・・私には、副隊長と剣を交えるほどの実力はないのですが・・・。」

「そんなことはない。」

「なぜか、副隊長は真面目な顔で肯定した。それまでの軽さが身を潜めている。」

「人の姿をみて、どうなっているかは、その人より実力がなければできない。それだけじゃない。君は自分より実力がある人のことをちゃんと判断できるし、直すべきところを直し、それ以上のものができる。」

君の訓練を見たことがあるからね、と少し笑みを浮かべた。

「だから、実力を伸ばすいい機会になる。それに、私も君のような者とやれば、自分の実力を伸ばせるし、欠点も見つけられる。・・・ということ、隊長に許可をとるから、今度の訓練の時を楽しみにしてなよ。」

話に一区切りをいれた副隊長の口調はまた軽快な口調に戻っていた。

「え、あの・・・。」

「何？嫌なら副隊長命令にするよ？」

そう言った目に本気を感じたのは多分、本当だろう。

「・・・いえ。よろしく願います。」

「うん。それでよろしい。もし日付変更したいとかあったら、次の訓練までに言っただけね。この布を目印にすればいいから。この赤い布は剣術隊のセカンドネーム持ちなので、そんなにいないからすぐ分かるよ。」

「やっぱり、そういうのだったんですか、その布って。」

「そうだよ？本当は服ごと色変えるとかあったらしいけど、この蒼色は騎士団の証だから駄目ってなって、術隊ごとに色違いの布をつけてるんだ。剣術隊は赤色、槍術隊は青色、弓術隊は緑色、体術隊は黄色、馬術隊は橙色、陣術隊は灰色。」

最後の言葉に私は疑問を持った。

「灰色、ですか？」

「ああ。私も不思議に思ったんだけどな、なんか陣術は守りとか治療に使えるけど、同時に攻撃にも使えるから、中間の灰色なんだとか。」

「へえ……詳しいんですね、副隊長。」

「まあ、騎士団に入って長いからな。」

と、そこに声が割り込んできた。

「アスカー！残ってるのはお前だぞー。スラッシュ、そいつをたらし込むな！」

「たらし込むって・・・人間きがわるいですよ、隊長！」

「本当だろうが！アスカ、そいつはほっとけ！訓練だ！」

「今行きます！」

そう返事をしたものの、副隊長が目の前にいる。私になにか言う前に、彼は口を開いた。

「仕方ないね。じゃあ、また、アスカ。」

「あ、はい。」

そういつて笑いながら去っていく後ろ姿を見送る間もなく、私は

隊長にいわれるまま訓練を再開した。

「お帰りなさいませ、サイフィアス様。」

「ただいま、セバスさん。」

「湯浴みの準備はできております。それと・・・」

「ああ、ありがとう。あと？」

「今日、新しいメイドが三名、警備の者が二名入りました。」

「今日もか・・・分かったよ、対応は任せます。」

「御意。」

「ご子息様！」

「え？・・・フォージンさん！」

湯浴みを終え、廊下を歩いていると、偶然フォージンさんと遭遇した。

「ご子息様とお嬢様の誕生日以来ですね。騎士団に入ったとか・・・」

「いくら久しぶりだからってその口調じゃなくていいですよ、フォージンさん。」

「そうか？いや、つい・・・。」

そういつて笑う姿は前よりも明るい。数年前は見習いだった彼は、今では次期親方の地位にいる。もちろん、陰湿ないじめもない。

「ん？その剣、俺が作ったやつか？」

「ええ。今日も訓練があったので、使わせてもらいました。」

「そうか……。いや、自分が作ったのを使って貰ってるのは、嬉しいな。ところで、その目と髪、術が掛かっているのか？」

照れたように話題転換をするのが面白い。指摘されて慌てて髪に手をやった。

「あ、忘れてたみたいですね。解かないと。」

「いや、めずらしいからまだいいって。変装してるなんて、フィアも大変だな。」

「そうでもないですよ。これはこれで、利点もありますし。」

それから少し話し込み、窓から覗く光が少なくなってきたことに気付いた。

「そろそろ、メイドが術具を起動させに来る時間じゃないか？この廊下は遅いな……。」

その目線の先には、光の術具。まだそこには、光はともっていない。かった。

「つけてしまいましたしょうか？」

「大丈夫だ、足音がしてくる。メイドが来るな。」

フォージンさんのいうとおり、人の足音が聞こえてきた。焦っているようにも感じるから、きっとメイドだろう。

貴族の屋敷にいるところをこの格好で見られるわけにはいかないので、私は術を解こうと口を開いた。

が、それは聞こえてきた声で遮られることとなる。

「アスカくん?!」

「・・・クーリさん？」

メイド服に身を包み、そこにいたのはクリスさんの妹、クーリさんだった。

34話：訓練のさなかに（後書き）

久しぶりの登場、フォージンとクーリ。

フォージンのことは覚えていますでしょうか？鍛冶職人です。

誤字があればお知らせください。感想に、指摘だけでなくどのキャラがかわいいとか書いてくださると、作者としては嬉しいです。

35話・長期計画（前書き）

遅くなりました！もうしわけないです・・・。

パソコンが不調で、データが消えたりといろいろありまして・・・。

今回も読んでくださりありがとうございます。

35話・長期計画

「そうなの？アスカがご子息様と知り合いなんて、知らなかった。」

「ええ、実はそうなんです……。」

私の前に立つのは、メイド服に身を包んだクーリさん。その隣で、フォージンさんが面白そうにしている。

「でも、屋敷に知り合いがいてよかった。メイドなんて初めてだから不安で……。」

「大丈夫ですよ。このお屋敷の方々は皆優しい方ばかりです。」

「そうだな。そもそも、公爵家の方々が優しいし、滅多に怒らない……そうだろう？アスカ。」

「ええ。もちろんですよ。」

明らかに私に向けてのからかいを含んだ声。私は少し迷って、それだけ返した。まさか、自分のことをなんとかいうわけにもいかな

い。

「私も今日働いていて、とても良くして貰ったの。公爵様から公募があつて、とても嬉しかったし。」

ファルディナ公爵家には、ここのところメイドと屋敷の警備の者が増えてきている。それは、私が父に提案したからだ。

私が会議で提案した3つは、長期計画だとされている。計画が完成させるまでに、クーリさんと同じような境遇の人を守るため、屋敷で雇うことにしたのだ。被害にあつた本人が狙われる可能性もあるため、クーリさんの兄であるクリスさんのような人も、クリスさん含め、雇っている。

「何か、不自由していることはありませんか？」

「大丈夫よ。ふふ、何でそんなこと聞くの？」

「え・・・あ、私はサイフィアス様と知り合いなのですから、もちろん直接話す機会もあるので・・・。」

つい、焦って声が早口になってしまった。

「心配しないで。私より歳下なんだから、子供らしくしてなさい？
10歳なんでしょ？」

「そうですが……。」

「アスカと8歳も離れてるおにいちゃんの方が子供っぽく見える。
アスカが歳の割りに大人っぽいってお兄ちゃんが言ってたけど、そ
のとおりかもね。」

「まあ、アスカは本当に子供に見えないときがあるからな。俺の方
が甘やかされるような気もするし……。」

「ふふ、フォージンさんは実はそうかもしれないよ？」

「はっきり言うね……。いや、でも、そうかも……。」

なぜかフォージンさんが考え込んでしまった。小さい声で、「1
0歳に甘やかされる20歳って……。」とか、「そういえば、俺
が譲歩してもらってるのか？でも、愛称でって本人から言われたし
……。」と聞こえてくる。

「あの、フォージンさん……？」

「いや、でもな……。」

「気付かないようね。」

クーリさんがくすくすと笑っている。その顔に、前見たようなくらい影はなかった。

「それじゃ、私はそろそろ行くわね。アスカも、フォージンさんが気付いたら家に帰りなさい？あ、今日は屋敷に泊まるの？ご子息様の知り合いだものね。」

「ええ、今日は泊まります。それから、クーリさん。」

「何？」

「このお屋敷では、皆名前だったり、愛称で呼びます。ですから、公爵家の方々のことも、名前で呼んでくださいね。まだ、馴れないと思いますが。」

私がそういうと、クーリさんは、ああ、と納得したような声を出した。

「だから、メイドの皆があいつた呼び方をしてたんだ。執事長さんのこともセバスさんって呼んでたし。そっか・・・じゃあ、ご子息様じゃなくて、サイフィアス様ね。」

「ええ。」

「ん？どうしたの、アスカ。嬉しそうな顔して？」

「いいえ。」

慌てて表情を消した。やはり、身分を気にした接し方は私は好きではないのだ。

「それじゃ、またね、アスカ。」

「ええ、また。」

笑顔で去っていくクーリさんを見送る。

「ちとど。・・・あれ？」

ふと上を見上げると、一つだけ光のともっていない術具が。どうやら、忘れていたようだ。

「つけますか。滅多に怒らない人たちですからね。〈ライト〉」

私の言葉と同時に光がともる。それでフォージンさんも気付いたらしい。

「あれ・・・？アスカ、あの子は？」

「もうとっくにいきましたよ。さあ、私達も移動しましょう。」

「あ、ああ・・・。」

はっと目を覚ましたような彼を促しながら、私は明るい廊下を歩いた。

『ファイア。』

「フェニクス？」

夜。外からの光は月だけ。私は自室で、仕事の書類をまとめた。
た。

『そろそろ眠ったらどうだ？月があそこまで傾いてきている。』

促されるまま外を見ると、確かに月がいつもより移動しているようだった。

「そうだね。これを片したらね。」

『そうするが良い。』

フェニクスは部屋にある机の端にとまっている。さきほどから気遣わしげにこちらをみていた。ちよつと時間をかけすぎたかな、と反省する。

「いれでよじつと。」

とん、と机にまとめた紙を整え、乗せた。

『ご苦労だったな。』

「それでもないよ？殆どは人任せで、私がやるのは書類仕事だからね。」

『そうか？』

フェニアスの目がちらりと書類の方を向いた。机に積まれているのは、資料の束の山。

「そうそう。それじゃ、そろそろ寝ようか。」

と、私の声と同時に術具の光が消えた。

「エンフォニー？」

<手間がはぶけたらどう？術具は人間にも精霊にも使えるようになってるからな。ただ、作れるのは人間のみだが。>

「うん。ありがとう。術具か、術具の作成は私がやったほうがいい

かな・・・？」

町などに設置する予定の術具。術師が少ないため、その計画はまだ進んでいない。

<それは今度だな。余裕があるときにやろう>

「そうだね・・・。材料も相談しなくちゃいけないし。」

私はベットにもぐりこみ、瞼を閉じた。

「それじゃ、お休み。」

『お休み、ファイア。』

<良い夢を>

フェニナスとエンフォニーの声を最後に、私は眠りに落ちた。

35話・長期計画（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

今回はあまり面白くないかもしれません・・・。

36話：術具製作（前書き）

すみません、かなり遅くなりました・・・。

私情により、これから更新速度が落ちそうです。ですが、頑張っ
て投稿したいと思いますので、見捨てないで頂けると嬉しいです。

今回も読んでくださりありがとうございます。

36話：術具製作

「ギルドの建設は予定どおり進んでいます。ファルディナ領、オールド領、その他合わせて6つの領で進められており、他の領主にも建設を要請してあります。」

「奴隷制度の緩和は公布され、実施されてから、効果はでてきているようです。今のところ、反発している貴族はいません。」

「術具の設置はまだすすんでおりません。製作が間に合っておらず、確保している術師も少ないです。」

「やはり、問題は術具のようですね。開発には、提案者である私も参加します。それから、ギルドは規則を作り、できるだけ細かく決めていきたいと思います。担当の方、なにかあればまとめて提出を。奴隷制度については、私達の最終目的を忘れないように。」

報告した者達が頷く。

「よろしい。本日の会議は、以上で終了とする。解散。」

古株の貴族の声で、会議は終了となった。

<術具の作り方？教えるのに問題はないが、どうしてだ？>

「今日の会議でやっぱり術具の設置が進んでないことが分かって、私も製作に参加することにしたんだ。」

< そうなのか。だが、ファイア、午前中は会議が続いていたのだろうか？ 疲れていないか？ >

「大丈夫。だから、教えて？」

< ファイアがそういうのなら。 >

そして、エンフォニーから術具の作り方を教わった。どうやら、術具とは、物に陣術をかけることで出来る物らしい。たとえば、街灯なら、街灯の素材となるものに術をかけたりののだ。

「陣術は術者が解くか、効果を発揮し終わるまでは永久的に続く術であることを利用してるんだね。」

< そうだ。それから、術具は製作者には影響を及ぼさない。攻撃の術の場合はな。そのほかの治療などは別だ。・・・説明はここまでにして、まずは練習といこうか。ファイア、どんなものを使うの？ >

「術をかけるものは、できれば小さいものかな。防犯用みたいなものだから、あんまり大きすぎると不便だし。」

< 分かった。では、少し待っている。 >

「？」

そういうなり、エンフォニーはテラスに続く大窓の方に手を向け

た。私もつられてそちらを向く。

「うわ・・・！」

大窓が開き、風が室内に入り込んできた。机の上の書類がバサバサと音を立てる。

『エンフォニー！』

<なんだ、フェニアス？森から戻ってきたのか>

『何をしているのだ？風の精霊を使って。ファイアにも被害が掛かっているぞ。』

そこで、エンフォニーが慌ててたようにこちらを向いた。

<悪い、ファイア。ワンスペックの風精霊はいたずら好きだからな。余計なことまでしたようだ>

私にあたっていた風が弱くなり、髪を揺らす程度にまでなった。

「大丈夫だよ・・・。エンフォニー、何をしようとしてるの？」

<ああ、それはな、>

と、唐突に風が止んだ。エンフォニーが手のひらに何かを載せて、こちらに差し出した。

<これだ。森にあった宝石。風の精霊に運ばせたんだ>

「宝石・・・？」

手のひらに乗っていたのは、いくつかの石。つまり、磨く前の宝石ということか。

『私も、森で精霊が動くような感覚がしたから急いで帰ってきたのだ。なるほど、術具を作るのだな？会議をファイアの目で共に見えたから知っていたが、考えたな、エンフォニー。』

そうだろう？と、エンフォニーが得意げにフェニアスに返す。

＜ファイア、これで、術具の製作を試してみるといい。宝石ならば活用法はいろいろあるだろう？練習だからといって、そこらへんの物ではファイアに作らせるわけにはいかないからな＞

「ありがとう、エンフォニー。やってみるよ。」

いくつかの宝石のうち、水色がかった宝石を受け取り左手に持つ。まわりの物に陣術が掛からないようにすこし空間を空けてたった。フェニアスは机に、エンフォニーはすこしはなれたところに立っている。

「まずは、水の術からやってみようか。この宝石は水色だし、どうせなら同じ色の方が分かりやすいよね。」

＜そうだな。あまり被害が大きくないのを選んだほうがいいだろう＞

「うん。オリジナルでもいいかな？あ、でも新しいのはやらないほうがいいんだっけ？」

<ああ、新しい術を考えるのに一つでさえ長い年月をよつするのだ>
『それでいくとファイアは別格なのだな。』

フェニアスが口を挟んだ。その声はどこか嬉しそうだった。

<そうやって間違いはない。まあ、それは置いておいて、使ってもいいだろう。今、大勢の術師が使っている術で、被害がどうか致死率が低い攻撃に属する術はほぼないといっている。術具の製作が進んでいないのもそのためだろう？>

事実、そのとおりだった。簡単な不審者撃退用といった術はなく、威力が弱くても効果が大きすぎる。

「それじゃあ、思い切って使っちゃおう。」

そして、私は術具製作に取り掛かった。

二回ほど扉を叩く。中からの返事を受け、部屋に足を踏み入れた。

「失礼します。」

「あら、ファイア？どうしたの？貴方がくるなんて珍しいわね。」

「「ファイア兄様！」」

双子に飛びつかれ、私は足を止める。

「メイ、レイ、あぶないですよ。」

そういったものの、私の顔からは笑みが消えない。まだ幼い双子は私の癒しでもあるのだ。

二人をくつつけたまま、私は母と向かい会う形で椅子に座った。

「相変わらず、一番フィアになついでるわ。母として、嫉妬しそっよ?。」

母はそういつて笑うので、私も釣られて笑ってしまった。「冗談だとお互い分かっているのだ。」

「今日は、ちょっと試して欲しいことがあります。……。」

「あら、何?。」

手に持っていた袋から宝石を取り出す。私が術具の元としたものだ。原石だったが、ちゃんと加工もした。

「実は、術具を作ってみたのですが……。」

母に、今回作ったものが、後ほど町の防犯対策のものになること、その実験に付き合って欲しいことを伝えた。

結果、快く、協力してくれることとなった。

「……まさか、それが術具?まあ、ぜんぜん術の気配を感じないわ……。」

驚愕したような表情に、ちょっと焦りながら、そのうちの一つを差し出した。

「その水色の宝石には、水の術がかけられています。ウォーターロ
ープと唱えてください。対象は、その花瓶にでも。」

「分かったわ。〈ウォーターロープ〉」

言葉と同時に近くにおいてあった花瓶に水の縄がまきついた。

「すごい！」

「なにあれ！」

双子が驚いた声を上げた。目は花瓶に釘付けだ。
が、それよりも私は母の反応が気になっていた。

「あの・・・母上？」

「・・・」

その目は双子同様、花瓶から離れていない。と、母の顔の向きが
いきなり変わった。

「ファイアー！」

「はい！...」

いきなり名前を呼ばれ、反射で返事をする。

「・・・これはすごいわ！...」

「え？」

「見たことがない術だけど、それと同じくらいすごいよ、この術具！術具に気配なし、攻撃に属する術らしいのに捕まえるだけ！さすが私の息子の作品！」

母は嬉しそうにそういう。どうやら、製作は成功したようだ。

その後、父が帰宅しさらに騒ぐことになるのだが、それは余談である。

さらにその後、部屋に戻ったファイアが、散らかった書類を見て相棒と精霊を相手に鬼と化するの・・・たぶん、余談である。

36話・術具製作（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

37話・頼みごと（前書き）

遅くなってもうしわけありません・・・。

どうやら、なれない生活で体調を崩したようで・・・。

読んでくださりありがとうございます。

感想を下さった方々、ありがとうございます。頑張って誤字直しをし、更新速度を上げられるようにしたいとおもいます。

37話・頼みごと

「それじゃあ、どうぞ。好きな術で掛かってきて?。」

「分かりました。では・・・その者 炎を導き 無数の熱となる
名をファイアーレイン!>」

私の言葉と同時に、雨のようになった炎が相手の男に降りそそぐ。
しかし、彼に慌てた様子はない。

「おお、これはおもしろい。それじゃあ、<その者 水を導き 凍
れる壁となる 名をアイスガード!>」

氷の壁が現れ、半球状となり彼を覆う。すぐに溶けてしまったが、
ちょうど炎の雨も止んだ。

間をおかず、私は空中に指を躍らせる。

「<その者 風を導き 鋭利なる刃と化す 名をウィンド・カッタ
!>」

「<その者 風を導き 鋭利なる刃と化す 名をウィンド・カッタ
!>」

え、と私が思う暇もなく、技同士がぶつかった。

「よろしいですか、隊長？アスカは隊長の言葉は断れません。だからといって、なにも建物を半壊させるのに付き合わせるというのは、いかなものでしょうか。」

「あはは、いいじゃないか、副隊長どの。ちょこつと始末書書けばいいんだろう？」

「そうですね、その始末書を書くのは私なのですが。まったく、だから貴方は……」

隊長として自覚がたりない、少しは建物を直すが側の気持ちになれ、結局全部こっちに被害がくる、どれだけ人の睡眠を奪う気だ……などなど。

半壊した建物の外で、術隊副隊長が隊長に向けて説教をしていた。後半は私怨のような気がしないでもなかったが。

「あの、副隊長……。」

「だから、隊長、もうすこし周りを……ん？なんだい、アスカ？」

「……いえ、私もあちらを手伝ってこようとおもっているのですが……。」

向けられた笑顔に恐怖を感じたのは気のせいではない。

「おや、アスカ、私のことはかばってくれないのかい？」

「さすがに回数が二桁に突入しかかっているので、無理です、隊長。」

「そのとおり。ああ、頼んだよ。人手は欲しいからね。」

「それじゃ、私も手伝いに……。」

立ち上がるうとした隊長の体を、副隊長が押さえつけた。

「隊長、貴方は結構です。これから、私との楽しいお話ですよ？」

副隊長の笑い声を後ろに、私はその場を足早にさった。

「もう、壊しのプロじゃないか？アスカ。」

「冗談交じりのシディアンの声。それに私は嘆息した。」

隊によって、訓練の仕方は異なる。剣術隊は隊長との模擬戦、術隊は全員で型の練習だったり、それぞれ違うのだ。そして、術隊は隊長、もしくは副隊長との実践に近い術のぶつけあい。ただ、その後を考慮されていないだけで……。

「笑いごとじゃないんですけどね……。」

「だけど、行くとたびに壊してるからなあ。」

「それは……。」

確かにシディアンと言うとおり、私は術隊隊長と訓練するたびに建物を壊していた。建物にヒビを入れるのはもちろん、半壊と全壊は日常の光景と化していた。それでも騎士団を辞めさせられないのは、それを直す技術が術隊にあるからだ。

最近では、私の訓練の日は術隊の建物を直す訓練の日とまでされている。そして、私が責められないのは・・・

「隊長が喜んで壊してるし、なんだかんだいって、隊員が建物直すのにはまったらしいからだし・・・。」

「ま、頑張れ、アスカ。」

「ええ・・・。」

シディアンの励ましに、頷きつつ、ここで私は、一人いないことに気付いた。

「シディアン、アダメントは？」

「あ？ああ、アダメントは、まだ訓練じゃないか？俺はたまたま早く終わって、訓練・・・じゃなくて修理帰りのアスカとあったただけだしな。」

自分で言った言葉に笑えたのか、また笑い出す。

「待つてればくるだろ。」

「そうですね・・・。」

「なんだ？急いでるのか、アスカ？」

「え？ええ、まあ……ちょっと、準備が済みまして……。」

「準備？」

「実は、もうすぐ父の誕生日なんです。その準備があるので、今日は早めに帰ろうかと……。」

それを聞いて、シディアンは驚いたようだった。

「そうなのか？それは知らなかった。それじゃあ、帰ったほうがいいな。アダメントには、俺から言っておくよ。」

「いいんですか？それじゃあ、お願いします。」

任せろ、とばかりに頷き、最後にこう聞いてきた。

「それって、俺も招待してもらえるか？」

「どうしようか……。」

自室で、私は悩んでいた。それは、シディアンの言葉によってだ。

この世界では、親しいものはお互いの家族の誕生日の日などに相手を招待し、家族が相手を受け入れていることを表す。それは、友

人であっても同じだ。

つまり……

「招待しなかったら、友人じゃないって思ってるってことになる……でも……。」

この家は公爵家。つまり、誕生日パーティーは貴族仕様。そこに自分を貴族としない彼を呼べない。アダメントもだ。しかし、呼ばなければそれはそれでひどい。どうするべきか……。

結局、私は母に相談することにした。家族の誕生日パーティーを企画するのは母の役目だ。社交パーティーとなると父も関わるが、今回は違う。そんなわけで、私は母の私室に向かった。

「あれ、ファイア？どうしたんだ？」

「こんばんわ、フォージンさん。今日は、お願いがあっってきました。」

母の部屋からの帰り道、私はフォージンさんの私室にむかった。

「なんか作るのか？あ、ちょっとまってくれ。」

何故か彼は部屋の机に置いてあった紙束を慌ててまとめて片した。なにかの図が書かれていたような気がしたが……なんだろうか？

「これでよし、と。それで、要望は？」

「あ、ええ、作ってもらいたいものがいくつかあるんです。いいですか？」

「もちろん。俺が頼みを断ったことがあったか？詳しく言ってみる。」

そう言つて胸を叩くフォージンさんに笑いながら、私は注文の内容をはなした。

話終えると、怪訝な顔をされた。

「もちろん作るが・・・公爵様が許可だされたのか？」

「母上がね。遠慮なくやりなさいって。上手くやってくれるつもりみたい。」

「そうなのか・・・あの方らしいな。」

「でしようっ？」

と、そこでフォージンさんが部屋の時計を見た。

「ああ。さあ、フィア、そろそろ部屋に戻ったほうがいいぞ。この時間帯になると、メイドが見回りにくる。フィア開発の護身の術をもってな。」

彼が言う術具は、そのとおり私が開発したばかりのものだ。今は試作段階なので、屋敷で使っているのだ。

「そうなんですか？役立ってるようですねにより。それじゃ、もどりますね。お休みなさい、フォージンさん。」

「お休み、ファイア。」

パタン、と扉がしまり、歩き出すと、遠くで足音が聞こえた。フォージンさんの言ったとおりだ、とわらいそうになるのこらえ、私は足早に歩き出した。

37話・頼みごと（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

38話：パーティーの前に（前書き）

遅れて申し訳ありません……。どうやら作者、現在スランプ中で
す……。。

待つてくださった方々、本当にありがとうございます。

38話：パーティーの前に

まだ日の出ている時間。公爵家当主は、使用人達と家族を集めた。

「さて・・・今日は、フィアの友人が来ることになっている。そのために今日の予定を確認したいと思う。セバス、頼んだ。」

「かしこまりました。」

セバスさんが進み出て、一同を見る。使用人達の目は真剣そのものだ。

「本日は、ご子息様のご友人が参られる。しかし、今回の訪問は、通常と違う。ロデス様が当主となられる前から屋敷にいる者は分かっていると思うが・・・。」

そこで、古参のメイド者達は頷き、身に覚えのある当主は首をすくめた。

「ご友人方は、ご子息様が公爵家嫡男だと知られていない。故に、会場はいつもと同じ大広間と、もう一部屋を使う。ご友人方は、こちらの部屋に来ていただくことになっている。使用人の人員配置は、

すでに決められている。よく聞くように。」

着々と人員が割り振られていくなか、私のそばにクーリさんが近寄ってきた。

「ねえ、アスカ？ご友人って、貴方も入っているんじゃないの？」

その問いに私は苦笑した。まさか、自分だとはいえない。

「私はすでにサイフィアス様の身分を知っているので。それに、今回呼ばれるのに、私も入っていますよ。」

「ふうん？それじゃあ、会場であえるわね。私は、ご友人の方の部屋担当になったわ。メイドじゃなくて、手伝いに来てくれてる知り合いを演じるんですって。凝ってるわよねえ。」

「そうかもしれませんね。」

「まあ、気兼ねしなくてよさそうだけど。ご友人方も騎士団の方で身分がないらしいし。・・・あ、呼ばれたみたい。それじゃ、またね、アスカ。」

「ええ、また。」

クーリさんが部屋から立ち去るのを確認して、私は家族の元に向かった。今、部屋には、古参の使用人達しかいない。

「その色も似合っているわね、フィア。私も母親として、同じ色にしたほうがいいかしら？」

「はは、それじゃあ、父としても変えるべきかな？」

「母上、父上……。」

つい、脱力しそうになった。焦っていないところが両親らしいが。

二人の言うとおり、私は今、髪と目を栗色にしてる。先ほども、家族としてではなく、知り合いとして、この場にいた。クーリさんが話しかけてきたのも、そのためだ。

「ふふ、貴方でも緊張することがあるのね、フィア。大丈夫よ、何も問題は起きないわ。」

「リリアナの言うとおりだとも。準備に専念しなさい。」

「・・・はい。そうします。」

私がそういい、頷くと、それを待っていたかのように、飛びついてきたものたちがいた。

「おっと・・・。危ないですよ、メイ、レイ。」

「ファイア兄様、遊びましょう!」

「兄様、この頃全然遊んでくれていません!」

「そうでしたっけ?」

言われてみれば、そうだったかもしれない。騎士団に仕事、立て続けに起こったことが多かった。

双子が不満をいうのも仕方ないだろう。

「それじゃあ、少しだけなら。」

「「本当!?!」」

「ええ。ですが、」

「「??」」

そろって首を傾げる姿を微笑ましく思いながら、言葉が続けた。

「今日は、私の友人達に二人を紹介したいのです。ですから、支度をするまでの間ですよ。父上のお客様に会ったりもしますからね。」

今度もまた、そろって頷く双子の手と手をつなぎ、私は両親に一言断ると（それより前からいいと言われていた気はしたが）、部屋を出た。

「アスカーー!!」

「シディアン！待ちましたか？」

「いや、今此処についたとこだ。アダメントも来てないしな。」

いつもと同じ、王城の門のところで、シディアンが待っていた。
私は馬車からおりた。

「へえ、今日は馬車か。」

「ええ。お客様に徒歩で家に来てもらうのは悪いと思ひましてね。
ちよつと借りてきました。」

「そつか、馬車といえば貴族の所有か辻馬車だもんな。アスカの家
はそんなに遠いのか？」

「まあ、少し、遠いですかね。馬車ならすぐですよ。」

「そうなのか・・・あ、アダメント！此処だ！」

「遅れてすみません！アスカ、シディアン！」

息を切らしながらアダメントがかけてきた。

「大丈夫です、私達も今来たところですから。」

「そうだな。ま、今回はオキヤクサマだから遅れても、アスカの家の人たちも大目に見てくれるさ。」

シディアンが笑いながらそう返し、それに三人で笑いながら馬車に乗り込んだ。

38話：パーティーの前に（後書き）

誤字・脱字がありましたら、お知らせください。

39話：パーティーが始まってから（前書き）

お待たせいたしました。今回はちょっと長めです。

読んでくださりありがとうございます。

感想をくださった方々、本当にありがとうございます。基本的に感想は返さないことにしていますが（サイトを開く機会が少ないため）、質問がなどでしたら返信はいたします。

相変わらず、更新速度はおそいのですが、感想がいつぱいくると、作者は頑張って内容が面白くなるように努力いたしますので、送ってくださいると嬉しいのです。

39話：パーティーが始まってから

単調な馬の足音が止まり、それに合わせて、馬車のゆれがなくなった。

「着いたようですね。降りましょうか。」

「着いたのか？思ったより早かったな。」

シディアンが言い終わらないうちに、馬車の扉が開き、御者が立っていた。

「どうぞ、お降りください。」

「ありがとうございます。」

私はそのまま降りて、続いて二人も馬車から降りた。

「へえ、ここがアスカの家か。案外普通だな。」

「どんなのを想像してたんですか？」

シディアンの感心したような、微妙な感想に笑いながらそう言い返し、二人を連れて中に入った。

廊下で、数人の使用人とすれ違いながら、二人が気付いていないことに安堵する。

「なんとなく、アスカの家って豪華そうだったんだよ。けど、本当は普通の家ってことに驚いたんだ。あ、けなしてるんじゃないぞ？」

焦ったような声をききながら、気にしてませんよ、と返し、それに大きく息を吐くシディアンを見て、また笑ってしまった。今度はアダメントも笑っている。

「そんな事をアスカは気にしませんよ。そうでしょう、アスカ？」

「アダメントの言うとおりです。さあ、着きましたよ。この部屋に入ってください。」

扉の前で立ち止まり、二人を促す。

「ああ。・・・アスカは入らないのか？」

「私は、これから家族に来たことを知らせます。皆、着替えているところでしょうから。中は準備できてますので、飲んだり食べたりして結構ですよ。少し待っていてくださいね。」

分かった、と頷く二人にそれでは、と言い、私はその場を後にした。

後ろから、この格好で大丈夫か？という心配そうな声と、大丈夫ですよ。という二つの声が聞こえてきて、私は笑いそうになるのをこらえることになった。

「それじゃあ、無事に事は運んでいるわけね。」

「はい。」

「良かったわ。フィアの陣術は成功してるし、誕生日パーティーも、問題なし。」

そういつて笑みを浮かべるのは、すべてを企画した母。

そのとおり、今、屋敷には私の陣術がかけられている。見えてい

るものを違つものに見せるといふものだ。だから、二人はこの貴族の屋敷が、普通の身分のない民が住む家に見え、普通の家ではそこまで長くないだろう、あの廊下も、普通に見えたわけだ。

「私は、これから父上の方にも顔を出してきます。メイとレイを紹介するのは、それからということにしておきます。」

「そうね、その方がいいわ。私達も、しばらくたつたら顔をだすからね。ちゃんと家族だって、紹介するのよ？フィア。」

「もちろんです、母上。」

冗談めかしている母に、どことなくプレッシャーを感じながら、そうとだけ返した。何故か、デジャヴを感じる。あれは、エンフォニーと契約する日だったから、たしか……

そこまで思い出しかけたところで、部屋の扉を叩く音がした。

「どうぞ。」

「失礼します……。こちらに、フィ、じゃなくて、サイフィアス様がいらっしやると聞いたのですが……。」

「フォージンさん？」

「あ、いた、じゃなくて、いらっしやいましたか。これ、約束のものをもってきたのですが・・・。」

「ありがとうございます、フォージンさん。さすがです、よく間に合いましたね。」

布に包まれたそれを受け取り、それが希望どおりのものであることが分かった。

「俺にとっては、楽勝です。ご希望どおりにさせてもらいました。」

自慢げに話すその顔を見て、つい笑ってしまったのは仕方のないことだ。フォージンさんも、冗談を含んでいたようで、「実は焦ったんですよ、少し。」と、小声で言ってきたりもした。

フォージンさんが退出した後。

「さあ、フィア。お父様の誕生日パーティーに向かいなさい。そろそろ、始まっているはずよ。顔を出すといっても、貴方は公爵家嫡男。簡単に片付けられないようにね？」

「分かってます、母上。・・・なんですか？」

真面目に答えたつもりだが、何故は母の笑みを深くしていた。ふふふ、とおかしげに声が漏れる。

「いいえ、ファイアが楽しそうだから、つい、ね。」

「はあ・・・？」

言われて見れば、確かに楽しみなのかもしれない。そういえば、こんなにも、計画して、個人的に何かをするのは久しぶりだった気がする。

笑顔のままの母に見送られ、私は自室に向かった。

「誕生日、おめでとうございませす、父上。」

大広間の一番目立つ場所に、誰よりも目立つ者達の姿があった。

「ありがとう、フィア。今日は、友人達が来ているんだっただね。無理しない程度にここですごしなさい。」

「お気遣いありがとうございます、父上。けれども、パーティーは父上が主役ですよ?」

「はは・・・そうだったな。だが、何考えているのか分からない・・・いや、皆同じ事を考えているのか・・・そんな奴等と過ごしても楽しくないからな。」

声の後半部分は、さすがに音量が小さかったが、いいたいことははっきりと伝わってきた。

「そうですね・・・あ、父上、今日は贈り物があります。」

「ん?なんだい?」

私が取り出したのは、白い布。物を包んで、形が丸くなっている。

大広間にいる者達の視線が自分の手元を集まっているのを感じた。

緊張などおくびにも出さず、私はゆっくりと布を広げていく。

「これは……。」

周りが息を呑むのが分かった。

「我が家の鍛冶師に作ってもらいました。私の手も加わっています。母上と、片方ずつ付けてください。一番有効な使い方です。」

「そうなのか……ありがとう、フィア。」

それを付け終えた両親は、今一度こちらに向き直った。

二人の耳元で光を反射しているのは、透明な宝石が収まっているイヤリング。フォージンさんの作品の一つだ。

想像以上に似合っていたので、自分の選択が間違っていないかったのだと自信をもてた。両親も喜んでいることだし、誕生日のプレゼントは成功とっていいだろう。じつは、イヤリングについて伝えていないこともあるが、それは伝えなくても問題ないだろう。必要なきに役立てば、問題はない。

その後、父から何人かの招待客を紹介され、しばらくたったころ。

「本日はおめでとつとつございます、ファルディナ公爵。」

私と父の前に現れたのは、見るからに裕福な暮らしをしている貴族。

父上が眉をひそめられた。といっても、身内などにしか分からない程度だが。

「ああ、アグリー伯爵。驚いたよ、伯爵とは話す機会が少なかったからね。」

言外に、何故話しかけてくるんだ、といっている気がする。いや、そうだろう。先ほど表情を動かしたのも、予定外の相手だったからに違いない。

貴族は普通、階級の高いものから身分の低いものに話かける。そうしなければ、階級が下の者は上の者に話しかけてはいけないのだ。公爵は王族の次の階級だから、公爵に話しかけられるのは、王族のみといえる。

「そうだったかもしれませんな。しかし、今宵はどうしても紹介したい者がおります。」

「紹介したい方？」

「ええ。こちらに来なさい、アンサイトリー。」

こちらが何かをいう前に、伯爵が誰かを呼びつけた。ああ、父の顔が不機嫌そうに見える。

それもそのはず。階級がしたの伯爵に話しかけられ、その程度では気にしない父はあるが、自分の屋敷で好き勝手やられるのは嫌なはずだ。それでも笑顔は崩れていないが。さすがだ。

「私の娘のアンサイトリーです。ほら、挨拶しなさい。」

伯爵に促され、しずしずと進みでてきた少女（といっても、すでに十代後半のようだが）は、貴族の娘らしい礼をした。

「初めまして、サイファルド公爵様。アンサイトリーと申します。」

声は少女らしいが、どこか裏を感じさせる。なんとなく、何かを狙っているような……

「アンサイトリー嬢ですね。これはこれは、伯爵に似ていらっしゃる。」

確かに、髪の色と目の色は一緒に、顔の造形も伯爵と似ていた。けれども、私は父の言葉に隠された意味を感じ取った。

つい、ばれない程度に大広間の、母がいるであろう方に目がいつてしまった。

父と違ってその場から動いていない母は、私と目があつと、にこっとわらって軽く手を振ってきた。

いや、絶対分かってるでしょう？！

心の中の突っ込みは気づかれなかっただろう。母の親指を立ててぐっと握った手がそれをものがたっている。仮に私の心境が分かったとしても、絶対に傍観してるつもりだ。

しかたなく、私は静かに怒りを燃やす父と、なにも気付かない伯爵に眼を戻した。

「そうですね？娘は親の私に似て、恋焦がれる者が多いようで。いつも、そやつらを追い払うのが大変でしてな。」

「もう、お父様つたら・・・。」

「伯爵も娘さんのために忙しいでしょう。世の男性から見たら、良い（物件の）お嬢さんでしょうからね。優しそうで（無く）、美しさも（無く）、すべて（というか、むしろ金とか）を狙ってしまうのでしょつね。」

どうしようか。父の言葉すべてに、声に出していない部分がある。

「ああ、そろそろ失礼しなくては。他の方々にも、挨拶がのこっているものでね。」

（お前が話しかけてきたから、無駄な時間を使ったじゃないか）

「今日は、来てくださった方が多い。伯爵とは、はじめてよく話せ

たよ。」

（おかげでお前が腐っていることが確認できたがな。今度から、税の徴収についても、お前をしつかりと注意しておこう）

父はこんな性格だっただろうか・・・？というか、ここまで言われて、何も気付かない伯爵がある意味すごく見えてきた。

「公爵とは話が合うようで、有意義な時間でした。」

どうやら、伯爵もそろそろ潮時だと感じたらしい。

父も、頷いて、私を連れて去ろうとする。

が、思わぬ声が掛かってきた。

「そうでした、公爵、私の知り合いが向こうにいるのですが、よろしければ共に行きませんか？」

あ、父の舌打ちが聞こえた。

「・・・そうですね。向かいますでしょうか。ぜひ、お会いしておくべきでしょう。」

（・・・私の仕事のブラックリストに、お前の仲間も入れてやる

べきだろうからな。」

こちらに顔を向けた父と目があう。なんとなく、謝っているような気がしたので、大丈夫だと、返しておいた。

父と伯爵が去っていくのを見送りながら、私は少し思案する。

実は、伯爵が話しかけてくる前、そろそろ抜け出すべきかと父と話していたのだ。その途中に話しかけられたので、どうするか決めていない。黙ってぬけるのもいかなものか。

「あの……。」

声をかけられ、そちらを向くと、そこにいたのはアンサイトリー嬢。まだ、動いていなかったらしい。

「サイフィアス様ですか？」

そういえば、挨拶をしていなかったことを思い出した。父が、すぐ抜けられるようにと配慮してくれたのだろう。

「そうです。どうかしましたか。アンサイトリー嬢？」

「あの、私……。」

嫌な予感、本当にそうなるときにあたるものらしい。私は、初めてそう実感した。

39話：パーティーが始まってから（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

40話：予感的中とばれない姿（前書き）

お待たせいたしました！二週間ぶりの投稿です……。スランプ継続中です……。

今回も読んでくださりありがとうございます。

感想を下された皆様、ありがとうございます。

40話：予感的中とばれない姿

「それでですね、サイフィアス様。その殿方ったら、犬に追い掛けられて、庭園中を駆け回ったんですって。それで、共にいた婚約者と別れたのだとか……。」

そして彼女は笑い声を上げる。先ほどから妙に体が近い。

「サイフィアス様とは大違いですわね。」

「そのようですね……。」

「あら、この話は面白くありませんでした？でしたら……。」

どのくらい時間がたっただろうか。父上と別れてこの伯爵令嬢と二人になってから、かなり時間が過ぎた気がする。一方的な会話は終わらず、私は彼女に拘束され続けていた。だんだんと距離が近くなっている気がする。

「サイフィアス様？聞いていらっしやいますか？」

「え？ええ、聞いていますよ。」

私の返事に、不機嫌そうに頬を膨らませる。しかし、怒っているわけではないのが、その様子から分かる。これは意図的にしか見えない。

「もう……よろしいですわ。」

「はぁ……?」

まったくもって、訳が分からない。というか、10歳の子供と会話して何が楽しいんだが。貴族のアプローチなら理由としてあげられるが、まさか、それは……ない、はずだ。

と、またさらに彼女が体を近づけてきた。至近距離から声が響く。

「ねえ、サイファイア様……。どうやら、お酒の香りに酔ったようです。どこか、休めるところはございませんか……?」

「……そうですね。では、誰か執事呼びましょう。」

「え?いえ、わたくしは」。

駄目だ。本気で身の危険を感じる。まさかのシヨタ・・・いや、考えない。きつと、彼女は酔っているのだ。貴族「策略家なんて考えたくも無い。そして、私にそう言った趣味はない。」

思考を切り替え、彼女が何かを言う前に執事を呼ぶ。

「こちらのご令嬢が気分を悪くされたようだ。休ませてあげて。」

「かしこまりました。どうぞ、こちらに・・・。」

勢いに押されて連れられていく彼女をそのままに、私は足早に大広間を抜け出した。

「はぁ・・・。」

つい、ため息が漏れてしまう。

「（まだ、いてくれるよね、二人とも・・・。）」

部屋に帰って、着替えたとき、時計を見ると、時間はすでにかなりたっていた。どうして、あの伯爵令嬢の話を切り上げられなかったんだろうか。これからは、貴族の社交のこともある程度は学ばべきだろうか？

ともかく、私は足早に二人がいるであろう部屋に向かっていた。

と、向こうから足音が聞こえてきた。こちらに近づいてきている。きっと、公爵家の者達だろうからと、私は気にせず歩いていった。しかし、その足音がぴたりとまる。不思議に思って顔をそちらに向けると、そこにいたのは立ち尽くすクーリさんだった。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

しばし、無言の時間が過ぎる。どうかしたのかな？と、私が疑問に思っていると、突然、クーリさんが頭を下げた。

「お、お初にお目にかかります、ご子息様！わ、私は、すこし前から公爵家に勤めさせていただいて降ります、クーリと申します！」

その言葉に私は近くにあった窓を見た。ガラスにうつすらと映っているのは、銀髪。陣術で変わっていない、公爵家嫡男の私だ。

「ええと、あの、先ほどは失礼をいたしました！ご息様の拝見するのは恥ずかしながら初めてだったので、つい、見とれてしまいました・・・！」

「どうやら、クーリさんは私に気付いていないらしい。ある意味それが救いだ。というか、顔を見ても気付かないのは、この髪と目の印象はそれほど強いのだろうか？」

「とりあえず、私は気付かれていないのをいいことにして、クーリさんに話しかけた。」

「そんなに慌てなくても、大丈夫ですよ。私は何もしませんから。えっと、クーリさん。」

「クーリさんがはじかれたように顔を上げる。」

「・・・はい、私のことはクーリと読んでください、ご息様。」

「すみません、この呼び方はわが公爵家の決まりのようなものからです。それでクーリさん。貴方は仕事があつたのでは？」

「！！・・・そうでした、先ほど、ご息様のご友人から、ご息様の様子を見てきて欲しいと頼まれました。なにかあつたのではな

いかと、心配しておいででした。」

「そうですか。ありがとうございます、クーリさん。私は今から向かいます。ああ、貴方は厨房の方へ向かったほうがいいでしょう。大広間でもパーティーが開かれています。人手もあちらにまわさなくては。頼めますね？」

「はい、もちろんです！では、失礼いたします。」

「あと、クーリさん。」

「はい、何でしょうか・・・？」

振り返ってこちらを伺う目には、不安げな光がある。これは、正体を明かせないな、と内心苦笑しつつ（もちろん明かす気はないが）、声をかけた。こういうところは私も我侭なのだろう。

「私のことは名前で呼んでくださいね。」

「あ、はい・・・分かりました、ご子息様。・・・ではなく、サイフィアス様。」

ちよつとだけ、いふなれば立場を利用してみた。といつても、笑顔を深くしただけ。・・・本当に、それだけですからね？

「遅い！」

「すみません、シディアン。アダメントも。少し、予定が狂いました・・・。」

「だからってなあ・・・。」

「もう、シディアン、そんなにアス力を責めないでください。アスカだって、予定があったんですから。そうでしょう？」

「ええ、どうしても、抜け出せなくて・・・。」

部屋に入って、最初の一声は短かった。仕方ない、かなり待たせたのは事実なのだから。

「まあ、今回は許そう。招待してもらったんだしな。」

「そうですね。さつきまで、あれだけ食べたり飲んだりしてたんですから。アスカ、まだなにも食べてませんよね？何か食べますか？」

「そうだぞ、こんなにあるんだもんな。それにしても、アスカん家って料理上手いんだな。それに、こんなにも手伝ってくれる人いるんだらう？」

シディアンが言ったのは、一般の服を着て給仕をする、執事とメイド達の事だ。結構徹底している。

「そうですね。皆さん優しいですから、手伝っていただいています。」

隅の方で、目を押さえている者が数名。頬を伝うものがあるよう
な・・・？

「アスカ、これおいしいですよ。食べてみてください。」

と、アダメントが皿に何種類かの食べ物を乗せて持ってきた。
同時にフォークを出される。

「立食パーティーっていいよな～。いろんなもの取れるし、いつもと違って新鮮だ。」

「あつ！シディアン、勝手に取らないでください！」

ひょいっとシディアンがアダメントの持っていた皿から手で揚げ物をとる。

それに対して、アダメントが行儀が悪いと言って、シディアンにもフォークを差し出した。

「わりい。アスカも食べるよ。」

「ええ。」

そういわれ、私も手を伸ばす。そうこうしているうちに、時間が過ぎていった。

「ふう・・・結構食べたな。」

「そうですね……。おいしかったです。」

「気に入っていただけただけだよ。よかったです。料理人……。作ってくれた方々も喜ぶでしょう。」

「そういえばさ、アスカ。」

「何ですか、シディアン？」

「俺、手伝いの姉さんに、アスカの様子見てきてくれて頼んだんだよな。いまさらだけど、会えたか？」

シディアンの言う姉さんとは、クーリさんの事だろう。会ったといえはあったので、頷いた。

「ええ、廊下で会いましたよ。彼女は厨房……。料理を作るのに、手伝いに行きました。」

「そうなのか？いろいろあるんだな……。」

そのとおり、いろいろある。誰も、二つのパーティー同時進行なんて考えないだろう。

そこで、大広間の方のパーティーがどうなっているのか、ふと気になった。父上たちは来ないのだろうか？

「んで、アスカの家族は来ないのか？」

「いえ、来るはずなんですけど・・・。」

私が言い終わらないうちに、扉が開いた。扉に殆ど背を向けるようにしていた私は、そちらを振り返る。

そこには、一般の服に身を包んだ、家族の姿があった。

「やあ、待たせてしまったようだね。今からでも大丈夫かな？」

そう言って微笑む父は、どこから見ても、ただの一般人に見えなかったのは、私の気のせいではないと思う。

40話・予感的中とばれない姿(後書き)

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

41話：誕生日と入団の祝いは共に（前書き）

本日は続けて二話投稿です。

読んでくださりありがとうございます。

41話：誕生日と入団の祝いは共に

「初めまして、私がアスカの父のディストだ。こちらは妻のリリー。この子達は、双子のメイとレイ。」

「は、初めまして、シディアンです。」

「アダメントです。」

「父う・・・父さん。そういう風では、二人が緊張してしまいますよ。」

「そうですね、あなた。いくらさっきまで仕事していたからって、そんな風にしないでください。」

私と母の二人にたしなめられて、父の雰囲気は幾分変わる。簡単に言えば、親しみやすさが上がった感じだ。

「おっと、悪いね、二人とも。シディアン君に、アダメント君。今日は、私の誕生日パーティーに来てくれて嬉しいよ。すでに、食事は取ったかな？結構待たせてしまったからね。乾杯だけでもしてくれるかい？」

頷く二人を見て、私は笑いをこらえる。特に、いつもの言葉遣いをしないシディアンが。

そして、全員が杯を持つと、今回の主役である父が口上を述べる。

「堅苦しいのはなしにしよう。私から、招待を受けてくれた感謝と、騎士団に入団した三人にお祝いと、これからも続く息子の友情を祈願して。乾杯！」

「「「「「乾杯！！」「」「」「」

全員の声が響き、杯が傾けられる。

しばらくは、会談の時間となった。

「楽しんでるかい？ファイア。」

「父上。」

丁度、シディアンとアダメントが双子に引つ張られてデザートの並べられているテーブルに言ったとき、父が話しかけてきた。

「あの二人も、いい子達だね。双子がなついている。」

「そうですね。二人とも、嫌がらないで相手してくれてますし。」

あの二人というのは、もちろんシディアンとアダメントの事だ。二人と双子を引き合わせると、たちまち双子がなついた。兄としては、嬉しい事だろう。

「ところで、父上。何故、先ほどは違う名を？」

それは、家族が自己紹介したときから思っていたことだ。

「ああ・・・それはね、私達の本当の名を明かすわけにはいかなかったからだよ。名前で貴族だと分かることは少ないが、私は公爵だからね。念のために、というのものもあるし、二人の口から漏れて、悪意あるものにあの二人が害されないようにするためだよ。」

「そついつことですか・・・。」

さすが、公爵家当主ともなると、考え方が違っていた。やはり、
そういうところが尊敬できるのが父なのだ。

「あと、一つ、聞いてもいいですか？」

「何だい？」

「母上と双子達の名前は愛称だから分かりましたけど、父上の名前は、愛称ではありませんよね？」

そこまで言って、父上がああ、何かを思い出しているような、そんな表情をしているのに気付いた。

「あれはね、私が騎士団にいた頃に使っていた偽名だよ。私もフィアと同じように身分を隠していたからね。今でも、昔の騎士団の仲間には愛称の他にそう呼ばれたりするんだ。」

「その中には、フェンライト様も含まれていますか？」

「そうだね。入ってるよ。ほとんど、愛称で呼ばれるけどね。」

「へえ……。」

「だから、フィア。身分を隠し続けるのは難しいが、事実を受け止めてくる者はいらぬ。お前が明かしてもいいと思つたのなら、私は止めない。後悔のないようにね。」

「……はい。」

「二人とも、今日はありがとう。」

パーティーが終わり、馬車の前で挨拶を交わす。

「こちらこそ、だ。そうだろ、アダメント？」

「そうですね。ありがとうございました。アスカ。」

「では、これを受け取ってもらえますか？今日は、父の誕生日パーティーでしたけど、知つてのとおり、父は私達の騎士団入団も祝つてましたから。」

「なんだ、これ？」

私は用意していた白い包みをそれぞれ二人に渡した。フォージンにさんに作って貰っていたものだ。

「これって……。」

アダメントの驚いたような声を上げる。

二人の手の平にそれぞれ乗っているのは、手袋と腕輪。

シディアンが手袋を持ち上げながら声に驚きを乗せて言う。

「こんなもの、貰っていいのか？指なしタイプの……手首の所についているのは、黒い石？」

「何言ってるんですか、シディアン！これ、ただの石じゃなくて、オフシディアン黒曜石ですよ！ちりばめられてる青いのはサファイア！しかも、こダイヤモンドつちの腕輪についてるのって、金剛石とエメラルド……！！」

「それってすごいのか？」

「すごいんです！普通の人は手が届かないぐらい！」

「へえ・・・？」

アダメントに力説させてもシディアンはいまいち理解できていないらしい。

これ以上アダメントが何か言うより先に、私は強引に先に進めることにした。

「それ、実は術具なんですよ。身体強化とか、いろいろかかってます。ちょっと、たくさん術をかけすぎた気もしますが、使えますよ。」

「術具・・・?!」

「へえ！実戦で使えそうだな！」

またアダメントが驚いた顔をする。まあ、術具は普通に買ったなら高い。しかも、本物の宝石入りとかは、なおさら。シディアンも、術具の値段の高さは知っているはずだが、それよりも先に中身に興味があるらしい。

「そうでしょう？遠慮せず、使ってくださいね。アダメントも。」

「え？えつと、はい……。」

と、そこでシディアンが悩んでいるような表情をしていた。使うことに躊躇いがあるのだろうか。

私が話しかけようとしたとき、勢いよく、顔が上がった。

「よし。俺は何も返せないけど、此処までしてもらったんだから、アスカは俺の親友つていえるな。俺のことは、シディでいいぞ。これからは、愛称呼びにしよう。」

「そうですね。僕も、なにも返せませんし。僕の親友でもありますから、愛称にしましょうか。アスカ、それでいいですか？」

「……ええ。いいですよ。」

「よし、決まりだな。アダメントのことはなんて呼べばいい？」

「愛称って考えたこと無いんですよね。それじゃあ、アーミーとでも。二人にしか呼ばせませんし。」

「よし。それじゃあ、あとはアスカだな。えーと……。」

「私のことはファイア、と。親しいものはそう呼びますので。」

私がそういったのに、二人は驚いた顔をしたけれども、すぐに、分かった、と頷いてくれた。

きつと、二人は気付かないだろう。この呼び方に含まれる意味を。そして、この呼び方が、今のわたしの精一杯なのだということ。

「それじゃ、ファイア。それからアーミーもこれから改めてよろしくな。」

「はい。よろしく、シデイ、ファイア。」

「よろしくお願いしますね。シデイ、アーミー。」

馬車が来て、二人が乗り込む。私はそれを見送って、走り出した馬車をずっと見ていた。振られ続ける手に、自分も振り替えしながら。

空は、無数の星が瞬き、暗さを感じられなかった。

41話：誕生日と入団の祝いは共に（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

閑話・黒曜石の訓練風景（前書き）

お待たせいたしました！またまた一週間ぶりの投稿になってしまいました・・・。

今回は閑話です。シディアン視点です。タイトルはどうしようかかなり迷ったのですが、こんな風になりました。

読んでくださりありがとうございます。

閑話・黒曜石の訓練風景

・シディアン side ・

「力を込めすぎるな！槍は流れるように動かせ！突くときはすばやく、一点を狙うようにだ！」

怒声が響くことに、懸命な少年達の声が聞こえる。

しばらくして、「休憩！」と声がかかり、各々が休みだす。

「ふう……なんか異常にやる気あるな、今日……。」

もちろん、やる気があるのはシディアンではない。やる気が無いわけではないが、先ほどまで叫んでいた槍術隊副隊長までとはいかない。

「あつー……。暑いなあ……。なんであんなにやる気あるんだろ……。あれか、いつも訓練してくれる隊長の代わりとして、一任されてるからか？」

用意してあった水を飲みながらつぶやく。まわりでは数人の少年達が話していたが、シディアンは加わることなく、近くの木陰に座った。フィアもアーミーも今日は別の訓練だ。他の奴等とは話さないわけではないが、わざわざ輪に入る気もない。

暑さで、服の前を少し空けた。訓練が再開されるまでならいいだろう。騎士団は意外と服装に厳しい。

できるだけ暑さを逃がそうとして、それに目を留めた。

「これは、はずす必要はないな。」

触ってみても、暑さは感じられず、何もつけていないかのようだ。そういえば、フィアはそういう素材にしましたから、と言っていた。てことは、一から注文してつくったのか？

そこでふと思い出した。この前、ダイアナが言っていたことを。

「聞いてよ、兄さん！今日、新しい服を注文しにいったら、すっごい高かったの！既製品の三倍よ！？頭きちゃっわ！！」

「だから、既製品買ってきたわ。ごめん兄さん、前と同じデザインだけど、休日しか着ないしいいわよね？色も違うし。まったく、なんで既製品は新しいデザインというものがないのかしら・・・？」

結局そうだったのかっ！？と心で突っ込んだ。そう、心で。あの時のダイアナは、オーダー品への怒りと既製品への苛立ちで恐怖を

感じた。はつきりとはいえなかったのだ。

「まさか・・・いや、ファイアならありえるか？」

普通にありそうだ。というか、そのくらいやりそうだし。服と装飾品じゃ、値段は分からないが・・・。深く考えないほうがいいか？

もう一度、お祝いとして貰った手袋を見やる。指の部分が第一関節に届くぐらいまでしかない。色は黒っぽい青で、手首の部分には黒い石、そういえば黒曜石オプシディアンだったか？それが三つほどはまっている。その周りには細かいえーと・・・そう、サファイヤがちりばめられている。

はつきり言っつて、石のことは良く分からないが、わかっているのは、この手袋が術具ということだ。石にも術がかかっているらしい。アーミーが、「全然術具の気配がしません！」とか騒いでたが、それって褒め言葉なのか？と聞いたたら、ファイアの家から帰る馬車の中で力説された。

「まー、つまりは、その術具を作ったファイアがすごいってことだよな。」

つくづく、俺がいい友を持った者だなあ、と思う。

「そついや、掛かっている術はなんだっけか？」

フィアに教えてもらったのは、確か

。。

「休憩は終了だ！お前等！訓練だ！！」

「はい！！！！」

「おっと、もう終わりが。」

周りで返事と共に他の奴等が駆け出していく。仕方ない。俺も行くか。ひとまず、術のことはおいておこう。

俺はささっと服をただし、立ち上がると槍を掴んだ。

「・・・うん。やっぱりな。」

この手袋をつけたからというものの、前より槍が手になじむようになった。愛用しているのもそうだが、この術具はそんな効果があるのだろうか。

「そこのお前！！ささと並べ！訓練だ！！」

「今行きます！！！！」

おっと、副隊長の怒声が。耳に悪いなー、なんて思いつつ、返事を
して走り出す。

太陽の光に反射して、オフシティアン黒曜石が光っていた。

閑話・黒曜石の訓練風景（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

閑話・金剛石の訓練風景（前書き）

今回は続けて投稿です。

ひねりゼロのタイトル。気にせずお読みください。

読んでくださりありがとうございます。

閑話・金剛石の訓練風景

・アダメント side 1

「調子がよさそうだね、アダメント？」

的に矢が30本ほど刺さった頃、隊長が僕に声をかけてきた。弓を下ろし、そちらに顔を向ける。

「はい、今日はなんだか狙いが良く定められるんです。」

「そうか・・・いや、いいことだな。では、そろそろ的を変えなさい。あれでは、真ん中に狙いが定められないだろう？」

隊長が言ったとおり、的はすでに真ん中がみえない状態だった。それもそのはず。矢はすべて真ん中、もしくはそれよりほんの少しずれたところに刺さっているのだから。

「場所がないようだったら、言いなさい。今日は、弓術隊に所属している隊員も訓練している。的が足りなくなるかもしれないからね。」

「分かりました。では、矢を回収してきます。」

的に向かおうとしたとき、隊長に再び呼び止められた。

「アダメント、矢筒に矢は何本残ってる？」

「・・・一本です。なにか？」

不思議に思いながらも、そうかえした。というか、そこまで射続
けていたのか、僕は。

「それじゃあ、その一本も射てみようか。」

「は？」

さっきといていることが違う。先ほどはもうやめろということ
を言っていたのではなかったのか。

「だから、やってみなよ。のこり一本とか、半端じゃない？それに、
これはチャンスだよ？」

「どつという意味ですか？」

僕の問いかけに、隊長は意味深に笑った。

「そのままだよ。君は今、集中力が切れているはずだ。その状態から、すぐに持ち直して集中するのは難しい。だけど、仮にだけど、君があの的の真ん中に当てられたら、もっと遠い的でやれる許可をだそう。上級者向けだけど、これができたら問題はないからね。」

隊長の言うとおり、緊張が解けている状態で集中しなおすのは難しい。的の真ん中にあてるとしたらなおさらだ。

「どつ？やる？」

僕はちらりと的に視線を向ける。的の真ん中にはすでに矢が刺さっていて、矢が当たる場所はなさそうだ。唯一、真ん中に当てる方法は

深く息を吸う。後ろで、隊長が立っているのが分かる。視線がこ

ちらに向いてるのが分かったが、僕は弓を握り、矢を番えた。

その瞬間、僕の意識は的だけに向かう。視線などは頭から抜け、数分前の会話も彼方に置かれる。

弓を引き絞る。周りの音が止み、感じるのは手に触れる弓だけ。

そして、矢を放った。

時が止まったようなほどあたりは静寂に包まれ、弓を放った僕はその体制のまま動かなかった。

後ろから、手を叩く音が聞こえた。

「お見事。合格だね、アダメント。」

「……隊長。」

「まさか、真ん中の矢に命中させて、射抜くとは。二つ名持ちレベルだね。」

的には、二つに裂けた矢と、それにはさまれたように的に刺さる矢が真ん中にあつた。

「疲れた……。」

あの後。上級者向けの的に移動する前に、周りの人たちに囲まれた。あれやこれやと質問をされ、訓練どころではなくなってしまう。どうにか切り抜け、今に至る。

力なく用意された休憩用の椅子に座りながら、つぶやいていても誰もせめないだろう。隊長からも、じきじきに休憩の許可が下りた。周りの者達は、隊長や副隊長に激を飛ばされながら、練習中だ。

背もたれに寄りかかると、コツツと音がして、僕はいまさらながらにそれがあることを思い出した。

「というか、忘れちゃいけませんよね……。」

右の二の腕あたりを触ると、冷たい感触がある。フィアに貰った

腕輪だ。

それを視界に納めると、目に入るのは金色。そして、大振りにカ
ットされた金剛石。蔓のように細く敷き詰められてのはエメラルド。

それらの価値を知っているアダメントからすれば、嵌めているだ
けでもおそろしいのである。友からももらい物がいやなわけではな
く、自分が壊してしまいそうな恐怖で。

ファイアにそう明かすと、そう簡単には壊れませんよ、とってい
たけれども、不安は消えない。

しかも、これは術具。さらに価値は高いのだ、普通の腕輪よりも。
さらに言えば、性能のよさも並ではない。最高峰なのだ。

「今日も、助けられてるしね。」

ファイアが言うには、術は<身体強化>のほか、<治療>や<集
中力上昇>、<加速>、<解毒>など、かなり掛かっている。もち
ろん、これはそれぞれの術を唱えなければならぬが。

腕輪をつけてから、弓がいつも以上に手にしっくりくるし、前よ
りも格段に力が上がったと思う。

ファイアに言ったら実力といわれるかもしれないが、今回あいう
ことができたのは腕輪が関係しているとかんがえてもおかしくない
はずだ。

「まあ、考えても仕方ないか……。」

ちょうど近くのテーブルに、果物がおいてあるのが目に入った。なんとなく、弓を引く体制になって（座ったままだが）、それを狙ってみた。

「……みたいだね。」

が、そこで目を疑った。弓を引いて、放つまでの動作はした。けれども、本物の弓と矢ではない。それなのに

「……なんで穴が開いてるんだろう。」

テーブルの上には、ちょうど矢がとおりすぎたような、細い穴があいた丸い果物が乗っていた。

そこで、はっとなって腕輪に目を向ける。

「（まさか……ね。）」

どうやらフィアに聞くことが増えたようだ。今度絶対聞こう、と
内心決意する。

触れた手の中で、アダメント金剛石がいたずらっぽく輝いた気がした。

閑話・金剛石の訓練風景（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

42話：厩舎での話（前書き）

お待たせしました。今回は一週間ぶりということで一話の投稿です。本当は来週の予定でしたが、思ったより早く書き終わったので。

今回も読んでくださりありがとうございます。

42話：厩舎での話

「おい、ファイア、こっちだ、こっち！」

「ああ、今行きますよ！」

シディの呼ぶ声が聞こえて、そちらを向くとシディとアーミーの二人が立っているのが目に入った。

横に並ぶと、二人の手にそれぞれ術具がついているのが見える。それらは二人によく馴染んでいた。

さすがに、二ヶ月も経てばそうなるのだろう。

そんなことを考えているうち、シディが唐突に聞いてきた。

「今日は、初の馬術隊の訓練だな。二人は、馬に乗ったことがあるか？」

「僕は乗ったことがありますよ。弓だと、馬に乗りながら的を射るっていうのもありますから。」

「私はないですね。残念ながら、そういった機会はありませんでした。」

貴族というのは、狩猟などが趣味に数えられるものだが、ファルディナ公爵家ではそういったことは無かった。もし仮にあったとしても、私はやりたくはない。フェニックスの相棒をもっていることもそう思う理由に含まれるが。

「そうなのか。フィアは俺と一緒にだな。できるかねえ、乗馬……」

「大丈夫ですよ。最初は大変ですけど、なれてくれば乗れます。」

「そうか……?」

シデイが不安になる気持ちも分かる。私も不安ではないといったら嘘になるだろう。乗馬なんて、前世から未経験だ。とはいえ、ここまできたらやるしかないのだが。

「それに、他の人も皆、初心者が多いはずですよ。なんとかやってみましょう、シデイ。」

「……そうだな、フィア。なんか、フィアが言つと説得力あるなあ……。」

シデイのしみじみとしたつぶやきについ笑ってしまう。

「シデイ？それって、僕の言いかたと駄目って言いたいんですか……？」

「あ、違うぞ？アーミーのも、ええと、納得できるしな?! 比べてはいないぞ?。」

「そうですね……?。」

「そうだよ! だから……。」

どうやら、目的の場所に着くまでアーミーの（意図的な）責めとシデイの弁解は続きそうだ……。

……ああ、ほらアーミー、笑みが隠しきれてませんよ?

「まずは説明からだな。お前らはまだ無所属だから、馬術隊とする訓練は馬の乗り方と馬上槍の基礎だ。これから、厩舎で馬を選んで来い。選んだらすぐ戻ってこい。ただし！選んだ馬はもしものことが無い限り最低4年間は乗り続けることになる。ちゃんと考えて選べよ。」

その言葉を合図に、説明を受けていた少年達は動き出した。続々と厩舎に入っていく。

「………これ、選べんのか？」

「………どうですかね？」

厩舎に入って、シディとアーミーがそんなことを言った。私も同じ気持ちになっていた。

「さすが、王城の、といったところでしょうかね。馬の数は3000頭以上、らしいです。半分はもう騎手が決まっています、私達が選ぶのはもう半分の中の、若い馬だそうです。行ってみましょうか。」

「………そうだな……。」

「……そうですね……。」

つい、笑ってしまいそうになりながら、驚いたまま動かない二人を引っ張り、私は厩舎の奥へと進んだ。

「お、新人さんかい？」

馬達を順々に見ながら歩いていると、初老の男性に声をかけられた。姿を見るに、どうやら馬の世話をする人のようだ。

「はい。今日は初の馬術隊訓練でして……馬を選びに。」

私がそう答えると、男性はそうか、と笑った。

「なら、見るべきなのは若いほうの奴だ。こっちだ。」

私達が誘導させるまま歩いていくと、着いたのは先ほどよりさらに若い馬がならんでいた。

「こいつ等は、まだ調教されてないんだ。ああ、最低限のまでってことだ。人間を振り落とさない程度にはなってる。」

そついいながら馬の鼻面をなでている様子から、男性が本当に馬に愛情を注いでいることが分かった。

「まずは、馬を見ることだよ。こいつだ、と思う奴がいたら、触ってみなさい。嫌がったり、避けたりしなければ、騎馬にすればいい。」

「そつなんですか。それじゃあ・・・シデイ？アーミー？」

男性から話を聞いている内に、二人は驚きから解放されたようだ。すでに歩き回っていた。

「はっはっは。あの二人は行動が早いようだな。お前さんも選びなさい。」

「はい。そうします。」

苦笑しそつになりながら、私も改めて動き出す。まずは、様子を見よう。

「シデイ、アーミー、決まりましたか？」

「おう。俺は、コイツにする。」

「僕はこの子にします。」

シデイが連れているのは、黒毛で黒い目の馬。アーミーが連れているのは、黄金色の毛で黄色の目の馬だった。すでに鞍も付けられている。

「フィアは？決まったのか？」

「いいえ、私は、」

「どつやら普通の馬では駄目らしくてな。珍しいが、こついつときもある。馬は、本能で理解をするからな。」

私の言葉を遮って、男性がシデイの問いに答えた。まあ、私も上手くは説明できないが。

「しばらくは馬術の訓練はなしだな。まあ、その内見つかるだろう。」

「そうなければいいんですが……。」

「大丈夫、大丈夫。新しいのが入ればまたそのときに試してみればいい。」

「はい……。」

私が触ろうと手を伸ばせば、何故か馬達は萎縮したように離れてしまった。それを思い出せば、今からかなり不安だが、気長に待つしかないだろう。

それにしても、何故私には近づいてこないのだろうか？

すこし残念に思いながらも、二人と共に厩舎の外に向かおうとした。

「ああ、それで、栗色の髪のお前さん。」

「はい？」

呼び止められて振り返ると、彼は続けて言った。

「名前はなんと聞いたかな？」

「アスカです。」

「そうか、アスカか・・・もしかすると、今年の新パスかな？」

「どうやら、ここにまでその話は広がっていたようだ。気恥ずかしく思いながらも、頷く。」

「はい。そうです。」

「おお、そうか、そうか・・・。それなら、れっきとした理由になるな。では、アスカ。隊長に、自分に合う馬がいなかったことを伝えるとき、私からの言伝も頼めるかい？」

「言伝ですか？」

「ああ。グランからだといえれば分かるよ。隊長に、久しぶりにいい原石が見つかったから、磨くためのものが揃うまで待っているべし、

と。」

「分かりました。隊長に伝えます。」

一礼して離れようとする、彼、おそらくグランさんが、こつ付け足した。

「そうそう。こつも言ってくれ。一度でも原石を落としたり投げたりするような目にあわせたら、私がじきじきに石のように削ってやるぞ、とな。」

笑顔なのに、中身は物騒だった。内容は分からないが、とにかく伝えよう。

もう一度、頷き、私はその場を後にした。

その後、自分が訓練に参加できない旨を隊長に述べ、しばらくは馬術隊の訓練はなしになった。

自分の馬がもててからの参加になる。皆に追いつけるようにしなければ。

訓練をしない分、仕事の時間を多少増やしてみようか。父とも相

談して、他の貴族方とも予定を合わせなければ。

そこまで考えて、そういえば、と私は言伝を思い出した。

グランさんの言葉を隊長に伝えると、「そうか……。」と言いつて。迷ったが、付け足された言葉を言つと、今度は深く頷いて、「絶対雑に扱わない。もうあんな目にあうわけには……。」「いつてうづくまってしまった。

……。あんな目とはなんだろうか？

アスカが去った後。訓練場所にこない隊長にしびれを切らした副隊長がくると、そこにはうづくまったままの隊長が「もうあんな目には……。あうわけにはいかない……。」「という言葉と共にいたらしい……。

42話・厩舎での話（後書き）

誤字・脱字ありましたらお知らせください。

43話・試合と予定（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

感想&指摘を下さった方々、ありがとうございます。手直しは、余裕があればやっていきますので、できれば気にせずお読みください。

43話・試合と予定

「試合、開始！」

その声と同時に、私は地面を蹴った。

剣がぶつかり、また離れる。

「踏み込み、速度、型、いい感じだね。想像したとおりだ。それじゃあ、今度はこっちから行くよ？」

その言葉と同時に、副隊長が動いた。

「くっ！」

剣に衝撃が襲う。なんとか耐えたが、まだ手が痺れているように感じる。さすがは、二つ名持ちといったところか。

「おお、今のに耐えた？普通だったら、倒れてくれるんだけどなあ。ちよっと自信喪失？」

「笑いながら言われても、そんな感じはしません、よっ!」

「あははは。そういう君だって、喋りながら切りかかってるけど?」

何度も剣がぶつかり合い、しばらくすると双方とも少し息が上がっていた。

「訓練、いや、試合でここまで疲れたのは久しぶりかな。いつもはみんなすぐ倒れちゃうからさ。やっぱり、君みたいな子とやらなくちゃたのしくないよねえ?」

「そうですね、私も副隊長との試合は楽しいです。」

父や剣術隊隊長と違って、柔軟さも入っている剣は、今まで相手にしたことがなかった部類だ。楽しまないほうがおかしい。きっと今の私をみたら、その顔は笑っているだろう。

「でも、そろそろ決めようか。これ以上続いたら、いい加減訓練に君戻せて隊長にせっつかれちゃうしね。隊長、君と訓練するの楽しみにしているみたいだよ? 将来見込みありそうだって。さすがだねえ、アスカ?」

「ありがとうございます……？それじゃあ……」

息を整えて、剣を構える。副隊長も笑みを落ち着かせ、剣を構えた。

同時に地面が蹴られた。そして、音が止んだ。

「皆、よく聞け！今回、騎士団の調査で、魔獣の出没が確認された。それにより、魔獣の討伐隊を結成する。だが、全員が行くわけではない。人数は無所属からは少数だ。」

そこで、隊長は一旦話を区切り。

「討伐の機会は何回もあるから、今回選ばれなくとも、次回選ばれることはある。各自、しっかりと訓練するように。それじゃあ、連れて行くやつを発表するぞ。……ああ、それから。」

そこで、隊長が私の方を向いた。なにかあったかと私が目を合わせる。

「全パスは拒否権なく、魔獣討伐参加だ。危険もあるが、覚悟しとけよ?」

思いつきり笑顔でそう言い切った。隊長、貴方ってそんな風に笑う人でしたっけ……?」

その後。訓練が終わってから、私は隊長のところに行った。

「馬がない?ああ、分かってる、全パスのやつにはあることらしいな。理由は知らないが。心配ない、アス力は陣術使えるだろう?」

「え? はい、使えます。」

「それから、移動は陣術隊とだな。実戦は剣術隊とだぞ。せっかく、最初でお前のこと勝ち取れたんだけどなあ……。」

「はい?」

後半は小さくて聞き取れなかった。聞き返すと、なんでもないと手を振られる。

「討伐は、隊ごとに分けられてるから、他のところに混ざらないよう気をつけるよ。さっきの試合も見てたが、お前は剣術隊で重要な戦力だからな。」

「どうやら試合を見られていたらしい。そう言われても、私が大きな戦力になるとは思えないのだが。」

「あいつが試合やらせてほしいなんていつてくるのは珍しいんだ。まあ、許可したかな。結果的に実力を確かめられたし。アスカ、二つ名持ちの副隊長とあそこまで戦えるのはすごいんだぞ？あと少しで引き分けまでいけそうだったしな。」

「そうでしょうか？私はまだまだだと思ってます。」

本当に、まだ自分は強くないと思う。結局、あの試合も負けてしまったのだから。

「力は伸ばせばいい。お前には才能があるだろうしな。・・・ほら、今日はもう帰れ。予定が決まり次第、魔獣討伐だ。」

「はい。それじゃあ、失礼します。」

「ああ。」

隊長に礼をして、その場を去る。途中、赤い布をつけた人をすれ違い、副隊長だと気付き、挨拶をして。「また試合しようね」と、声をかけられたが、笑うだけにとどめた。

さて、もうシディとアーミーは訓練が終わっただろうか？ふと、声が聞こえて、それが聞き覚えのある声だと気付き、もう訓練は終わったのだとも。私はそちらに足を進めた。

43話・試合と予定(後書き)

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

44話：魔獣討伐（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

久しぶりに使う「ミン」という単位、これは「メートル」と同じ意味です。

44話：魔獣討伐

「陣術隊、準備できた？無所属隊員達もOK？じゃあ、行くよー。」

隊長の合図で、隊員全員が一斉に術を唱える。

「<その者 風を導き 突風を形づくる 名をガスト・オブ・ウィンド>」

文字どおりの突風が訓練場を支配し、やがて消えていった。

「ご到着か、陣術隊殿？随分ゆったりしてたんじゃないか？」

「そちらこそ、お早いお着きで。剣術隊殿。それで、もう魔獣は討伐したのかい？」

「あちらさんが怖がって姿をみせねえんだよ。こっちは待ちぼうけだ。」

「そうか、なにもできずにくすぶってたんだね。分かった、陣術隊が直々に魔獣を追い出してあげよう。君達はさっさと切りかかるんだよ？それならできるだろう？」

「はっ、言ってる。」

現場についてそうそう、何故か陣術隊隊長と剣術隊隊長が言い争いだした。けれども、すでに隊に所属している人たちは平然としている。それどころか、お互いの隊員同士で仲良く話している。つまり、いつものことなのだろうか？

そんな私に気付いたのか、隊員の人と話しかけてきた。

「心配することはないよ、あれはいつものことだから。」

「いつものこと、ですか？じゃあ、毎回言い争いを？」

「そうだね……仲が悪いわけじゃないんだけど、ああいう感じに言い合える関係ってことかな。まあ、そういつわけだから、気にしないでやっていいんだよ。」

「そうなんですか……分かりました。」

「ん、それじゃ、頑張ろうね。」

そう言っておそらく剣術隊の隊員であろう彼は仲間のところへ去っていた。

そうしているうちに、隊長が戻ってきた。

「さあて、暇してる剣術隊隊長さんが急かすから、陣術隊、ちよつと森の中に行こうか。現場が森だところという役は僕達の役目だからね。ああ、アス力。」

いきなり自分の名前を呼ばれて驚く。目を合わせると、「君は剣術隊の方だからね。」とだけ言われ、そういえばと思い出し、頷いた。

剣術隊と共に森の外に残ってから数分後。声は剣術隊隊長の声のあと、聞こえてきた。

「……………来るぞ。」

「ガアアアアアアアアアア！」

獣のような声。隊員全員が一齐に剣を構える。少し離れたところで、槍が構えられる音と、弓に矢が番えられる音が聞こえた。シデイとアダメントも今回参加している。きつとあの中にいるのだろう。

「くその者 光を導き 一瞬の輝きとなる 名をフラッシュ！」

「くその者 樹を導き 鋭利なる槍となる 名をナチュラル・スピアー！」

魔獣の後ろで幾つもの声が聞こえる。樹の動く音、まぶしい光やこげる匂い、そして水溜りを踏むような音がしてきた。

なんかすごいことになってそうな気がする。一体なにをしているのだろう、陣術隊……………。

「剣術隊、突撃用意！」

と、そこで隊長の声が掛かった。気付けば、何体もの魔獣が現れている。離れたところに現れた魔獣には、すでに槍術隊が向かって

いた。

「全員、俺に続けええー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

馬に乗っていない少数に交じり、魔獣に向かって駆け出す。

近くで目にした魔獣は体長約6メートルほどだった。四足で、体より大きい口が目の前にある。

「はあっ！！」

魔獣に次々と切りかかっていく隊員と共に、私も切りかかる。生き物を自ら殺すのは抵抗があるが、人間である以上、避けて通れない道だ。人に害があり、殺すことにメリットがあると判断されているのならばなおさら。

「ガアアアツ！！」

「手足を狙え！次に首だ！」

「かまれないように気をつけろ、こいつの顎の力は強い！」

「はい！」

さすが正式に所属している隊員は、討伐の経験があるから馴れている。無所属隊員達にずっと指示を飛ばしていた。

「ガアツ・・・」

とうとう魔獣が倒れた。あたりはもう魔獣の声も聞こえず、地面が赤く染まっている。どうやら、私達が戦っている間に周りも片付いたらしい。

「よし、怪我人はいないか？いたら、陣術隊のところに行け。あいつらも泥というか水というか、服がやばいことになってるが治療できる体力はある。んで、それからここの片付けだ。」

隊長の一声で、また隊員たちが行動を開始する。見れば、隊長も服が真っ赤だった。それでも平然とたっているのは、それらがすべて返り血だからだろう。

「あと、今回は剣術隊が見回り担当だからな、片付け終わったら、真っ赤な服は皆脱げよ。上着だけな。」

「見回り？」

「見回りつてのは、こちら辺の住民の安全確認と、狩り残しの確認のことだよ。」

後ろから声をかけられて、慌てて振り向けば立っていたのは、討伐まえに一度話した彼だった。

「あ、ごめん、驚かせたね。討伐後は皆疲れて注意力散漫しているから、君も気をつけて。」

「あ、はい。それで、その見回りの担当が剣術隊ってことなんですよね？」

「そうそう。まあ、見回りで危険は殆どないし、ましてや戦闘する機会も少ないよ。そんなに気を張る必要もないしね。もしものときなんて、気にしなくて大丈夫だよ。」

「そうなんですか……？」

問題なんて起きないさ、とばかりの笑顔で言われ、とにかく頷いたのだが……。

もちろん、そういふときこそ、予感は当たる。

44話：魔獣討伐（後書き）

誤字・脱字がありましたらおしらせください。

45話：現れたのは（前書き）

お待たせしました！そして遅れてすみません！

書く、消す、書く、消す、のエンドレス。漸く抜け出せました・・・。

お気に入り登録、とうとう3500件突破。ありがとうございます。
こんな作品に付き合ってくださいる皆さん、本当に感謝です。

感想や質問にもあったのですが、まだ人物紹介が書き終わりません。
どうしてこんなに登場人物増やしたのか、とても疑問・・・。

今回登場するキャラにとって重要なことを、先に書いておきます。

・隊長キャラは、みんな若い。作者の脳内では、みんな20代。副
団長も含む。

設定では、40代くらいになると、騎士の方は近衛兵になります。
30代までは、隊長勤めてる方が多いけど、今の代は入れ替わった
ばかりですね。

ちなみに、登場していない騎士団総帥は50代、登場済みの騎士
団団長は40代をイメージしております。

補足するならば、騎士団にははっちゃけてる人が多いんです。

最後に、誤字・脱字について。ご指摘ありがとうございます。折
りを見て直しますが、しばらくはスルーしてやってください。

45話：現れたのは

それを見た瞬間、私は大声で叫んだ。

「隊長、右後方に馬車発見！後方に3匹ほどの魔獣です！」

「何?!どこだ!」

「馬車は現在、樹が密集しているところを通過中！魔獣との距離は、およそ10メートルです！」

「よし、捕捉した！隊の半分は俺に続いて魔獣の掃討、残りは馬車の方に向かえ！アスカ、お前は先行して馬車の方へ！」

「はい！」

隊長に言われるまま、馬車に向かって駆ける。風の陣術を使っているから、馬よりも移動は早い。隊長が私を名指ししたのもそれが理由だろう。

「くその者 風を導き 鋭利なる刃と化す 名をウィンド・カッタ
ー>!!」

馬車に近づき、先ほどよりも馬車と距離を詰めてきた魔獣に牽制の刃を放った。

少しの足止めにはなるだろう。隊長達がすぐに追いつくはずだ。

「大丈夫ですか!？」

走り続ける馬車に後ろから乗り込む。幌を覗くと、40代くらいの男性が蹲っていた。前方では、御者が必死になって馬を操っていた。

「君は、騎士団の者か……?」

「はい。今、他の者も駆けつけます。すぐに魔獣は討伐されますよ。」

みたところ、男性に怪我はないらしい。蹲っているのも、ところせましと荷物がつんであるからだ。し私がのっているのも淵ぎりぎり。様子を見るに、どうやら商人らしい。

「そうか……ああ、君、もう止まっても大丈夫だ。」

「は、はい!」

声をかけられた御者が返事をして、同時に、馬車が止まった。結構走ったらしく、魔獣の姿も見えない。微かに剣の音が聞こえているのだから、戦闘中なのだろう。

私は馬車から飛び降り、続いて男性も降りた。

「助かったよ、騎士殿。魔獣が現れて、どうしようかと……積荷の商品もあつたんだ、助けていただき感謝する。」

「いいえ。騎士の役目を果たしているだけです。王都までならお送りできますが、そちらの方向ですか?」

「いや、王都にはいかないな。もうすこし、西の方に行くんだ。魔獣のせいで道がずれたが、まだ仕入れの途中でね。この積荷を売って、また現地で仕入れるんだよ。」

「そうですね。では、申し訳ありませんが、途中までお供させていただきます。西の方へなら、ここらへんからすると王都の方に進んでからの方が早いからです。」

「そうか、では、そうさせてもらおう。騎士殿がいれば心強い。．．
．．何か、お礼ができればいいのだが、あいにく売るものしかなく
てね。さきほども、私物と一緒に馬を放してしまった。」

「馬、ですか？」

「ああ。立ち寄った集落で仕入れたんだ。見た目も綺麗で、骨格も
いいやつだね。高く買い取ったんだが、後から聞けば問題があつて
ね．．．仕方ないから、魔獣から逃れるために放してしまったん
だ。」

そこで商人はちらりと幌の中をみて、ため息をついた。

「だが、あとから気付けば、馬の鞍に私物をくくりつけていたんだ
よ。ご覧のとおり、馬車は商品で一杯だったからな。ああ、もった
いないことをした．．．。」

再度、ため息。

その様子を見て、あれ、これって遠まわしに要求されてる？と一
瞬思ったが、口には出さなかった。

かわりに、反対のことを言う。

「では、すこし道をもどって様子を見てきましようか？生きていれ

ば連れ帰ってきますし、もし馬がだめでも、私物だけでも持ち帰ってきます。」

「おお、いいのかね？さすが、騎士殿。そうだな、あの樹が密集しているあたりから、すこし前あたりで放したんだ。」

担がれた感なんて気にしない。自分は騎士、商人相手の貴族じゃない、と言いつ聞かせる。個人的に、商人は苦手なのかもしれない。

ともかく、今は回収するものことだ。馬は生き物だから分からないが、上手くいけば私物だけでも回収できるだろう。

「では、」

待っていてください、というより先に、私は後ろを振り向いた。

バキィツと大きな音を立てて、近くの樹が倒れた。そこにいたのは、一匹の魔獣だ。

私はとっさに、陣術を使う。

「くその者 風を導き 千の刃と化す 名をウィンド・シャワー」
「！」

刃と化した風が魔獣に向かって降り注ぐ。また足止めだが、今は

馬車の二人を逃がさなければ。

「さあ、馬車に乗ってください！御者の方、走らせて！」

「は、はいい！！」

「き、君は大丈夫なのかね！？」

「問題ありません！方向は王都の方へ、魔獣を倒したら向かいます！とにかく走らせてください！」

返事を聞く前に、私は再度魔獣に向き直った。

「グルルルルル……」

唸り声を上げながら、魔獣が近づいてくる。体はほぼ無傷だった。裂傷らしき傷が見えるが、少なく、おそらくさきほどの陣術の傷もそれだけだった。

「怪我をほぼしてないということは、向こうの三匹ではなく、新手。応援は望めないでしょうね……。」

馬車の気配が遠ざかっていった。これで、かばう必要はなくなつたが、騎士団員がくるまでこの魔獣を放置など出来ないし、まだ向こうで剣の音が聞こえるから、応援は無理。というか、こちらに来るはずの隊員達さえもこないのは、苦戦している可能性がある。

あれ、これって詰んだ？

「……いえ、ともかく、戦うしかありませんね。応援がくるまで、持たせましょう。それが課題です。ッ!!！」

そうしているうちに、魔獣が向かってきた。鋭い爪が振られる。

それを剣ではじきながら、魔獣を観察した。この人のような動物のような、曖昧な魔獣は、弱点が見えづらい。頭部と体の繋がっているところ（たぶん首あたり）や、体の中心などが弱点となりえるのだが、全身、黒というか紫のような色で体も大きいため、なんともいえないのだ。

考えている間も、爪を剣ではじきながら、ときおり繰り出される足や鋭く上がった牙に引つかからないようにする。

キーン、と音を響かせて、爪に当たった反動で魔獣と間を空けた。

「しかたありません。こうなったら……くその者 水を導き射抜く棘となる 名をアクア・ソーン>!!！」

魔獣が動いたため、標準がずれた。水でできた棘が、魔獣の足を射抜く。しかし、魔獣は倒れない。よほど強靱な肉体のような。さきほど、両腕に剣で傷を作ったが、それさえも効いていないらしい。

そこで、ふと、疑問が生じた。

何故、この魔獣は倒れないのだろうか？さきほどの魔獣を討伐したとき、団体戦とはいえ、腕と足に剣で傷をつけたら動きが鈍くなっただけ、傷を作った状態で、あんなにすばやく動いていたのだろうか？

「考えていても、埒があきませんね。」

なんとなく、心に嫌な予感が広がった気がしたが、今、この状況をどうにかできるのは自分しかない。

「やれるところまで、やりましょう。……一応、連絡は入れるべきですかね。」

一応、隊長に連絡をしておいた方がいいだろう。魔獣の声で、向こうで戦っている者達の様子も音も分からないが、後始末までひとりだとさすがにつらい。体力的にも。

「<その者 水を導き 封じの檻となる 名をアクア・ボール>」

魔獣のまわりに、水が現れ、球体となって魔獣を包んだ。だが、これだけでは足りないだろう。現に、水から手足をだして、出ようともがいている。

「<その者 光を導き 光引く雷となる 名をライトニング>!!」

晴天の空から、魔獣に向かって雷が落ちた。

「……そうだな、まずは、褒めるべきなんだろうな。お前が倒した魔獣、どうやら群れを率いていた頭みたいな奴だったらしいしな。」

「……………」

「魔獣を倒したのは、騎士の一人として頑張ったわけだし、俺に連

絡入れようとしたのもわかった。だがな……その連絡手段が、雷……？俺は目を疑ったぞ。」

周りの隊員の人たちも頷いている。副団長達にまで頷かれてしまった。さすがにまずかったか。

「いや、意図してそうなたわけではなく……ただ、有効な攻撃が、目印みたいになっただけで……。」

「有効な攻撃……案外、鬼畜か、アスカ。」

なぜか真面目に聞かれた。

「え、違いますよ！？なんでそうなるんですか！？」

「なんでって、水に電気が通りやすいのは常識だろう？俺が見たのは、真つ黒こげみたいのにされてた魔獣の、首と体だけだぞ？」

「……………」

ただ、考えなかっただけなのだ。あの時は攻撃をしなければ、とばかりに考えていた。けして、水に入れて、窒息を狙うと同時に、

感電させようとは思っていなかったのだ。だいたい、魔獣に効くか分からないのだし。

そういう旨を隊長に伝えると、ため息をつかれた。何故。

「まあ、今日一番の功績者はお前だしな。責めはしない。三匹の魔獣の方に戦力回してたしな。」

そう言うなり、隊長は去って行ってしまった。それと入れ替わるように、商人の男性が向かってきた。

「アス力殿、と申されるのですね。先ほどは、ありがとございまして。一度ならず、二度までも。」

「いいえ、私が戦ったのは、実質一回ですし。それに、他の者の力もありましたよ。」

「おお、そうでしたね。騎士の皆様には、感謝をしなければ。」

そこで、私はあることを思い出した。

「そうでした、結局、馬も私物も回収していません。今からでも、とって来ましようか？」

「いやいや！もう、だいぶ離れてしまいましたし、夕方です。アスカ殿の手を煩わせるわけにはいきませんよ。」

離れたと言っても、魔獣と戦ったあたりから1ハイドくらいのことだ。これくらいなら、私の陣術ですぐ戻ってこられる。そう考えて、言葉を返した。

「しかし、私物と仰っていましたよね？なにか、大切なものはいっているのでは？」

商人の男は、私の言葉に驚いたような表情を浮かべた。

「ええ、実は、家族への土産がはいっております。家族は、王都にいます。私は自分で仕入れに回りたいので、あちこち動いているんですよ。各地のお土産で、喜んでくれるんですがね。」

「それなら、なおさらですね。今から行って、戻ってきます。」

隊長に許可をとりに向かうと、以外とあっさり許可をくれた。理

由を聞くと、

「だって、お前は陣術使えるだろう？それに、ここは王都から遠い。あの商人が別れるのも先だ。真っ暗になる前に帰ってこいよ。多少の遅れは赦すが。」

という訳らしい。

そうして、私は、また来た道に戻ることとなった。

46話：暗い樹々の間で（前書き）

お待たせしました！

感想を下さった皆様、ありがとうございます。たぶん今回も誤字脱字あるとおもいますが、スルーしといてくださいね！

46話：暗い樹々の間で

「<キャンセル>」

陣術を解き、あたりを見渡す。空は暗く、あたりに生える樹がより一層暗さをだしていた。

「ここらへんのはずなんですが……。」

戻ってきたのはいいが、生き物の影は見えなかった。仕方ないので、樹が密集しているあたりを突き進む。

しばらく歩いていると、近くで草を踏むような音がした。

「人のはずはない、今は……?」

探していた物かもしれないと思い、静かに近づく。もし馬であれば、私の場合逃げられる可能性大だ。

いまさらながら、何故来たのだろう。避けられることを忘れてしまっていた。

「考えても埒が空きませんね……。」

止まってしまった足を再度動かす。先ほどまで聞こえていた私以外の足音がない。どうやら、止まっているらしい。こちらを警戒しているのだろうか？

大きな影が見えてきた。ちょうど馬ぐらいの大きさだ。目的の物は見つかったらしい。

馬の数歩手前で歩みを止める。馬は逃げない。ただ、こちらを見ているだけだ。

その体の脇に、数個の袋があるのを確認して、私はさらに馬に近寄った。

馬は動かず、じっとこちらを見つめてくる。暗くてよく見えないが、緑っぽい色の目らしい。

馬を驚かすわけにも行かないので、陣術で光を使うわけにはいかない。だから光は殆どないのだが、それでも全体を見ることはできた。真っ白とっていいような体。まぎれもない、白馬だった。

「綺麗な馬ですね……。」

白馬を見たことのない私でも、この馬が綺麗だということは分かった。その色は、何故近くにくるまで分からなかったのは不思議に思うくらいだ。それだけ、普通だとは思えなかった。

と、その言葉に反応してか、馬が嘶いた。

「私の言っていること、分かるんですか？」

もう一度、嘶き。これには驚いた。ある程度のことなら、意思疎通が測れるのだろう。

「珍しい馬ですね……一体、問題とはなんでしよう？ まあ、私から逃げないだけでも、普通ではないのですが。」

自分の言ったことに苦笑しつつ、私は馬にくくりつけてあった手綱をとった。

「では、他の人の所にまで行きましようか。ちょっと陣術を使いますけど、大丈夫ですかね？」

言いながら手綱を引っ張るが、馬は動かない。それどころか、「なに言ってるの？」とでも言わんばかりの顔をしている。……
・馬の表情は分からないが、雰囲気か。

しかし、これには困った。動かないのでは、連れて行けない。どうすべきか……。

そう私が思案していると、腕を小突かれた。そちらを見ると、馬の顔がすぐ近くにあった。どうやら、小突いていたのはこの馬だったらしい。いや、他に小突く人がいたら怖いが。

余計な考えを振り払って、馬と向き合つと、馬の首が後ろに振られた。不思議に思つてそちらを向くが、何も無い。にも関わらず、馬は何度も後ろに首を振った。正しくは、自らの背の方を。

そこで、ようやく私は気がついた。

「……………乗れつてことですか？」

それまで動いていた首が、今度は縦に振られる。どうやら、私の出した答えは正解らしい。

「やったことはないのですが……………」

私のその言葉に、いいから、とばかりにまた首が振られた。

ここまでできたら腹をくくるしかないだろう。まさかこんなときに乗馬初体験とは。

知識だけを頼りに、鐙に足をかける。この馬に着いている鞍が人を乗せられる物でよかった。

馬の背にまたがると、視界が一気に高くなった。くくりつけられている荷物が落ちないことを確認して、手綱をしっかりと握る。

歩くように指示をだすと、馬は今度は従ってくれた。

「お、案外早かったな、アスカ。あと1ハイドくらいかかると思ってたぞ。」

「お待たせしました、隊長。」

「それにしても、似合ってたな、アスカ。初の乗馬じゃないか？」

「はい。知識だけでも、どうにかなるものなんですね。」

「ある意味、乗馬出来ない奴に喧嘩売るような発言だな……。まあ、いい。無事帰ってきたんだから問題なしだな。すぐ出発するから、準備しろ、アスカ。」

野営地に帰ると、隊長に出迎えられた。といつても、偶然だが。言葉を交わしたあと、商人のいる方に向かった。

「すみません。誰がいらっしやいますか？」

商人の馬車に近づき、声をかける。出かける時も馬車にいたので、近くに居るのではないかと思ったからだ。

「アス力殿。ああ、持ち帰ってきてくださったんですね。ありがとうございます。うございます。」

馬車の陰から、商人が顔を出した。私がおそばにいる馬をみて、目を輝かせる。

「おお、両方ですか、これは助かりました。」

「お役に立てたようで何よりです。」

言いながら、手綱を商人に手渡そうとした。が、何故か受け取らない。

「あの……？」

「あ、ああ、すみません、アス力殿。ところで一つお聞きしたいの

ですが、この馬、何か問題をおこしませんでしたか？」

「問題、ですか？ いいえ、特には。おそらく、普通の馬よりいいと思いましたが？」

「そう、ですか。いや、実は、この馬は相当な暴れ馬です。人を乗せられないし、言うことは聞きませんし、どうしようかと思っただけです。買値が高かっただけにかなり困っております。」

それでは、アス力殿のご好意に甘えてしまいました、と商人が頭を下げてきたので、私は慌てて、言った。

「そんなことはありません。私が勝手にやったことなので、気にしないでください。」

「そう言っていたら助かります。ぜひとも、王都で入用がございませれば、私の商会に頼っていただきたい。たいしたことはありませんが、アス力殿のお力になりましょう。」

それから少し話をして、商人に言われるまま馬を馬車につないだ。といっても引く馬ではなく、ただ馬車の脇に綱でつながれている状態だ。

つないでいるとき、馬が私を見ているのに気付いたが、もう関わることは無いだろうと思って、首をかるく叩いてその場を離れた。

「いい買い手が見つかるといいですね。」

「ええ。一番最初に向かうところは決まっておりますので、心配な
さらないで大丈夫ですよ。」

と、そんな商人の意味深な言葉もあったが、隊列を組むうちに、
それは忘れてしまった。

隊長の声が聞こえ、列が動き出した。私も、最後尾で続く。隊に
護られるように真ん中で動く馬車の隣で、目立つ白馬が何度も見え
た。

あたりが暗くても目立つその馬が、何度も振り返って緑の目を抜
けてくるのも、確かに分かっていた。

47話：動き出す者達（前書き）

本日分投稿終了。

今回は面白くないかもです。いうなれば、ほぼ準備の回なので、タイトル不穏ですけど、暗くないはずですよ。

誤字脱字はスルーお願いします！

さっそく感想くれた方々、ありがとうございます！

主人公はきつと白馬が似合いますね。下準備はできました。そうご期待！

47話：動き出す者達

部屋に貴族達がそろっている。全員が書類を手に持ち、そのうちの一人が話し終えて席に座った。

まさに今、貴族会議の真っ最中だ。

「では、次。ああ、サイファイアス殿でしたな。」

「はい。まず、ギルドの建設ですが、建設が終了したと担当の方より報告されました。後日、私も確認したいと思いますが、自領にギルドがある方は、出来れば確認の方をお願いします。使いの方でも結構です。そして、具体的な内容についてですが。」

手元にあつた書類の内一つを手取る。

「まず、ギルドの内容としては、職業の斡旋所が主です。同時に、依頼も受け付けるようにします。」

「よろしいですか。」

と、そこで一人が声を上げた。

「質問があります。なぜ、依頼の受付をするのでしょうか。職業を斡旋するのであれば、必要ないのでは？」

「それでしたら、理由があります。職業の斡旋をするのは、その技術があることが条件です。もちろん、技術を必要としない職業もあります。すでに傭兵として働いていた者達は剣しかありません。その彼等の力を有意義に使うために、ギルド所属として依頼を受けさせるのです。」

まわりから「なるほど……。」という声が聞こえてくる。質問してきた貴族も、納得して頷いていた。

「続けます。ギルド所属とすれば、依頼がなくとも職を失うことはありませんし、いかなれば国が雇っているようなもので、町に魔物が進入した際にも協力を要請できます。もちろん、騎士団が到着するまでですが。民に簡単に怪我をさせるわけにはいきませんので。」

また、書類を手に取る。

「それから、彼等の实力を見誤らないために、ランクを作ります。簡単に、実力を表すためです。これについても後々相談が必要ですが、取り入れることが確実です。」

一枚をめくって。

「商人の方に関しても、ギルドに登録してもらうことで、商人同士でかわりを持ち、さらには国から真つ当な商会として保障されます。問題があれば、その保障はなくなりませんが、そのぶん他国からの貿易も安心して行えるはずですよ。」

手にもった書類をすべて置き、今度は別の書類の山に手を伸ばす。気付けば、サイフィアスの周りだけ書類の山が出来ていた。

「ギルドに関してはこのくらいでしょうか。ああ、ギルドは住民登録も行います。それで、領民の正しい数がかかるので、今まで以上に税の徴収は正しくなるでしょう。人数がはっきりしていれば、それだけ不正もしくくなるので。」

「では、次に術具の設置についてです。こちらは、製作は順調に進んでいます。試作品を、ファルディナ家で使用中ですが、経過は良好です。このまま領内に普及させることも可能ですが、今は設置場所の選定をしています。」

そのまま会議を進めること数分。術具については、それぞれの領内で必要な分だけ用意すること、盗られることを防止するため、特定の人物以外は取り外し不可ということが決定した。

そして、内容は最後へと。

「最後に、奴隷制度の変更についてです。実施されていますが、どうやら不穏な気配があるようです。貴族の犯罪は貴族にしか取り締まることはできません。そして、その力をこの会議に参加している方々は持っています。ですから、私は一つの提案をしたいと思いません。」

1ハイド後。貴族会議が終わった。部屋から出て行く者達の顔には、皆同じ表情が浮かんでいた。

翌日。

「それじゃあ、行ってくる。昼までには帰ってくると思うが。」

「私は騎士団の方に行ってきます。今日は一日なので、夕食までには帰ります。」

「行つてらっしゃい、あなた、ファイア。」

「「いってらっしゃい、お父様、ファイア兄様！」」

母と双子の見送りを受け、父と馬車に乗り込む。いつもは陣術を使って歩きでいくのだが、今日は父に誘われたのだ。

馬車に乗り込むと、父がこう切り出した。

「昨日言ったことは、本気なんだな、ファイア？」

「はい。私一人の力ではどうにもなりません、皆さんの力を合わせれば、この国の膿を出せるはずです。」

「……いままで、やろうとした者はいない、が……私はこれでは貴族だからな。お前の気持ちは良く分かる。たとえ、若さゆえのものだとしても、私はお前の提案に反対はしなかつただろうさ。最後にはお前の言葉で満場一致だったしな。」

「……はい。皆さんには感謝しています。こんな私を貴族会議の一人として数えてくれますし。」

「そうだな。まあ、あいつらを動かしたのは、年齢に関係なくお前自身なのだがな。まったく、息子ながら自分に気付かないのが残念だ……。」

「どついう意味ですか、父上？」

「いや、なんでもない。この話はここまでにしよつ。」

なんだか、はぐらかされた気がするが、おとなしく頷いておいた。

「それで、騎士団はどうだ、ファイア。うまくやっているか？」

「はい、今のところは。この前は乗馬訓練を始めましたし、今日もあります。魔物の討伐にも参加しましたっ?!」

そこまで言ったところで、父に肩をつかまれた。

「魔物討伐!? まさか、もう行ったのか、ファイア! 無所属隊員は参加しないのだろう!?!」

「え? あ、はい。そうらしいんですけど、全パス者は参加するんだ

そうです。」

「ああ、そういえば、そうだったな……全パスは強制参加だった……将来有望で実力があるのは嬉しいが、複雑だ……。」

「あの、父上？」

父は頭を抱えてうなだれている。そういえば、討伐に参加することを言わなかったか。

「きつとく騎士団団長>かく王太子直属兵>かく羽衣騎士>あたりだろうな……身分的には、直属兵か騎士が望ましいな。爵位を継ぐまでなら、ああ、でも騎士なら爵位を継いでいても可能か……。」

よく聞き取れないが、なにか将来を心配させているらしい。

さらに何度も呼びかけているが、返事はない。どうやら、本当に深く考えこんでしまっているらしい。

返事が無いので、つい私も別のことを考えてしまった。今日ある乗馬訓練。乗れる馬がないので、また一人別になるのだろうか。

一週間ほど前にであったあの白馬が、脳裏にちらついたが、もう出会うことはない。早々とその考えを消し、予定にある陣術の訓練について考えた。今日は、壊さないようにしなければ。

そんなおかしな決意を固めているうちに、御者が声をかけてきた。どうやら、もうすぐ王城らしい。時間が経つのは早いものだ。

「父上？もうすぐ王城です、私は降りますよ？」

「……あ、ああ。もう王城か。今日はやけに着くのが早いな。」

「……そうですね。」

「それで、どこまで話した？」

「魔獣討伐のところまでです。それですね、父上。」

「何だ？」

「これから、討伐には参加します。でも、ちゃんと事前にいいます。今回は、黙って行ってごめんなさい。」

「私こそ、取り乱して悪かった。フィアは実力があるからな。」

そう言って、久しぶりに頭をなでられた。久しくなかったものだ。

と、その時馬車が止まった。王城についたようだ。

「それじゃあ、行ってきます。父上。」

「ああ。頑張ってください。」

父と言葉を交わして、私は馬車から降り立った。

48話・白との再会（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

いきなりですが、この小説「空の瞳」の設定&人物紹介のページを作りました。タイトルは「空の国の住人達」です。まだ少ないですが、ある程度は載せましたので、よろしければごらんください。

48話・白との再会

「それじゃあ、お前ら！厩舎にいつて自分の馬を連れて来い。訓練のメンバーの馬は固まって厩舎の一角に居るから、中の者に場所を聞いてくれ。……ああ、まだ馬を選んでない者、解散した後に来い。それじゃあ、解散！」

隊長の声が響くと同時に隊員たちが散っていく。向かう場所はもちろん、厩舎だ。

「ファイア、俺達は厩舎の方に行ってくる。」

「ええ、分かりました。」

もちろん、シディとアダメントも厩舎に向かった。私は一人で隊長に近づく。

「一人か。まあ、今年は全パスは一人だけ、当たり前か。……アスカ、だったよな？」

「はい。私はどうすれば？　今回も別に訓練でしょうか？」

「いいや。今回は、新しく入った馬を見てもらおうと思っただけ。厩舎に行つて、グランっていう人に話しかける。前に会ってるはずだから、分かるだろ？」

「はい。初老の男性ですよね？」

初めて厩舎に言ったときに会った人だ。結構話したから覚えてる。

「そつだ。それじゃあ、行って来い。他の奴等の訓練はすぐ始めるが、お前は急がなくていいぞ。」

「分かりました。」

そつ言う隊長に頷いて、私は厩舎に足を向けた。

「お、来たか、アスカ。」

「はい。お久しぶりです、グランさん。」

「はは、そうだな。よし、ついてきてくれ。新しい奴等はこっちだ。」

厩舎の中でグランさんと合流し、後続く。シディやアーミーとすれ違い、お互いに手を軽く振った。

しばらく進み、グランが歩みを止めた。

「ここだよ。数日前に15頭ほど来たんだ。商会から買ったたり、馬専門の所から買ったたりしてね。」

「毎回、そのくらい買っんですか?」

「そうだね。これより多い時も少ない時もある。これでも少ないほうだよ。」

「そうなんですか……。」

「触ってみなさい、といわれて、私は少しだけ馬たちに近づく。一頭ずつ場所が区切られているわけではないので、一見すると茶色い

ものたちがいっぱいいるようだった。ちょっと面白い。

私が手を上げると、一番近くにいた茶色い馬があとずさった。釣られて、隣に立っていた馬も後ろに下がる。

「んん、駄目か。では、アスカ、そっちの奴等はどうだい？」

言われたほうに視線を転じると何故かそちらにいた馬も逃げるように離れた。

「・・・・・・・・駄目みたいですな。」

どうやら、今回も駄目そうだ。またしばらく乗馬訓練はなしになるだろう。

「ふむ、仕方ないな。・・・・・・・・試してみるか。」

「グランさん？」

手招きされ、言われるままついていく。

「どこにいくんですか？」

「ん？ああ……今からいくところには、今回買った奴がいるだよ。」

「はあ……？」

質問してもそれだけしか返してくれない。一体、どんな馬がいるのだろうか？

と、また唐突にグランさんがとまった。慌てて私も足を止める。

「とある商会から、どうしても言われて買ったらしいんだが、どうにも調教できなくてね。相当気位がたかいんだよ、コイツは。」

そんな馬がいるのか、と驚きつつ、グランさんと同じ方向に眼を向けた。

「あっ……！」

「ん？どうした、アスカ。ああ、驚いたか、こいつは白馬なんだよ。見た目だけなら、貴族相手でも売れただろうにな。」

そう。そこにいたのは、つい一週間前にみたばかりの白馬だったのだ。グランさんは別の方向に勘違いしているようだが、私はこの偶然に驚いた。……いや、商会と聞いてイメージできた人がいる。偶然ではないのかもしれない。

「ここにきていたんですか。久しぶりですね。」

私が近づくと、白馬は逃げることはせずに鼻面を近付けてきた。腕を伸ばし、触れる。

「……予想外でもないところだな。はっきり言えば、驚いたが。そいつは誰かが近づいただけで駄目だったのに。」

それを聞いて、私は魔物討伐に行った時のことを話した。

「ほう、そんなことが。なら、そいつはアスカを主と認めていたんだな。なんとも頭のいい馬だ。いや、頑固なのか？」

その言葉に抗議するように白馬がいなかった。グランさんは驚いたような顔をした後、笑いながら「鞍を取ってくるから待っていない。」と言って、離れた。

苦笑しつつも、馬に向き直ると、澄ました様な顔をしていた。

「偶然ではないかもしれませんが、また会えて嬉しく思いますよ。これからよろしく。」

また、白馬がいなくて、まるで分かった、とでも言いたげに体を振るわせた。

その後、グランさんが持ってきた鞍を白馬に取り付け、礼を言つて厩舎をでた。

外は厩舎のように屋根で日の光が遮られていない。隣にたつ馬の白がさらに眩しく輝いた。

49話・明かせないこと(前書き)

本日分投稿終了。読んでくださりありがとうございます。

49話：明かせないこと

「アス力。選べたようだな。」

「はい。なんとか決まりました。」

「ああ、なによりだ。……本当に、決まってよかった。俺達は助かった。」

「え？」

なにか隊長がぼそりと言った気がする。

「なんでもない。さあ、皆の所に向かいなさい。」

「はい。では、失礼します。」

挙動不審な気がしたが、なんでもないと言われたのでそれ以上聞くわけにもいかず、白馬をつれてその場を離れた。

「ファイアー!!」

訓練場の中に入ると、シディの声が聞こえた。その後ろにはアーミーの姿も見えて、私はそちらに近づいた。

「シュヴァルツ、止まれ。」

手綱を引き、馬を止めてシディが馬から下りてきた。

「白馬か、綺麗な色だな、ファイア。」

「そうですね、シディのシュヴァルツと並ぶとよく分かります。白と黒って対比してますし。」

「ありがとうございます。今、訓練中では？抜け出してきた大丈夫なんですか？」

「問題ないですよ。馬術の訓練は、半分は自習訓練ですから。」

言われるまま周りを見れば、休憩している者もいた。木の下で談笑している者達もいる。

「ファイア、今は自主訓練の時間ですから、僕達が教えましょうか？基礎程度ですけど。」

「アーミーは手綱さばきが初心者が無いけどな。謙遜しなくてもいいぞ。」

「経験者ですから。でも、難しいことはできませんよ。」

「教えてもらえるならありがたいです。では、お願いできますか？」

私の言葉に、二人が大きく頷いた。それぞれの馬の手綱を取って歩き出す。私も後に続いた。

ある程度他の皆から離れたところで歩みを止める。そこで、シデイが切り出した。

「そういえば、フィアはその白馬の名前、決めたのか？」

そういわれてはっとした。思えば、まだ名を決めていなかった。

「失念してました。といっても、どうしましょう？すぐに決めたら、この白馬に悪いですし。フェニアス達みたいに、ちゃんと考えてからにしたほうがいいでしょうね。」

「フェニアス？なにか飼ってるのか、フィア？」

私のつぶやきが聞こえたらしいシデイがそう質問してきた。

「言ってますでしたっけ？相棒がいるんです、フェニアスという名前の。」

「相棒？ 相棒ってなん「フィア、相棒を持っているんですか!？」
……アーミー」

シデイが言い終わるまでに、アーミーが勢いよく言ってきた。そんなに驚くことだろうか？

「どういづことなんだ、アーミー。それって、すごいことなのか？」

「知らないんですか、シディ。相棒とは、意思をもった動物が人間と結ぶ契約のようなものです。血の繋がらない家族であり、兄弟であり、種を超えた友情を結ぶ忠実なる者、といわれています。・・・というか、一般常識ですよ、これ。」

「そうだったか？忘れてたんだな。しかし、よく覚えてるな、アーミー。つまり、フィアのまた新たな事実がすごいってことだろ？」

「軽いですね、シディ。まあ、そうですね。フィアって、聞けば聞くだけいろんなことができてきそうですね。ほら、子供が歌う歌にもある、叩けば叩くだけでくるビスケットみたいに。」

アーミーの何気ない一言に、どきりとした。内心慌てているのを隠して、これ以上聞かれないように話題をそらす。・・・勇気のない自身に、苛立ちを感じたが、黙殺した。

「それで、二人とも。乗馬を教えてくださいのでは？」

「あ、ああ、そうだったな！その白馬の名前は後で決めるんだったよな？決めたら教えるよ。それじゃ、アーミー？」

「そうでしたね、ついつい話し込んでしまいました。では、まずは乗るところからやってみましょうか。」

そうして、訓練は何事もなく過ぎていった。・・・私の心に、少しの不安を残しながら。

「ん？どうした、ファイア。」

「ああ、すみません、二人とも。用事を思い出しまして。午後には戻ってきますけど、昼食は一緒に取れなさそうです。」

「そうか、まあ、用事があるんじゃないな。ファイアは午後は陣術隊だったか？」

「はい、そうですね。二人はどこで？」

「僕は弓術隊、シデイは槍術隊ですね。ということは、次会うのは
帰りでしょうか。」

「そうなるな。まあ、三人とも隊が違うから仕方ないな。それじゃ、
また帰りにな、フィア。」

「いつもと同じ場所で待ち合わせですからね、フィア。」

「はい。ではまた、二人とも。」

ふたりと別れたあと、私は仕事場に向かう。近日中に仕上げなければならぬ仕事があるのだ。しばらくは訓練が半日ではなく一日になるので、早めに片付けることにした。

シデイ達二人含め、騎士団員は白の食堂で昼食を食べているだろう。一緒でないのは残念だが、今日ばかりは仕方がない。

午後までに終わらせよう、と私は足を速めた。

「これで最後、と……。」

最後の書類を置く。時計を見ると、それほど針は進んでいなかった。やっと午前が終わった、という頃だ。

すこしだけ伸びをして、視線をめぐらす。部屋には私一人だ。

父がいると思っていたが、居らず、机の上に「予定変更。午後は領地の見回り。一時帰宅」と書かれた紙が置いてあった。その下には、「フィア、もし来たのならば机と棚の鍵をしつかりと。帰りは扉の術具の起動も忘れずに。」と父の字で書いてあった。どうやら、私のことはお見通しらしい。

そのとおりに机の引き出しと部屋にある棚に鍵を掛け、父と私しか知らない場所に鍵を隠す。もちろん、特定の人物しか取れないように術具にいられてある。機密書類を扱うこともあるので、念にこしたことはない。

最後に部屋を出て扉の術具を起動させれば終了だ。ファルディナ家では私の術具を試すのだが、それがここでも実行されている。扉の術具は、鍵を入れた術具と同じような仕組みだ。特定の人物しか部屋に入ること赦されない。

「とりあえず、行きましようかね。」

昼食を取って、午後の訓練に向かわねばならない。まずは食堂に向かおうかと私は扉に手をかけた。

が、扉を引くと、どうやら外に人が居たらしく。私が引いたのと同時に部屋に入ってきた。

私の顔の近くで、長い銀髪が揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493o/>

空の瞳

2011年11月6日00時36分発行